

マ界少年ユーリ

秋月あきら

プロローグ

魔界ハーデスのとある学園の裏にあるから、その名も裏山！
山そのものは何の変哲もない大盛りの土に、樹木をブツ刺しただけの場所だが、この場所にはご近所さんでも有名なものがある。

一本杉だ。

山頂にある一本杉は、生き字引のウメさん（年齢不詳）の話では、ふる〜くからこの場所にあるらしく、樹齢は数万年とも云われているが、ぶつちやけ樹齡なんてどーでもいい。むしろウメさんもどうでもいい。

重要なことは何か！

実はこの一本杉にはとある伝説があるのだ……。

一本杉の真下で彼女を待っている男子生徒。

しばらくして、小柄な影が制服のスカートをヒラヒラさせながら、ヒラヒラ手を振って現れた。

「待った？」

セミロングが似合う、ちょっぴりボーイッシュな彼女。

ユーリは彼の自慢の彼女で、彼女を連れて歩いていると、いつも周りから嫉妬され、たまに怨恨で殺されかけたりする。それでも彼はユーリを手放さない。まるで“恋の魔法”にかかったように、ユーリ命なのだ。

「ぜんぜん待つてないよ（本当は一時間も待つてたけど）」
ウソをつきながら、彼氏は下を向いていた顔を勢いよく上げた。

次の瞬間、彼氏の鼻水ビロ〜ン
ベチヨ！

見事、ユーリの制服にヒット。ユーリのスカートに白濁した液体がつっ！

彼氏はアゴを外してフリーズした。

ユーリは八重歯を覗かせ満面の笑みを浮かべている。

「あはは、別に怒らないから（マジ死ね！）」

ユーリは笑顔で彼氏の顔面にグーパーチ！

言葉とは裏腹に思いつきり怒っていた。

殴られた彼氏は怒りもせず、すぐにユーリのご機嫌を取ろうとする。

「ごめんユーリ、ここスギ花粉がスゴくてさ。すぐに拭くから
ごめんなあ」

彼氏は必死になってワイシャツの袖でユーリのスカートを拭いた。

だが、ユーリのこめかみがピキツと音を鳴らす。

「大事な制服に鼻血つけないでくれる？（マジ死ね！）」

笑顔でユーリは彼氏の腹を蹴り上げた。
腹を押さえて地面を転がる彼氏の姿。悶絶しながら死相を浮かべている。

そんな彼氏を上から目線で見るユーリ。

「別にアンタなんかもういらぬ。これで終わりにしましよ
う」

これで終わりにしましよ？

その言葉を理解するまで彼氏は時間がかかった。実際は数秒であつたが、彼にとっては母をたずねて三千里くらいあつたのだ。

「ど、どういふことだよ、俺のこと嫌いになつたのかよ！（絶対ユーリと別れたくない、死んでも別れるもんか）」

「嫌いになつたんじゃないの、好きじゃなかつたつて気づいたの（まあ、どーせノリで付き合つてただけだし）」

「俺はお前のことが好きだ。今まで以上に尽くすから捨てないでくれよ！」

「……ウザッ」

本心ポロリ。

下等生物を見るような目つきでユーリは冷笑を浮かべていた。彼氏の中で何かが音を立てて壊れた。

たった一言のキーワード。それは決して言つてはいけない禁断の呪文だつた。

ユーリはトラウマを踏んでしまったのだ！

彼氏は衝動的な犯行に駆られ、あざ笑つているユーリに飛び掛つた。

「お前なんか、お前なんかな！」

ユーリの身体を押し倒して馬乗りになり、今までの怨みを込めてユーリの細い首を絞めた。

このまま二時間サスペンスの序章となってしまうのかっ!?

苦しさで顔を歪めるユーリは足を蹴り上げた。

「死ね！」

股間を直撃

「ぎゃあああつ！」

ホラー映画顔負けの悲鳴を上げて、彼氏は股間を押さえたまま後退りをした。

痛烈な顔の表情と花粉症の鼻水が合体して、放送コードギリギリの顔面だ。こんな顔を人に見られたら首吊って死ねる。

彼氏は首を擦るユーリをビシツとバシツと指差した。

「てめえみたいなヤツと付き合うヤツなんか誰もいねえよ！」

この彼氏は今まで付き合ってきましたが、負けじとユーリが言い返す。

「ふん、アタシのキュートな魅力にかかれば誰でもイチコロよ！」

「あーそうだろうよ。言い寄ってくる男はいくらでもいるだろうよ。でもな、てめえの正体を知って本当に付き合ってくれるヤツなんか誰もいねえよ！」

「はいはい、フラれたからって吠えんじやないの。じゃ、さよなら、制服の賠償請求はあとで執事のセバスちゃんに送らせるから」

ユーリは背を向けて、ヒラヒラと手を振ってこの場を立ち去ろうとした。

しかし、彼氏から衝撃の一言がっ！
「てめえ男だろうがっ！」

やまびこ効果でその言葉がエコーした。

男ファイバー

男だろうが、男だろうが、男だろうが……。

全身を凍らせて立ち止まったユーリ。ちよっぴり突いたら粉々に砕け散りそうだ。もっとも触れられたくない場所をピンポイント爆撃されたいらしい。

今まで呼吸すら忘れていたユーリが息を吹き返し、滝のように汗を流しながら地面に両手をついた。

「はあはあ……」

呼吸を乱しながら地面と『こんにちは』するユーリの顔面は蒼白だ。

彼氏は勝ち誇った笑みを浮かべている。いつの間にか形成逆手していた。

「何か言い返したらどうだよ、オ・カ・マちゃん」

傷に荒塩をたっぷり攻撃だ。

「アタシが……（オカマ……なんかじゃない。身体はちよっぴり間違つて生まれてきちゃったけど、アタシは真正正銘の……オ、オカマなのかああ〜）」

ユーリちゃんシヨック！

倒れた相手をさらに上から踏みつけるのごとく、彼氏の猛攻撃が開始した。

「別れたいって言うんだっいたらそれでもいいぜ、学校中にてめ

えが男だつてバラすからな！（インターネットにも書き込んで、素っ裸の盗撮写真もバラまいてやる）」

うなだれていたユーリが背を向けながらゆらりと立ち上がった。

そして、振り向いた顔はブリツ子スマイル！

「ごめんなさい、アタシが悪かったあ……って言うかポケッ！」

ビシツとユーリは彼氏を指差して叫ぶ。

「ゆけつ、セバスちゃんキック！」

必殺技が木霊したと同時に、物陰から燕尾服を来た影が登場。

彼氏の顔面目掛けてキック！

彼氏とセバスちゃんは仲良く揃って崖の下に転落した

もはやユーリは崖の下すら覗く気ゼロ。

「……死んだな。よし、アタシは何も見えない、何もしてない、ここにすら来なかった。さーってと、偽装工作しなくっちゃ！」

一本杉の伝説　ここで別れ話したカップルは絶対に破局できる。不幸になる特典つき。

第1話 マ界のマの字はオカマのマ

人間が住んでいるガイアには魔導三大国が存在する。

ガイア聖教の総本山がある聖都アーク、蛇神レザービトゥルの伝説が有名な古都メミス、そして近年になって三番手に躍り出たのが魔導産業国アステアだ。

白銀の羽毛に包まれた優雅な翼を広げ、ホワイトドラゴン“ヴァツファート”が地平線まで伸びるシーマス運河の上空を飛空していた。

丘の上に聳え建つアステア城が見下ろす王都アステア。

ヴァツファートの羽根が、市場で活気付く中央広場に舞い落ちた。

広場の前に建てられた天突くシルヴィーノ大聖堂を一周し、ヴァツファートは石畳が敷き詰められたメインロードの上空を優雅に舞った。

魔導産業国と名高い王都アステアは治安もよく、裕福な階層が多く住み、魔導関係の仕事についている者も多い。

中央広場近くは石造りの家が主流で、三角屋根を乗せた三、四階の建物が目に付く。

ヴァツファートが東居住区に翼をはためかせると、庭付きの平屋や二階建ての建物が多く見られるようになる。

町を一周したヴァツファートは、グラールシュ山脈の奥深くに

ある住処へと戻って行った。

その途中、舞い落ちた羽根がとある若者の手に乗った。

「あれえ、雪かなあ」

魔導衣まどういを着た若者は、グルグル眼鏡の奥から青空を見上げ、不思議な顔をしてからクラウス魔導学院に入って行った。

クラウス魔導学院はアステア王国が世界に誇る魔導学校だ。在籍期間は六年間、人間がストレートで入学卒業できたら、だいたい十二歳〜十八歳の年齢となる。が、外国からの留学生や、人間以外の種族も在籍しているために、年齢の幅は多岐に渡っている。

今日も学院はいつもと変わらず、生徒の悲鳴や爆発音、廊下で攻撃魔法をぶつ放すアホ教師の姿が見受けられた。

そんなこんなであつという間に放課後になり、ルーファスは追試のために召喚実習室に呼び出されていた。

「ルーファス、遅いぞ！」

黒魔導教員ファウストの一喝がいきなり飛んできた。ネチっこい声がいつまでの耳に残る。

「ごめんなさあ〜い、ファウスト先生え（カーシャがいきなりホワイトプレスなんか撃つんだもん）」

謝りながらルーファスは一本に束ねた長髪頭を掻いた。アールグレイ色をした髪の毛の間から壁の破片が落ちた。どうやら何かの爆発に巻き込まれたらしい。

ため息を漏らしたファウストは、魔導具がジャラジャラ付いた身体を翻し、気を取り直して実習室の奥に入って行った。

これから行う追試は悪魔の召喚だ。決められた悪魔を召喚して、使役することができれば合格となる。

慣れた手つきでルーファスは準備を終え、あとは呪文を唱えるだけとなった。とてもスムーズで、追試を受けている者とは思えない手際の良さだ。

ファウストは腕組みをしながら厳しい顔で見守っている。

「もういい加減、魔導書を見ずとも呪文を覚えただろう？（これで何度目の追試だったか……）」

「いいえ、あのお、魔導書見ながらやります」

「……よかろう（こんな出来の悪い生徒がなぜ入学できたのだ？ ルーファスもかれこれ四年生か、よく退学にならずにもったものだ）」

ファウストは長い前髪を掻き上げながら頭を抱えた。

お香を焚いたルーファスは魔法陣の前に立ち、グルグル眼鏡を魔導書にくつつけながら、絶対に一字一句間違えないように詠みはじめた。

「コホン、ええっと……（この文字なんて読むんだったっけ？）」

しよっぱなから行き詰るルーファス。先が思いやられる。

それでもなんとか、最後の一句まで無事に詠み終わり、気合を入れてルーファスが叫ぶ。

「出でよ、インぶはっ!？」

鼻血ブー!

突如、魔法陣から飛び出した影に膝蹴りを喰らい、ルーファ

スは鼻血ブーしながら転倒した。

仰向けに倒れたルーファスの視線に入る美脚。その上には可愛らしい女の子（ルーファス主観）の顔があつた。

謎の女の子は慌てた様子でルーファスの鼻血をハンカチで拭いた。

「大丈夫ですかあ、ごめんなあ。損害賠償はさせていたいただきますから、あとでウチの執事と話し合ってくださいあい（つたくなんで ゲート を出た途端に人とぶつかんなきゃいけないわけ）」

ブリツコな言動と裏腹の心の声 ユーリだった。

すべてを見ていたファウストは眉間にシワを寄せている。

「ルーファス、失敗だ。これで何度の目の追試だと思っているのだ！」

「ご、ごごごごご、ごめんなさあ〜い」

ルーファスは瞬時に正座して心の底から謝った。

この状況を観察していたユーリはすぐに事情を飲み込んだ。

「（オーデンブルグ家の家訓その一 恩は売れるだけ売つとけ）あのお、追試験に失敗したのはこの人のせいじゃないんですう、アタシのせいなんですう」

ユーリはキラキラな瞳でファウストに直談判した。

上目遣いで見つめるなんちゃって美少女を前に、ファウストは顔色一つ変えなかつた。

「私に媚を売っても無駄だぞ。正当な理由があるのならば聞くが、それ以外ならば即却下だ」

ユーリは輝く瞳攻撃をなかつたことにして、真面目な優等生の顔を作った。

「実はわたくし、悪い奴らに追われておりまして、その途中でたまたま ゲート の歪みを見つけ、本来召喚されるはずだった者の横は入りをさせていただき、ワームホールに飛び込んだところ、こちらへ出てしまつたわけです（ウソだけど）」

ウソかよ！

その話を聞いたルーファスの眼鏡レンズが輝いた。

「ファウスト先生聞きました？ これって前回と前々回の追試と同じパターンですよ。僕に過失がないなら、これって無効ですよ、ね、ね？」

「うむ、たしかにビビの一件と同じだが、さすがに何度も見逃すわけにもいくまい」

「そんなあ、そこをどーにかこーにかなりませんか？（まだ一学期も終わってないのに赤点なんか取れないよお）」

ルーファスは鼻水をすすりながら今にも泣きそうだ。でもファウストは眉間にシワを寄せたまま無言。

いきなりルーファスの後頭部がわしづかみされ、一気におでこを石床にゴン！

「このへつぽこもこんなに謝ってるんです、許してあげてもらえませんか？」

無理やりルーファスに土下座させたのはユーリだった。

もちろん慈善活動でユーリはルーファスを助けてるんじゃない。
い。

恩は売れるだけ売っとけ！

そして、ユーリはこの世界で、とにかくなんでもいいから、さつさとコネクションを作るつもりだった。なんでもよくなきゃ、こんな情けないルーファスなんか眼中にない。

実はユーリ、魔界ハーデスに居づらくなって逃亡して来たのだ。その理由とは、元彼に男だつて学校中にバラされ、ネットの匿名掲示板にまで書かれてしまった。もうユーリちゃん絶望だった。

バラされる前に金で解決しようとしたが、元彼の意思は頑固オヤジのように固く、最後は暗殺まで目論んだがすべて失敗。そこでユーリは一つ大きなことを学んだのだった。

世の中、金の力でもどうにもならないことってあるのね、テヘツ

そんなわけで、コッチの世界に知り合いゼロ、これから行く宛もないユーリは、誰かの助けを借りなきゃ生きていけないのだ。温室育ちだから。

ユーリはルーファスの頭を持ち上げ、もういつちよ床にゴーン！

「へっばこが血の涙を流して謝ってるんです。どうか、どうか恩情を！」

血の涙ではなく、単なる激突による出血だったりする。

ここでついにファウストが折れた。

「よかろう、ただし今回は条件をつけるぞ。この契約書にサインしてもらおう」

でたーっ！

知らない人のために説明しよう！

黒魔導使いファウストの悪魔の契約書。

生徒や教員の間では知らぬ者がいない契約書だ。この契約書の効果は絶大で、契約を破った者は地獄の果てまで命を狙われるハメになる。この学院のある爆乳教師も、ファウストに借金をしているため、いつも顔を遭わせるたびに生死を賭けた戦い繰り広げているのだ。

それを知っているルーファスがサインするハズがない。

「(死んだほうがマシっていうか、赤点でいいや)」

と、思ったのだが、手が勝手に……まさかオカルト業界で有名な自動筆記というやつかっ！

違った。

ユーリが二人羽織り状態でルーファスの手を動かし、勝手に契約書にサインしていた。

「さっきルーファスって呼ばれてましたよね、綴りこれで合ってますか？」

「あ、合ってるけど……じゃないよ、なに勝手にサインしてるの」

ルーファスの名前が書かれた契約書をファウストが拾い上げた。

「契約成立だ。ルーファス、契約を破ったときは……覚悟しておけ、クククッ」

魔導具をジャラジャラ言わせながらファウストは闇の奥へと

姿を消した。

「今の無効だし、クーリングオフしますオフ！ ちょっと君からも何か言っ……いないし！」

ユーリはルーファス独りを残してとつくに姿を消していた。
ルーファスショック

とりあえずルーファスに恩を売ったが、あんまり役に立ちそうもなかったので、ユーリは別のコネクションを探しに学院を散歩した。

放課後ということもあって、すれ違う生徒の数は少ない。制服はないようで、みんな自由な格好をしているために、ユーリが歩いていても誰も目に留めなかった。

大きな中庭に出たユーリは空を見上げた。

「……綺麗、これが青空なんだあ」

羊雲がプカプカお空を飛んでいた。それははじめてユーリが見た青空だった。魔界ハーデスには夕焼けと夜空しか存在していないのだ。

ユーリがぼーっと空を眺めていると、ふわふわした声が掛けられた。

「空が好きなのかい？（ふにふに）」

中性的な声だった。

驚いてユーリは眼を丸くした。

「神！」

ユーリの眼に映ったのは、空色ドレスの麗人。ショートカット

トの空色の髪の毛、エメラルドグリーンに輝く瞳、お人形さんのような顔は中性的で可憐だった。

とつてもよくユーリはこの空色ドレスさんを知っていた。

「ローゼンクロイツ様ですよね！（まさか、こんな偏狭の地でお逢いできるなんて、アタシって幸せ〜）」

「そうだよ（ふにふに）」

「ローゼンクロイツ様もこの生徒なのですか？」

「うん（ふにふに）」

「（ということとは、ここはノースのアステア王国。たしかローゼンクロイツ様の通われている学校の名前はクラウス魔導学院だったハズ）」

ノースとは人間たちの言葉でいうところのガイアである。ガイアとは人間たちが住んでいる世界の名。けれど、他の世界の住人から見れば、ガイアとは全ての世界を示す言葉であり、人間たちの住む世界はノースと区別して呼ばれている。

ユーリはローゼンクロイツの手を取って、ガシツと胸の前で握った。

「弟子にしてください？」

「ん？（ふにゆ）」

「アタシ、ローゼンクロイツ様のファンなんです。ファンクラブだっていくつも掛け持ちしてますし、ネットでの情報収集も欠かしません！」

「……ふ〜ん（ふあふあ）」

まったく興味なし！

冷たい態度というより、心ここにあらず状態だった。魂が常に離脱している。

ユーリは決意を固めていた。

「（向うには帰れないし、この学校に編入してみせる。そう、すべて崇高なローゼンクロイツ様のため!）」

よっし、と拳を握ってユーリが辺りを見回すと　　いないし!

いつの間にかロークロイツの姿が消えていた。

慌ててユーリは走り出した。

「もお（もつと親睦を深めて綺麗になれるコツとか教えてもらいたかったのに!）」

学院中を走り回っていたユーリが廊下を曲がろうとしたとき、
ぼよ〜ん

弾力のある二つのボールにユーリが顔面ダイブして、そのまま反動で後ろに吹き飛ばされて尻餅をついた。

「イタタ……（ったく、どこ見てんのよ、このオバさん!）」
そこには爆乳の美女が立っていた。ユーリが当たったのはボールではなくソレだった。

オバさんと呼ぶには美しい大人の妖女。光り輝く長い黒髪、雪よりも白い肌、血のように紅い唇、ボディラインを強調したドレスは、胸の谷間に武器を仕込めそうだった。

むしる爆乳が武器!

氷の女王のような冷たい瞳で、妖艶な女は尻餅をついているユーリ見下していた。

「お前、この生徒ではないな？」

いきなりバレた！

だが、ユーリは慌てず騒がず、何気なく立ち上がってスマイル炸裂。

「あはは、この生徒ですよ。ここって生徒数が二千人以上いるから、アタシなんかの顔を覚えてないの当然ですよ、あはははは」

妖女はユーリの胸倉を掴んで、自分の顔にグツと近づけた。

「嘘をつくでない。お前のような特殊な人種を妾が嗅ぎ分けられぬとも思っておるのか？」

ユーリの見た目は人間と変わらないが、実際はヒト型系の魔族。こんなにあっさり見破られるとは、おそらくこの妖女はこの学院の教員だ。

が、この妖女の次の言葉はユーリにとって予想外だった。

「お前からはローゼンクロイツと同じ臭いがする……男だな？」

「っ！」

それに関しては絶対見破られない自信があっただけに、もう言葉も詰まって出てこなかった。

ちなみにローゼンクロイツも女装っ娘である。だからユーリに神と呼ばれたのだ。

まさかの出来事にユーリは床に両手をついてうなだれた。

「……ありえない（最大のヒミツを握られるなんて、オーデンブルグ家の家訓その二 弱みは握っても握られるな）」

シヨックを受けるユーリを見ながら、この妖女はあることを悟って艶笑した。

「ふふふっ、どうやら人に知られたくない秘密だったらしいな（秘密は暴くためにある、ふふっ）」

落ち込んでいてもはじまらない、ユーリはシャキッと立ち上がった。

「示談で解決しましょう。いくら払えば記憶から抹消してくれますか？（このヒミツだけは何としても隠さなきゃ。また逃亡しなきゃいけない）」

「金で解決だと？ そんなことをしたらつまらないではないか。ふふふっ、これからお前は一生妾の奴隷となるがよい」

「（「ロスしかない！」）
胸に灯る邪悪な炎。」

どこか人目の付かない場所に誘導するか、独りになったところを闇討ちするか、とにかく殺るしかないとユーリは誓った。

そんなところへ元氣いっぱいの声が飛び込んできた。

「やつほーカーシャ」

桃色ツインテールがぴょんぴょん跳ねてやって来る。パンクファッションの可愛らしい女の子だった。もちろん厚底は一〇センチ以上だ。

カーシャと呼ばれた妖女はつまらなそうな顔をして返事を返す。

「うむ、ビビか。まだ帰っていなかったのか？（こいつ一年三六六日、いつ会っても元氣だな）」

「うん、ルーちゃん探してるんだけど、どこにもいなくて（追試だって聞いたから、ずっと待ってたのにい）」

「ルーファスならとくに帰ったのではないか？（それかまた召喚に失敗してトラブルに巻き込まれたか……ふふっ、そこまでヤツもへっぽこではないか）」

「そこまでへっぽこでした、ごめんなさい！」

「見事に失敗して今ここにいるユーリちゃんを呼び出してくれちゃいました、ごめんなさい！」

「ビビは拗ねたようにほっぺを丸くした。」

「まあ、ルーちゃんったら、放課後一緒にメルティラヴの新作チョコケーキを食べようって約束したのにい」

「ユーリの眼がキラーンと光って、ビビの手を強く握り締めた。アタシと一緒に食べに行きましょう！アタシ、チョコレートが好きなんです」

「ホントお？ うんうん、じゃ一緒に行きこっ」

「そのあとは夜の街をデートして、疲れたらホテルに直行しましょう！」

「え、えええ？（なに言ってるんだらうこの子？）」

「はじめて見たときから好きでした、付き合ってください！（あーついに言ってしまった）」

「えーっ」

「ビビは目をまん丸にして口もまん丸に開けた。」

「慌ててビビは握られていたユーリの手を振り払った。」

「ええっと、好意は嬉しんだけどお……あたしノーマルだし、

そっち系の趣味はないかなあっていうか、好きな人がいるんでごめんなさい！」

ビビ逃亡！

走って逃げるビビは、廊下の先にいたとある人物を見て、アツとした顔をしたが、そのままユーリから逃げるために消えてしまった。

フラれて落ち込むユーリを見つめるカーシャの目は疑問に満ちていた。

「お前、女が好きなのか？（女装を知られたくないということ）は、てつきりローゼンクロイツと違って男が好きなのだと思っただが……」

「……ノーコメント（アタシにもわからない、前に付き合っていたの男子だったし、でもそうなんじゃないかあって思ってた）りして……だから元彼のこと好きじゃないって気づいて別れたんだけだ）」

ユーリの頭は混乱していた。

桃色ツインテールのビビを一目見たときから、胸がドキドキしてテンションが上がってしまった。

床に両手をつけて落ち込んでいるユーリの肩に、ポンと誰かの手が乗せられた。

「大丈夫、どうしたの？」

ユーリが顔を上げると、そこにいたのはルーファスだった。

「君のこと探したんだよお、いきなりどこかに消えちゃうし大変だったんだから（結局ファウスト先生には契約無効にしても

らえなかつたし」

ルーファスはユーリに手を差し伸べたが、その手を借りずにユーリは立ち上がった。

「大丈夫です、ちょっと持病の貧血に襲われただけですから（ウソだけど）」

「本当に大丈夫なの？」

「はい、もう大丈夫です。心配してくださいなさってありがとうございます。いただきます。それよりも、アタシのこと探していたんですね？」

「そうそう、ファウスト先生にさ、『自分で呼び出した悪魔は自分で面倒を見る。さもなければ赤点決定だ！』って言われちゃってさ（今のモノマネなかなかイケてたなあ）」

「そうですか（こつちに知り合いもないし、しょうがないからこいつの世話になるしかなさそう）」

ルーファスに顔を背けたユーリはあからさまに嫌そうな顔をしたのだった。

ルーファスに保護されたユーリ。

互いに簡単な自己紹介を済ませて、とりあえず学院近くの飲食店にでも行こうということになった。

ユーリはルーファスの背中を追いながら考え事していた。

「（さっきのビビちゃんが約束してたのって、この“ルーファス”だったのかな。でも目の前にいる“ルーファス”は約束なんてしてないようすだし、もしかして忘れてるだけ？）」

ルーファスは難しい顔をしていた。

「（なにか大切な約束があったような気がするけど……覚えてないってことは、忘れてもよかったことなのかな）」

ええ、すっかりルーファスはビビとの約束を忘れてます！

だが、ここでルーファスは思い出した！

「そうだ、ローゼンクロイツに用事があったんだ」

そっちなかい！

ビビとの約束は忘却の彼方だった。

ルーファスの口からその名を聞いて、ユーリは瞳を大きくビツクリ仰天。

「ローゼンクロイツ様とお知り合いなんですか？（まさか、こんな凡人以下の人間と？）」

「うん、生まれたときからの幼馴染だよ（あれ、ローゼンクロイツのこと知ってるんだ？）」

「はあ」

思わず素が出た。ですます口調の仮面がもろくも崩れ落ちた。すぐにユーリは仮面を被り直した。

「ええと、幼馴染とはどの程度のレベルのでしょうか？（ありえない、幼馴染だなんて、憧れのシチュエーションじゃないー！）」

「ローゼンクロイツが孤児なのは知ってる？」

「はい、こちらの暦だとアルティエル暦2202年1月1日生まれ、血液型はA B型。とある修道女に拾われ、ケルトン魔導幼稚園卒、アルカナ学園卒、今はクラウス魔導学院に通う四年生です。ネットではファンクラブも存在していて、最大のファ

ンクラブは薔薇十字団、もちろんアタシも入会してます！」

「あ、く、詳しいね（この子もローゼンクロイツのストーカーなのかな。薔薇十字団って二年生のアインが立ち上げたんだっ
たよなあ）」

「はい、ローゼンクロイツ様は神ですから！（ああ、そんな神と同じ学院内にいるなんて）」

ルーファスは苦笑いを浮かべながら話を戻すことにした。

「実はさ、ローゼンクロイツを拾ったのは私の母だったんだ。それで私とローゼンクロイツは幼いころは一緒に育てられたんだ」

「一緒に入浴もしたんですか？」

「小さいころはよく入ったよ、今は絶対にならないけど（ローゼンクロイツはそっち系じゃないけど、それでも一緒にお風呂に入るのはちょっとなあ）」

「あはは、そうなんですか（クロス、ローゼンクロイツ様の裸体を見ただなんて、その眼を抉ってカラスのエサにしてやる。

……嗚呼、でもローゼンクロイツの裸を見られるなんて……）」

ユーリの鼻からツーツと赤い液体が伸びた。

「大丈夫、鼻血出てるよ？」

「えっ、だ、大丈夫です。持病でたまに鼻血が出てしまうんです（ウソだけど）」

慌ててユーリはティッシュで鼻血を拭いた。

ルーファスは心配そうな顔をしてユーリを見つめている。

「本当に大丈夫？ さつきは貧血で今度は鼻血で、あまりムリしちゃうだよ。私にできることがあるなら、なんでも言っ
ね？」

なんでも言っ
てね。

そのフレーズを耳にしたユーリは微かに笑った。邪悪な笑
みだ。

急にユーリはルーファスの胸に飛び込んだ。

「本当になんでも言っ
ていいの？」

ユーリは潤んだ瞳で甘えた表情を作っ
てルーファスの顔を覗
き込んだ。

生唾を飲み込んだ音がした。

「ぼ、僕にできることならなんでもするよ」

「じゃあ、アタシのために死んで」

「できるかーっ！」

ルーファスは思いつきりユーリを突き飛ばした。

ユーリシヨック！

ここ最近シヨックなことが多すぎる。

しかも、今回のシヨックはユーリに絶望の烙印を押し付けた。

「……ありえない（絶対に 魅了 の力を使ったハズなのに、
ビビちゃんを落とせなかったときから、まさかと思っ
てたけど……アタシただの人になっ
ちゃった）」

床に両手をついて落ち込んでいるユーリを心配そうにルー
ファスは見
ていた。

「押しちゃっ
てごめんね、大丈夫だった？」

「大丈夫じゃない」

「えっ、どこかケガしちゃった？」

「……違う（サキユバスが 魅了 の力を失ったら、なにが残るっていうの？）」

サキユバスは夜魔系ヤマの魔族である。妖艶な種族として知られ、生まれたときから他を 魅了 する力を持つ。 魅了 とはつまり、他を自分に惚れさせ、思うが俣に操る一種の魔法だ。

その力をユーリは失ったのだ。

「ありえない、ありえない……アタシは……（落ち着けアタシ、アタシはユーリ・シャルル・ドウ・オーデンブルグ、超大金持ちのオーデンブルグ家の長女。そうだ、まだアタシには金という世界を動かせるツールを持っている！）」

急に元気を取り戻したユーリはピシッと立ち上がって、ポケットからサイフを取り出そうとした。

「愚民ども、この黒く輝くクレジットカードを……っない」

サイフがない！

ユーリシヨック

あまりの絶望にユーリは廊下で野垂れ死んだ。

ずっとユーリを身も守っていたルーファスは難しい顔をしている。

「（この子、頭イタイ子じゃないのか……）」

元気になったり、落ち込んだり、一連の行動は他人から見ると奇行だった。

ここでルーファスはハツとした。

「まさか……（僕が押し飛ばした拍子に頭を打って、頭が可笑しくなった）」

ルーファスシヨック！

慌てふためくルーファスはユーリを抱きかかえた。

「起きて、死なないで、僕を殺人犯にしないでっ！」

「あはは、もういっそのこと殺して……」

ユーリは死ぬ気満々だった。

前の学校に居られなくなつて逃避行。知らない土地で無一文。頼れるのはルーファスだけ。

頼りにならないよ！

絶望だった。

ユーリは眼をつぶつて幼いころの記憶を辿つた。

優しくつたお兄様。家族の中で唯一ユーリに理解を示してたお兄様。

「（嗚呼、お兄様……貴方は今どこで何をしておられるのでしょうか。貴方だったら、今のアタシにどんな優しい言葉を……抱きしめて欲しい、愛して欲しい、お兄様に逢いたい）」

ユーリの記憶、優しくしてくれた長男のアーヤは、幼いころに旅に出ってしまった、今でも行方不明のまま。回想に出てくるお兄様の顔は、いつもものつべらぼうで顔が思い出せない。こんなにも想っているのに、お兄様の顔がどうしても思い出せなかった。

「（つたく、クソ兄貴の顔は思い出せるのに）」

次男のクソ兄貴の顔を思い出したユーリは、ついでに数々の

「嫌がらせされたことを思い出し、頭に血が上ってくると身体
そこから力が湧いてきた。」

「（なんか腹立ってきたら生きる希望がでてきた。オーデンプ
ルグ家の家訓その三 金がないなら自分で稼げ）」

ついにユーリは復活した。

「よし、まずは（ローゼンクロイツ様の友達になって、ビビち
やんとも仲良くなつて、サキユバスの力も取り戻して、新しい
生活をはじめめるために住む場所とお金、なにかぼる儲けできる
商売もはじめなきゃ。代々商人のオーデンプルグ家の末っ子を
舐めるんじゃないわよ！）」

ユーリはルーファスの瞳を見つめ、可愛らしい顔でお願いの
猫なで声を出した。

「あのお、アタシこの学院に編入したいんですう」

「はい？」

「実は……アタシのお父様は偉大な魔導士なのですが、その父
が病で床に伏せていまして、もう長くないらしいんです」

「それは……お気の毒に（そんな辛いことを背負っていたなん
て）」

「それでお父様はアタシにも偉大な魔導士になって欲しいと……
アタシ、だから絶対に立派な魔導士にならなきゃいけないん
です。ノースでも名高いクラウス魔導学院を卒業したら、きつ
とお父様も喜んでくれるはずなんです！（まあ、全部ウソだけ
ど）」

ウソかよ！

ユーリの熱演にまんまとルーファスは騙された。しかも、感動してグルグル眼鏡の奥で涙を流している。

「わかった、どうにかするよ。本当は簡単に編入できないけど、きつとカーシャならどうにかしてくれるよ。さあ、行こう！」

ルーファスはユーリの腕を無理やり引っ張って歩き出した。作戦の第一段階は成功したのだが、ユーリはとつても不安をだっただった。

「（カーシャって、さっきあつたオバさんだよ……ルーファスと再会したときには、いつの間にか姿消してたし。あんまり信用できない）」

それでもとりあえず行くしかなかった。

クラウス魔導学院にあるカーシャの研究室。というか、個人的な部屋。

ロウソクの明かりだけの薄暗い部屋で、カーシャはピンクの湯のみで茶を飲んでいた。

「で、妾に何の用だ？（こいつの方から妾を尋ねて来るとはな）」

カーシャの黒瞳が見据えているのはユーリだった。

「どんな非合法なことでも困ったことがあれば、この生徒はカーシャ先生に相談に来るとルーファスに聞いてきました」

ルーファスはユーリの横でうなずいた。

「そうなんだ、ちょっと難しいお願いなんだけど、カーシャだつたらどうにかできるかなあつて」

「妾に不可能なことはない。言うてみる」

自信満々にカーシャは爆乳を揺らした。

まずはこのお願いからユーリはすることにした。

「この学校に編入できないでしょうか？」

「ほお、名門クラウス魔導学院に編入か……妾の力を持つてすれば偽造文書など簡単にできるが、いくら出す？」

悪徳商売だった。

もちろんユーリは一文無しだ。

ユーリは横目でルーファスを見て、肘で彼の脇を突付いた。

「私が払うの？ ムリだよ、私だって今月は苦しんだから（来月の仕送りまでまだあるなあ）」

「元はといえば、ルーファスがこの世界にアタシを召喚したんですよ。ちゃんと責任を取ってもらわないと困ります、損害賠償請求の申し立てしますよ？」

「そ、それは……（ユーリが勝手に召喚の邪魔したんじゃ……でもやっぱり僕のせいなのかなあ）」

二人の会話を聞いていたカーシャは鼻で笑った。

「ふふっ（またルーファスのヤツ、召喚を失敗しおったのか。）

今月に入ってルーファスが失敗した召喚は、妾が知る限りでも五回はあるな。みな騒動になったお陰で妾は退屈せんで済んだがな……さすがへっばこ魔導士、ふふっ）」

一回目、新年度はじめの実技テスト。

二回目、その追試でビビを召喚する。

三回目、再追試で失敗しないために練習中、異界の魔物を呼

び出してしまっ。

四回目、再追試でビビの母親を召喚する。

五回目、再々追試でユーリを召喚する。

ちなみに全部、不慮の事故が原因で失敗している。

カーシャは生徒の間でも有名な四次元胸の谷間からせんべえを出し、ポリポリしながらあっさりさっぱり簡単に返事を出した。

「わかった、金は後払いでもよい。編入の手続きをしてやる」

「本当ですか？」

ユーリは身を乗り出して飛び上がった。

「本当だ。ただしそちらが約束を破るようなことがあれば……
わかっておるな（両生類？）」

ええ、弱みを握られていますものね！

ユーリは深く頷いた。

「ありがとうございます（……足元見やがってオバさんめ。商売人として屈辱だ）。あと、ほかにもお願いがあるのですが、聞いてもらってよろしいでしょうか？」

「なんじゃ？」

「住むところがないので手配してもらえますか？」

「学生寮を用意してやるう、それはサービスでやってやる」
本当にサービスですか？

実は恩を売るためとか、あとで料金請求とかしそうだ。

「（ちっ、学生寮か……今は仕方がないな）。もう一つお願い

があるのですが？」

「まだあるのか？」

「サキユバスの力を取り戻す方法をご存知ですか？」

「お前、力を失ったのか？（やはりサキユバスか。だがそれにしてはフェロモンが足りんと思っていたが、力を失っていたためだったのだな）」

力を失ったことはサキユバスとして恥。それを口にするにはユーリにとって耐え難いことだったが、治療する方法を探さなくてはいけない。

「はい、おそらく何もかも失いました（あはは、サイフまでなくしたし）。今のアタシはただの人間と同じです（可愛さは負けないけど）」

「調べてやるう。サキユバスの力を失っても、生きていくことは可能だ（同属からバカにされながらな、ふふっ）。それとも早く取り戻したいわけでもあるのか？」

「あります！」

ユーリは身を乗り出してカーシヤの眼前まで迫り、言葉を続けた。

「愛する人ができたから、絶対に落としたいんです！」

その言葉を聞いたカーシヤの瞳が輝いた。

「ふふっ、青春だな！ よかるう、治す方法はわからんが、惚れ薬なら調合してやるう！」

「本当ですかカーシヤ先生！」

ユーリとカーシヤ互いに手と手を取り合った。なんだか二人

の仲がグツと近づいた感じた。

「有料だがな！」

このカーシヤの一言でグツと二人の距離は遠ざかった。

「あはは、やっぱり有料ですか！（やっぱりこのオバさん嫌いだ）」

笑顔全快のユーリ。ちよっぴり握る拳に力がいっていたカーシヤは胸の谷間から分厚い本を取り出した。

「たしかこの本に材料が……ほとんど学院の保管庫からパクれば大丈夫だが、マンドレイクの在庫が切れていたな。街の魔導シヨップで買って来い」

さらにカーシヤは本を読み続け、急に難しい顔になった。

「問題はこれだな」

テーブルの上に本を広げ、カーシヤの長い指が差したのはリノゴの絵だった。

「楽園にあるという“ロロアの林檎”だ」

ロロアの名前を聞いてユーリは即座に反応する。

「ロロアはアタシが生まれた月の守護神です。愛の女神ロロア、その美しさは鏡にも映せないと聞いたことがあります」

「そうだ、マンドレイクと“ロロアの林檎”を用意したら、惚れ薬をすぐに作ってやろう。ただし……」

「ただし？（金の話かな）」

「愛の秘薬は十五歳未満は使用禁止だ。お前いくつだ？（魔族の歳はわかりづらいからな）」

「じゅう……じゅうさんさい……ですけど、やっぱり十五歳っ

てことでお願いします！」

「うむ、まあよかるう（別に使うの妾じゃないもんね〜！）」

ここまでユーリを連れて来ただけで役目を終え、会話に参加せずにせんべえを食べながらマンガを呼んでいたルーファスに、鋭いカーシャの眼が向けられた。

「お前も行くのだぞ？」

「はあ？　なんで私が行かなきゃいけないの？」

「お前が召喚した娘であるう。男として責任取ったらどうだ

（ビバ婚約……ふふっ）」

「う〜ん、たしかにね。召喚した私が責任を取らなきゃ……（つて本当に僕の責任なのかな、なんか違うような気がするんだけど）」

でも、結局ルーファスもユーリの材料探しに同行することになった。

魔導産業で栄えたアステア王国。その王都には数多くの魔導ショップが点在する。

今回ご紹介いたしますのは、魔導ショップ“鴉帽子”！

三角帽子を被りたいかにも魔女のお姉さんが主人のお店で、魔導の腕前はかなりのものです。中でもクスリの調合に関してはエキスパート、金さえ払えばどんなクスリでも調合してくれます。

もちろん裏ルートからの仕入れも豊富です

そんな店の常連であるルーファス。

「いらつちやいませ」

童顔の女主人がルーファスとユーリを出迎えてくれた。童顔のクセにカーシヤに勝るとも劣らない、スイカップの持ち主だ。「マリアさんこんにちは」

ルーファスは軽く挨拶をしてカウンターの前に立った。

「今日はどんなお薬をお求めですかあ？ ルーたんのためにちやんと胃薬も用意してますよお」

「ええつと、じゃあ胃薬をもらおうかな。それとマンドレイクが必要なんですけど」

「少々お待ちくださいあい」

マリアは後ろの薬箱の中からマンドレイクを探している。

ユーリはその間に店内を見回した。少し暗めの照明が店内を照らし、どこにでもありそうな内装だった。

が、ユーリは気づいていた。

何かが煮え立ったような臭いはいいとして、店の奥から謎の悲鳴が聴こえて来る。それも一つ二つではなく、地獄の釜で煮立つ人間の悲鳴のようだ。

店の妖しさを感じつつも、クスリのエキスパートだとルーファスに聞いている。ユーリは惚れ薬の調合をしてみらおうか悩んでいた。

絶対にカーシヤは足元を見てくる。あんな人にわざわざ恩を売られることもない。

マンドレイクを見つけたマリアはそれをカウンターに乗せた。「まずはマンドレイクね。あとは胃薬を……そうだ、ルーたん

そっちの子、もしかして彼女お？」

「マリアの手がルーファスの見えないところで動いている。そんなことにもまったく気づかないルーファス。」

「えっ、違いますよ。友達です友達、ユーリっていうんです」

と、ルーファスがユーリに顔を向けた瞬間、またマリアが何かガソゴソと動いた。

「素っ気無いフリをしながら眼を凝らしていたユーリは、マリアがドクロマークのついているピンを持っていることに気づいた。」

「絶対に怪しい！」

「な〜んだ、お友達なのねえ。こんにちわぁユーリたん」

「はい、こんにちは（手元で怪しいことしながら、絶対に表情に出さない。この女できる！）」

「マリアは何気ない顔をしながら、カウンターの下からクスリの小瓶を出した。」

「はい、ルーたんの胃薬。またちょっと調合の仕方を変えてみたの、今度こそ効くと思うわぁ」

「前回のも体に合わなかったみたいで、ヒドイ蕁麻疹が出たんだ（いくら新しいのを調合してもらっても効かないんだよね。」

「そんなに僕の胃は弱ってるのかなぁ）」

「ごめんなちゃあ〜い、今度こそ大丈夫だからわたしを信じてっ！」

「輝く笑顔でルーファスを攻撃。」

「この攻撃にいつも負けてしまうルーファス。」

胃薬とマンドレイクのお金をルーファスはカウンターに置いた。もちろんマンドレイク代は立替である。月末はいつもサイフが泣いている。

ルーファスは紙袋を受け取り、笑顔でユーリに顔を向けた。

「さつ、行こうか？」

「ちよつと先に出ていてくれますか、マリアさんに個人的に頼みたい商品があるので」

「うん、いいよ。すぐ外で待つてるから早くしてね」

ルーファスが店を出て行き、残されたのはユーリとマリアだけ。

白い目をしながらユーリはカウンターに詰め寄った。

「マリアさん、あなたルーファスを毒薬の実験台にしてるでしょう？（絶対こんな人に惚れ薬の調合なんて頼まない）」

「うふふ、そんなわけじゃないですよ。ルーさんはウチの大事なお得意サマですものお（……この女鋭いわね、へっばこのルーファスとは大違いだわ）」

はい、マリアさんの裏の顔が見れましたね！

互いに分厚い仮面を被った者同士の戦いがはじまろうとしていた。

ユーリはマリアが隠そうとしていたドクロマークのピンを取り上げようとした。

「これ渡しなさい！」

「泥棒行為ですよお、早く手を離してください」

「あんまり強情だと法的手段に出ますよ」

「だったらこっちも営業妨害で訴えますよお（摘発の修羅場なんていくらでも掻い潜って来たんだから、こんな小娘になんかに負けるわけないわ）」

魔導シヨップ鴉帽子の主人が、クスリの中でもポイズンエキスパートだということを、この店を利用する者なら誰でも知っている。ルーファス以外は。

これまでなんども禁止毒薬を扱っていたとして、摘発されそうになってきたが、こうやって営業しているということは、うまく切り抜けてきたということだ。

だが、ユーリだって負けてはない。

「我が家には絶対負けなしの専属弁護士団がいますか？」

「どこのお嬢さんか知らないけどお、そんなハツタリ信じないもん」

「オーデンプルグ財閥ですが何か？」

「えっ？」

驚いた顔をした瞬間、マリアの手から力が抜け、クスリの瓶が床に向かって落下した。

すぐにユーリがカウンターから身を乗り出して掴もうとするが ガシャーン！

証拠物件Aが木っ端微塵になった。

マリアが微笑んだ。

「割れちゃいましたねえ。損害賠償してくださいねえ（勝ったわ！）」

「もしかして勝ったおつもりですか？（損害賠償なんか絶対し

てやるか) インターネットにあることないこと書き込みますよ。たとえそれがウソだとしても、騒ぎになれば風評被害に発展しますけど?」

どこまでも黒いユーリだが、ここで急にマリアが態度を変えた。

「お友達になりませんか?」

「それって和解の申し立てですか? (急にどうしたんだろう…… なにか裏があるのかな)」

「あなたが本当にオーデンブルグのお嬢さんなら、お友達になりたいなあって。だめかしらあん? (取引ルートの開拓として、オーデンブルグ財閥は最高だものね)」

「アタシがオーデンブルグ家の者だと証明するものを、今は持ち合わせていませんが、それいいなら和解に応じますが?」

「いいわ、お友達になりましょう。これから商売のほうでも仲良くしましょうねえ」

差し出されたマリアの手に握手する寸前でユーリは手を止めた。

「では和解の印にマンドレイクの料金を返してください」

「…… お金にがめついわね」

「だからウチは大金持ちなんです。あ、でも胃薬代は別にいりませんよ、あれはルーファスの買い物ですから」

と、言っただけユーリはニッコリ笑った。

マリアにマンドレイクの料金を返してもらい、店の外に出た

ところでユーリは小さくガッツポーズをした。

「よし、お金ゲット。やっと無一文から脱出できた!」

すぐにルーファスが近寄ってきて声をかけてくる。

「遅かったね、なに買ったの? (なんかものすごく機嫌よさそうな顔してるけど)」

「ううん、別にたいしたものじゃありませんから」

もちろんお金をルーファスに返す気ゼロです!

用事を済ませた二人が帰ろうと歩いていると、誰か若者の声
が呼び止めた。

「お二人に話がある」

振り向くと、そこには頭からすっぽりとフードを被った、口
ーブ姿の男が立っていた。見える素肌は影になっている顔くら
いだ。そこから見える顔はだいぶ若いように見えた。

ユーリは不信感を抱きながらも男の話を聞くことにした。

「アタシたちに何の用でしょうか? (若い男…人間だったら
アタシと同一年くらいかも。それにしても声が大人びてるけ
ど)」

「俺の名前はジャド・ジャビド。そこにいるルーファスさんと
同じ魔導学院に通う二年生だ。今日は特別大放ちキャンペー
ンでお二人にいい話を持ってきた」

フレーズがいかにも怪しかった。

でもルーファスはエサに食いついた。

「いい話ってなに? (特別大放ちキャンペーンだって、年末の
売り尽くしセールみたいでドキドキする)」

「“ロロアの林檎”を採りに行くと噂を耳にした。あそこは危険だ、俺を雇わないか？」

売り尽くしセールじゃなくて、ただの売り込みだった。

ユーリはルーファスの顔をまじまじ見つめた。たしかにコレでは不安だ。

もしも本当に危険な場所で、モンスターがわんさかじゃんじやか出るとしたら、はつきり言って死に行くようなものである。本当は凄腕の傭兵を雇いたいところだが、今のユーリは小銭しか持ち合わせていなかった。きっと目の前のジャドすら雇えない。

それにまだジャドの実力を見ていない。本人の話だと魔導学院の二年生だ。実力なんてたかが知れているように感じる。

疑いの目を向けられていることに気づいたジャドは猛烈な売込みを開始した。

「俺の家は代々暗殺一家だ。俺も幼いころから戦う術を叩き込まれ、どんな武器でも扱うことができる。俺の剣捌きにかかれば、みじん切り、短冊切り、大根のかつら剥きもたやすいことだ。米にだって絵を描ける器用さだ、どうだ俺を雇わないか？」

語れば語るほど怪しかった。

呆れてユーリは背を向けて歩き出した。

「行きましよう、時間の無駄でした（こんなバカ誰が雇うんだ）」

「ま、待て！」

後ろから呼び止める声にユーリが振り向くと、そこには誰もいなかった。

「こつちだ」

驚いた顔してユーリが前を見ると、後ろにいたハズのジャドが立っていた。

「いつアタシの前に？」

「俺の家は暗殺一家で」

「そこは聞いたから」

「小さいころから新聞配達で足は鍛えている。俺は風よりも早く走ることができる。どうだ、今なら二五パーセントオフで雇われてやろう」

一瞬にしてユーリの前に立ったことは実力として評価できるが、売り込みの仕方が怪しすぎ。

どーせお金もないし、ユーリはやっぱり断ることにした。

「貴方の実力もよくわかりませんし、今回は断らせていただきます。では、ごきげんよう」

ユーリはルーファスの腕を引っ張って歩き出そうとした。

だが、再びジャドが引き止めようとする。

「ふっ、まあいいだろう。今回はお試しキャンペーン実施中ということ、一回だけピンチのときに無料で助けてやろう」

と、言っ、ジャドはルーファスに円盤を投げ渡した。

手のひらに乗るほどの小さな円盤には、魔法陣が描き込まれていたが、何に使う物なのかまったくわからない。

「その魔法陣の真ん中についている赤いボタンを押せ。そうす

れば俺が瞬時に召喚される仕様だ。宅配ピザより手軽で早いぞ。では、さらばだ！」

ジャドが一瞬にして消えて 現れた。

「いきなりボタン押すなよ！」

ジャドはルーファスの胸倉を掴んだ。

「ほら、こーゆーボタンつて無償に押しなくなっちゃうだろ」

「ったく、へっぽことは聞いていたが……まあいい、今はサービスにしてやろう。次は興味本位で押すなよ、さらばだ！」

今度こそ本当にジャドが消えた。

驚くルーファスの横で、ユーリは呆れ返っていた。

「一瞬で消えたのはスゴイけど……なにこの紙ぶぶきと紙テープ（白いハトも飛んでいったような気がしたけど）」

マジシャン仕様だった。

謎の押し売り用心棒ジャドとの出会いもあったりしながら、ユーリたちはやっとカーシャの元へ戻ることにした。

その場所はいつしか 失われた楽園 と呼ばれていた。

広がる不毛の大地。砂埃が空に舞い上がる。遠く先の景色は霧に覆われていた。

「なんだか陰気な場所に来てしまいましたね（マジサイテー、こんな場所に来なきゃいけないなんて）」

ユーリは辺りを見回しながら言った。

こんな場所に“ロロアの林檎”などあるのだろうか？

ロロアは愛の女神だ。こんな不毛の大地など似つかわしくな

い。色とりどりの花が咲き誇り、美しい小鳥たちがさえざり、清らかな小川のせせらぎが聞こえてくるような場所。そんな場所こそがロロアにはふさわしいのではないだろうか？

ルーファスが地面に倒れている立て札を見つけた。

「ええつと、左に進むと温泉」

「こんな場所に温泉なんて湧いてるんですか？（とつくに枯れてそうだけど）」

「右側は字がくすんでいて読めないや。前に進むとなんとかかとかの林檎って書いてるよ」

「なんとかかんとかってなんですか？」

「字が消えかかってて読めないんだ。でもきつとこれが“ロロアの林檎”だよ。よし、こつちに進もう！」

ルーファスの指示通り二人は先を進んだ。

しばらくして、巨大な木の影が見えてきた。

草木の枯れた不毛の大地にありながら、その巨大樹は青い葉で覆われ、見上げると首が痛くなるほどの高さを誇っていた。

巨大樹を見たルーファスの感想は以下のとおりです。

「デカツ！」

一言で済まされた！

ユーリは深くうなずいていた。

「あれで間違いなさそうですね。カーシャ先生の話だと、あの樹木は何百万年も前からこの場所に立っていたそうです……そう、この地が本当に楽園だったところからです」

「カーシャそんな話してたっけ？」

「あはは、覚えてないんですか？（お前はお菓子食いながらテレビ観てたもんな！）」

巨大樹のところにいくためには、目の前の柵を越えなくてはいけなかった。その高さはルーファスの身長三倍くらい。

ルーファスが柵をよじ登ろうとしていると、呆れながらユーリが声をかける。

「ここに入り口がありますよ？」

「えっ……うわっ！」

手を滑らせて地面に落下。ルーファスは尾てい骨を強打した。痛そうだ。

だんだんルーファスの扱いがめんどくさくなっていったユーリは軽くシカト。さっさと柵の中に入ろうとしていた。

入り口には文字が書かれていた。各国の文字で書かれている親切仕様だ。

「……立ち入り禁止」

口に出して読んだユーリはかまわず入ろうとした。

すぐ横でルーファスが不安そう顔をしている。

「待つてよ、入っちゃまずいんじゃないかなあ？（ヤダなあ、入りたくないなあ）」

「行きますよ」

軽くルーファスの意見ムシ！

だんだんユーリはルーファスの扱いに慣れてきた。

巨大樹が近づくとつれて、ルーファスの顔がどんどん恐怖マンガチックになっていく。

風もないのに木の葉が音を立てた。

ユーリはピタツと足を止めた。

「なにかいます」

「なにつてなに、早く逃げようよお！」

「もう遅いですね、あれ」

「うわあああつ！！！」

あれを見てしまつて逃げようとしたルーファスの首根っこを掴んだユーリ。

「逃げたら……ぶっ殺しますよ、あはは」

目の奥が笑つてない。

あまりの恐怖にルーファスは動けなくなつた。

「(違う……こんなのユーリじゃない……ぼ、僕の知ってるユーリじゃない！)」

やっとユーリの本性に気づきはじめてたルーファス。

でも、ルーファスは認めなかつた。

「(認めない認めない……きつと僕の聞き間違えだ)」

さらにルーファスは現実逃避を続ける。

「(あはは、綺麗な花畑だなあ)」

現実逃避というか、魂がこの世から離脱していた。

風が悲鳴をあげた。

それは威嚇する鳴き声だつた。

巨大樹を降りてくる長くて太い影　大蛇だ。大蛇が降りてくる！

その大蛇を見てもユーリはまったく動じていない。

「全長約三〇メートルというところでしょうか、言語が通じるとよいですね」

大蛇の頭からしっぽまでの距離は約三六メートル。不毛の大地でもすくすく伸びやかに育ちました。でもちよっぴり伸びすぎです！

大地が増え、生暖かい強風と共に低い声が響く。

「立ち去れ侵入者！」

意外に大蛇の口の臭いは爽やかだった。甘酸っぱいフレーバーだ。きつとリングゴばつか食ってるからに違いはない！

もちろんユーリは立ち去る気などない。

「アーク共用語でのご挨拶ありがとうございます。アタシたちは決して怪しい者ではありません。少しでもよいのリングゴを分けただけませんか？」

「おのれ盗人め、食い殺してくれる！」

交渉不可！

いきなり大蛇が襲いかかって来た。

ユーリは華麗に軽やかに美しく攻撃をかわす。

を外した大蛇の頭が大地を砕き、砂利と岩の雨が降り注いだ。

こんな相手に肉弾戦で勝てるわけがない。

ユーリは魔法を唱えようとした。

「マギ・ファイア！」

ぶしゅ。

ユーリの手からすかさずっぺが出た。違う、魔法がちゃんと発

動しなかったのだ。

生唾をゴックンしたユーリの顔が強張る。

「ま、まさか……（魔法も使えなくなった）」

サキユバスの力だけでなく、なんとユーリは魔法まで使えなくなっていたのだ。

ヤバイ、このままだと確実に殺されちゃう

ユーリは慌ててルーファスに助けを求めようとした。

「ルーファス助け……（なにやってんのあいつ？）」

「あはは、待ってよお〜」

綺麗なちようちよさんと戯れていた。もちろん幻覚です！

向こう側に半分以上浸かっちゃってるルーファスはもはや戦力外通告。むしろ最初から頭数に入ってなかった。

大蛇もルーファスことなど完全にスルーだ。

巨大な口がユーリを呑み込もうとする。

もうダメだと思ったとき、ユーリは“赤いボタン”を押した。

魔法陣の描かれた円盤からジャドが飛び出した。

「呼ばれて飛び出てジャジャジャード！」

パクッ

出てきていきなり食われたし！

大蛇はジャドを丸呑みにしてしまった。

そのお陰でユーリは逃げ出すことに成功。

「アナタの友情は忘れない……さっさと胃酸で溶かされて成仏してね！」

ウソ泣きしながらユーリ逃走。

その時！

急に大蛇が絶叫をあげて天を向いた。

「ギヤアアアツ！！」

天に向かって開いた大蛇の口から飛び出す黒い影。

「俺を勝手に殺すなーっ！」

見事脱出に成功したジャドは地面に着地した。

すぐに激怒した大蛇がジャドを噛み殺そうと牙を剥く。

逃げも隠れもせず、ジャドはフード奥で微かにあざ笑う。

その瞬間、大蛇の腹の中で大爆発が起きて、腹が風船のように膨れ上がった。

かろうじて腹は裂けなかったが、大蛇は苦痛のあまり大地を揺らして暴れまわった。

「下賤な人間めっ、我になにを食わせた！」

「ふっ、ネット通販で買った特製爆弾だ（五〇パーセントオフで安かった）」

ジャドは大蛇に止めを刺そうと隠し持っていた武器を出した。なんと、それはバズーカ砲だった！

「喰らえネット通販で買った軍の裏流通品だ！」

ジャドはただのネット通販好きだった。略してジャドネット。ただの通販好き！

オマケなんていらぬから、安く売ってくれ！

バズーカ砲は大蛇に当たって爆発を起こしたが、大蛇の硬い鱗についたのは黒い煤だけだった。

ジャドは冷静さを失わずに、さらなる隠し武器を出した。

「喰らえ、ネット通販で買った手裏剣セット！」

六方手裏剣、八方手裏剣、棒手裏剣と予約特典の忍者ストラップ！

卓越した業で投げられた手裏剣は大蛇の皮膚を貫いた。ス
トラップ以外はね！

だが、その程度の傷など大蛇にとってかすり傷。

ジャドは鎖の付いた巨大な鉄球を出した。

「ネット通販で在庫希少の魔人の鉄球！」

ジャドは自分の体よりも大きなトゲトゲ鉄球を振り回して、
大蛇の巨体にヒットさせた。

鉄球を喰らった大蛇がバランスを崩した。

思わずユーリは感嘆を漏らす。

「武器が通販なのは怪しいけど……強い！」

そう、ジャドは自分から売り込むだけあつて強かった。

怒り狂う大蛇の攻撃をジャドはかわしながら、互角 いや、
ジャドのほうを押しているくらいだ。

命を賭ける戦いは他人に任せて、ユーリはこっさりリングゴを
採りに行くこうとしていた。

だが、突然どこからか鳴り響くアラーム音！

まさかリングゴを守る警報アラームなのか……と思いきや、
アラームはジャドから聴こえていた。

ジャドはピタッと戦うのをやめた。

「お試し版なので三分間しか活動できない。では、検討を祈
る！」

あっ……消えた。

紙ふぶきに包まれながらジャドは姿を消してしまった。

思わずユーリが叫ぶ。

「お前はどつかのヒーローかつ！」

中途半端にジャドが攻撃をしたため、大蛇はそーとブツツンしていた。

ジャドの登場は状況を悪化させたただけだった。

ありえねーっ！

……さてと、気を取り直してユーリは逃げる準備をしていた。

「お父様が厳しくてウチの門限六時なんです、帰らなきゃ

(ウソだけどね！)」

ウソかよっ！

何食わぬ顔をしてユーリは逃げようとしたが、すでに逃げ場は失われていた。

長い大蛇の体がぐるりと柵のようにユーリたちを囲んでいたのだ。

「覚悟しろ、この地を荒らす罪人よ！」

大きく開いた大蛇の口からよだれが零れ落ちた。

そのよだれをバシヤンと頭から浴びて、現実世界に呼び戻されたルーファス。

「ここは……うわっ大蛇」

ルーファスは現実を放棄して気を失った。

使えねえーっ！

最初からルーファス本人になんかユーリは期待してない。

ユーリは—か八かの賭けに出た。

「秘儀 他力本願 発動！」

その叫び声に合わせて気絶していたハズのルーファスが立ち上がった

まさかルーファスったら、お茶目に死んだフリだったのかわい、違うようだ。

ルーファスは口から泡を吐いて、首をガクンとさせている。マジ気絶だった。

ユーリの指先が糸で吊るされた人形を操るように動く。すると、それに合わせて盆踊りをするルーファス。

「よし、この技は使えるみたいね」

満足そうにユーリは笑った。

そう、気絶しているルーファスを操っているのはユーリなのだ。

秘儀 他力本願 とは、勝手に誰かの身体を操ってしまう他力本願な技なのだ。しかも、自分の意思で動いていないので、潜在的な能力を発揮できてしまう特典付き。

ルーファスに構えさせ、ユーリが叫ぶ。

「マギ・サンダー！」

天から召喚された稲妻が大蛇に落ちた。

痙攣した大蛇が地震を起こす。

揺れで思わず地面に手をついてしまったユーリに大蛇が襲い掛かる。

ユーリはすぐにルーファスを操る。

「ゆけっ、ルーファスミサイル！」

宙を浮いてぶっ飛んだルーファスの頭突き！

アゴにアツパーカットを喰らった大蛇が倒れて後頭部を強打した。

ついでにルーファスのグルグル眼鏡も粉碎。

泡を吐いて気を失った大蛇。

素顔を露にしたルーファス。

そして、目を輝かせたユーリの胸がトキメク！

「イケメン！」

な、なんと……というか、お約束的にルーファスの素顔はちよーイケメンだったのだ。

でも、やっぱりここはルーファスクオリティー。

「……やっぱりイケてないかも」

白目を剥いたルーファスは口から泡を吐いていた。キモメン！

幻滅して気を取り直したユーリは最後の止めを刺そうとした。ルーファスの周りに魔力の象徴マナフレアが発生する。蛍火のようなマナフレアが次々と浮かび上がる。

思わずユーリは歯を食いしばった。

「凄いマナ……（ただのへっばこ魔導士だと思ってたけど、なんて恐ろしい潜在能力なの……こんなことありえない！）」

凄まじく膨れ上がるルーファスの力をユーリは制御しきれなかった。

「（このマナの感じは……まさか……あの人）」

気を失っていたハズの大蛇がゆっくりと身体を起こした。

ユーリは魔法を放とうとしたのだが。

「私の負けだ」

大蛇が負けを認めたのだ。

でも、ちよつぱり遅かった。

ニツコリ笑顔のユーリちゃん。

「ごめん、力が抑えきれない」

次の瞬間、巨大な爆発を起きて辺りは砂煙に隠された。

「ご愁傷様ですね！」

ドクロマークの煙が遠くからも観測できるほどだった。

しばらくして、だいぶ煙が治まってくると、どこからか小さ

く咳き込む音が聞こえて来た。

「ゲホゲホッ……マジ死んだかと思った（あれ、でもどうして

アタシ無傷なの？）」

驚いた顔をするユーリは気づいた。自分を守ってくれたのは

大蛇だったのだ。

大蛇は自分の舌に乗ったユーリを地面に下ろした。そう、ユ

ーリを口の中に入れて爆発から守ったのだ。

ユーリは瞳を輝かせて大蛇を見つめた。

「ありがとうございます……でも、ベトベトになった服のクリ

ーニング代はあとで請求させていただきますから」

大蛇は呆れた顔をしている。

「誰が助けてやったと……まあよい、金は持ち合わせておらぬ

が、お前たちの強きマナに敬意を表して道を開けよう」

「やった、これで“ロロアの林檎”が手に入るわ！」

ユーリは飛び跳ねて喜びを表した。

しかし！

ここで大蛇の爆弾発言。

「この先には“ロロアの林檎”などないぞ」

「はっ？」

許容範囲を通り越した驚きにユーリは頭が真っ白になった。

まるで『夢オチでした！』くらいの呆気の取られ方だ。

スイッチの入ったユーリは激怒した。

「んだとお！ ふざけんよ、どんだけアタシが苦労したと思

ってんだよ！」

「そう男みたいに怒るな魔族の娘よ」

「男とか言うなよ！」

「怒りを静めてよく聞け、この先にあるのは“ロロアの林檎”

ではなく“智慧の林檎”じゃ。“ロロアの林檎”なら……ほら、

あつちの売店で売っておるぞ」

「はっ？」

一気にユーリの怒りが冷めた。

大蛇が顔を向けた先には、観光地によくありそうな“おみや

げ屋さん”があった。定番のバツタもんＴシャツや木刀まで売

っている。

「ありえねーっ！」

ユーリの叫び声が不毛の大地に木霊した。

そのころルーファスは 地面に埋もれてかくれんぼをして

いた。

「暗いよお、狭いよお、怖いよお、誰か助けてよお」

頑張れルーファス！

負けるなルーファス！

僕らは君の不幸を見てあざ笑う！

第2話 ドリームにゃんこイン夢^むフ

ドーンつと一発、住宅街に爆発音が響き渡った。
敵襲かつ！

近くで遊んでいた子供がとある借家を指差して無邪気に笑う。
「やったあ、またへつばこだ！」

ご近所さんでも有名なへつばこ魔導士 ルーファスの家だ
った。

独り暮らしのルーファスはやりたい放題。

部屋の中は散らかり放題で、床に落ちたマンガや雑誌が国境
線を作り、脱ぎっぱなしの服が山を作り、こぼしたジュースが
川を作っている。

この惨状をとある爆乳教師はこう名づけた。

腐海の森。

しかし、こんなゴミの埋立地みたいな場所にも聖域が存在し
た。

パソコンの周りだけはキレイなのだ！

だいたい普段ルーファスがどこで生活してるのかが伺える。

そして、この秘境のジャングルには洞窟も存在していた。人

はそれはこう呼ぶ 地下室への階段！

つまりただの階段だった。

地下室の階段を降りるとルーファスがいた。

この地下室は前の住人が魔導実験室に使っていたもので、大

爆発を起こしても部屋はまったく傷つかない。傷つくのはルーファスくらいだ。

大爆発を起こしてしまったルーファスは、床に倒れて生き絶え絶えだった。

「……死ぬかと思った（けど、完璧だと思ったのにどうして？）」

ルーファスは召喚の練習をしていたのだ。

さすがに次はない。

ファウスト先生の“悪魔の契約書”にサインしてしまった以上、今度また追試で失敗なんかしたら……考えるだけ恐ろしい。そんなわけでルーファスは休日返上で、召喚術の猛特訓をしているのだ。

ちなみに先週の休日も同じように特訓していた。そのときは、どつかのピンク頭の仔悪魔に邪魔され、未知の生命体呼び出してしまつて大変だった。最後は無事に未知の生命体は宇宙に帰還してれたが。

幸運なことに今日は邪魔者がいない！

心置きなく大爆発ができる。

失敗にめげつつも、命がかかっているルーファスはあきらめない。すぐに新しく準備をはじめて、召喚の呪文を唱えはじめた。

床に水生ペンキで描かれた魔法陣が光だす。

マナフレアが少しずつ現れた。

「いけるかもー」

今までにない手ごたえを感じるルーファス。

そして、最後の一言を声高らかに叫ぶ。

「 出でよ、インぶはっ」

デジャブーっ！

突如、魔法陣から飛び出した影に膝蹴りを喰らい、ルーファスは鼻血ブーしながら転倒した。

倒れたルーファスの視線に入ったのは、燕尾服を着た謎の男。どこら辺が謎かというと、首から上が黒子の格好！

つまり、黒頭巾を被って顔を隠していた。

黒子は腕にはめていたパペットをルーファスの眼前に突きつけた。

「オイ、ソナトコニ突ツ立ツテタラ、危ネエーダロ！」

腹話術だった。

「ご、ごめんなさい」

普通は膝蹴りをしたほうが謝るのだが、気弱なルーファスは自分が謝ってしまった。

パペットは辺りを見回している。

「此処八何処ダ。教ヤガレ、スットコドッコイ！」

「えーっと、国から言ったほうが宜しいんでしょうか？（こ、この人形怖いよあ）」

「才前人間ダロ、ダツタラ此処八のーすダロ。のーすノ何処ダ、スットコドッコイ！」

「アステア王国の王都アステアですが……ちなみにここは私の家の地下室です」

パペットは手を広げて驚いたりアクションをした。ちなみに

黒子はまったく無反応で、見える透明人間に徹している。

「オオ、ヤツパあすてあ王国ナノカ！ オイ、ウチノ小娘ヲ見ナカッタカ？」

「小娘ってどのような感じの？」

「世界デ一番ぷりていな小娘ダ。名前ハゆーり・しゃるる・どろ・おーでんぶるぐツテンダ」

「それなら知ってますけど」

「オイ、サツサト吐ケ。知ツテルンダロ、サツサト言ワネエート、ヌッコロスゾ！」

パペットでルーファスの顔面をグリグリされた。パペットとキスしまくりだ。

グリグリされ放題で、ルーファスは口を開くこともできなかつた。

すると、パペットは逆ギレした。

「何デ、言ワネエーンダヨ。隠スト、ヌッコロスゾ！」

「そ、それはあなたが僕の顔をグリグリするから……（窒息しそうだったし）」

「ウツセンダヨ、ノロマ！ モウイイ、俺様が自分デ探ス！」
そう言つて、パペットに連れられて黒子は姿を消してしまつた。

「……なに今の人？」

まるで嵐のように過ぎ去つて行つてしまつた。

“ロロアの林檎”を売店で買ってきて早数日。まだ惚れ薬は

できていない。

もう九月も今日で終わってしまう。

今日は学院もお休みなので、ユーリはカーシャの自宅に直接催促に出かけた。

東居住区にあるアパート。その部屋の一つがカーシャの自宅だった。

一階の角部屋の前に立ったユーリはインターフォンを押す。

ピンポーン

返事がない。

ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン！

返事がない。ただの留守のようだ。

深読みが得意なユーリは居留守かとも思ったが、地面に紙切れが落ちていっているのを発見した。

「えーと、『急用があるやつはルーファスの家に来い』ってなんでルーファスの家？（やつぱりあの二人……ただの生徒と教師の関係じゃないのかも）」

さっそくユーリはルーファスの家に向かった。

カーシャの自宅から歩いて三分もない距離にルーファスの家はある。二人の疑惑は深まるばかりだ。

「（まさか愛人関係）」

なんてユーリは思ったが、すぐに鼻で笑って否定した。

「……ないない（カーシャ先生も打算で生きてそうな人だし、ルーファスなんて利用価値なさそうだもん。あ、でもドジでマヌケでへっぴりだから、簡単に言うこと聞くのかも……パシリ

程度にはなるかな」

そんなことを考えていると、すぐにルーファスの家に着いてしまった。

借家と言っても一軒家、学生の方で悠々自適な暮らしっぷりだ。

クラウス魔導学院に通う生徒は裕福な階層と苦学生に二極化しているらしいが、あきらかにルーファスは裕福な階層なのだろう。

ユーリはインターフォンをピンポンと押した。

返事はない。

せっかく着たのにまさかの留守

ユーリはドアノブに手をかけて力強く回すと あっ、開いた。

「お邪魔しまーす」

勝手上がりこんだユーリは思わずため息を漏らした。

「(相変わらず汚い)」

ルーファスの家上がったのはこれがはじめてじゃなかったが、汚いものは何度も見ても汚い。

キッチンから物音が聞こえた。居留守だ！

すぐにキッチンに駆け込んだユーリが見たものは ようか
んを食べるカーシャだった。

まるで自分ちのように寛いでいるカーシャ。

「なんだ、ルーファスだったら留守だぞ？」

「ルーファスじゃなくてカーシャ先生に用なんですけど……」

(ルーファスもいないのに、なんでこの女がいるの。やっぱり愛人)」「

「妾はお前などに用はない」

キツパリ断言！

「アナタになくてもアタシにはあるんですけどお。惚れ薬はまだできないんでしょうか？」

「あれならとづくにできておるぞ」

「じゃあ早く渡してください」

「昨日ルーファスに預けたが、まだ受け取っていないのか？」

「受け取ってません！（どうしてルーファスなんかに預けるの、アタシに直接渡せよ）」

で、そのルーファスは家にいない。

「ルーファスはどこに行っただんですか？」

「知るか」

キツパリ断言！

ユーリの拳がグツと握られた。

「あはは、知らないんですか、そーですか（なんだこの女、無性に腹が立つ）」

「そうだ知らん。それよりもお前……」

「なんででしょうか？」

「そろそろ猫を被るのをやめたらどうだ？（このにゃんにゃんめ……にゃんにゃん、にゃんにゃんかわゆいな、ふふっ）」

「……………」

ユーリとしたことが言葉を失ってしまった。そんなことした

ら無言の自白だ。すぐにユーリは取り直す。

「猫を被るって意味がわからないんですけどあ。アタシい、ぜんぜん猫なんか被ってませんよあ」

思いつき被っていた

笑顔爆発のユーリ。でも、目の奥は笑っていない。

カーシヤは淡々とお茶を飲みながら、ユーリに近くの席を進めた。

「まあよい、そこに座れ、オ・カ・マちゃん、ふふっ」

「あはは、又ツコロスぞあ」

「やっぱり猫を被っているではないか（まだまだ甘いな、ふふっ）」

勝者カーシヤ！

カンカンカンと勝利のゴングが鳴り響いたところで、勝者から敗者にようかんが差し出された。

「これでも食って頭を冷やせ」

「なんですかこれ？」

「東方の和菓子だ、名はようかんと言う。この街のももやという店で売っておるぞ（あそこのドラ焼きも絶品だ）」

さっそくようかんに手をつけようとしたユーリだが、やっぱり手を止める。

「タダですか？（この女がタダでくれるハズが……）」

「ルーファスのだから思う存分食すがよい」

ルーファスのかよ！

「じゃあ、いったただきま〜す」

食うのかよ！

カーシャもユーリも自分中心で世界が回っていた。

飲み物が欲しくなったのでユーリは勝手に冷蔵庫を漁る。

「あ、オレンジジュースある。でも一〇〇パーセントじゃないのお？ 普段は一〇〇パーセントしか飲まないんだけどお、まっ、いつか」

やりたい放題いいたい放題。

オレンジジュースを飲みながら、ユーリはすっかり寛いで……どうするっ！

ハッとユーリは我に返った。

「違うし、こんなことをしに来たんじゃないし。惚れ薬を取りに来て、持っているのはルーファスだから……」

キツチンからも見える腐海の森……この樹海から探せと？

ユーリはお祈りのポーズをして天を仰いだ。

「（これは神が与えたもうた試練なのですね、お兄様。嗚呼、お兄様だったら、こんな場合どうしますか、家ごと燃やしますか？ 燃やしたらダメですね、片付くけど片付くの意味が違いますものね。嗚呼、お兄様、アタシにどうか力を貸してください）」

と、言うわけでユーリちゃんは気合を入れた。

「よっしゃ、片付けするぞお。掃除・洗濯・夜のお勤めは淑女の嗜みだもんね！」

「お前、オカマだろうが」

「あはは、次言ったら又ツッコスぞ」

ユーリはようかんの刺さったフォークを強く握り締めていた。怨恨は刺殺が多い。

さっそく掃除をはじめたユーリ。もちろんカーシヤは手伝う気ゼロ。それでもユーリはめげずに殺意を押さえて掃除をした。

それから数時間後。

「やっと終わったあ！」

精根尽きたユーリはカーペットの上に倒れた。

ユーリは天井を見ながら、瞳から涙を流していた。

「（嗚呼、お兄様アタシは頑張りました、褒めてください）でも、なんでねえーんだよ！」

探し物の惚れ薬は見つからなかったようだ。

ユーリは涙を拭いてシヤキツと立ち上がった。

「なんでないの、まさかルーファスが持ったまま？ てゆか、こんなに隅々まで掃除したのに、エロ本すら見つからないなんて……まさかまだ掃除してない場所が」

「ルーファスの家にエロ本などないぞ。あやつのエロに対する免疫ゼロでな、パンチラ程度で鼻血を出すチエリーボーイだ」

カーシヤはテレビを見る片手間でそう言った。メロドラマだ。こうなったら直接ルーファスに聞いただすしかない。

「アタシ、ルーファスを探してきます。心当たりはないでしょうか？」

「ない！」

キツパリ断言！

「あはは、そーですかー」

カーシャに聞いたのがバカだったと思いながら、ユーリはルーファスの家をあとにした。

数時間前、ユーリが一生懸命ルーファスの家を掃除しているところのこと。

クラウス魔導学院の前で空色ドレスがヒツジのパペットに絡まれていた。

「オイ、ユーリヲ何処ニ隠シヤガッタ！」

「ボクは誰も隠していないよ（ふあふあ）」

絡まれていたのはローゼンクロイツだった。

黒子は手に持ったパペットをローゼンクロイツの顔にグリグリしようとしたが、それは眼前でバシツと受け止められた。

パペットを持った黒子の手がブルブル震えている。かなりの力が入っているようだ。

一方、そのパペットを受け止めているローゼンクロイツは涼しい顔をしている。

「そもそもボクはユーリなんて子知らないよ（ふにふに）」

無表情でローゼンクロイツは答えた。

「オイ、嘘付イテンジャネエゾ。小娘ガコノ学校ニ通ッテルノハ調ベガ付イテンダ！」

「例えここの生徒だったとしても、ボクは知らないよ（ふあふあ）」

「嘘付イテンジャネエゾ、貴様ト小娘ノ関係ハ判ッテルンダゾ！」

「ボクとの関係？（ふにゃ）」

「ソウダ、小娘八貴様ノふぁんダッタダ、知ラネット八言ワセネエーゾ、ゴラア！」

とんだ言いがかりだった。

ローゼンクロイツはいつの間にか遠くを歩いていた。慌てて黒子が追う。

「オイ、テメエ！ 小娘ヲ何処ニ隠シタ、コノ建物ノ中ニ隠シタノカ、ソウダナ、ソウナンダロ！」

前を歩いていたローゼンクロイツは、ド忘れを思い出したかのように驚いた顔をして、振り向いてこつ呟いた。

「……今日学校休みだよ（ふっ）」

鼻で笑ったローゼンクロイツは、すぐに無表情に戻って歩き去ってしまった。

だったらどうしてお前は学校の前にいたんだよ

勢いに任せてルーファスの家を飛び出したユーリだったが…

…手がかりゼロ！

「（嗚呼、お兄様、こんなときはどうしたらいいのでしょうか。」

そうですね、やっぱり近隣の下々の者どもに事情聴取をしたらいいですよね）」

そんなわけでユーリちゃんは聞き込み開始。すぐに有力な情報が出てきた。

「へっほこだったら変な男を追いかけて行ったぞ」

以上、近所のフリーター二五歳の証言でした。

“変な男”を追ったルーファスを追うユーリ。そんな構図が出来上がったところで、ユーリの元へ“変な男”の情報が次々と入ってきた。

ルーファスよりも“変な男”のインパクトがあつたらしく、行く先々で“変な男”の情報が入ってくる。

「パーティーのときに着るようなスーツ……燕尾服って言うんだつたかしら。頭に黒い頭巾を被っていたのよ、しかも手にはヒツジの人形なんか持っていて。ホント怖かったわ、いきなり『小娘八何処だ!』って掴みかかって来るんですもの」

以上、結婚一〇年目の人妻の証言でした。

さらに有力な情報が飛び込んできた。

「ああ、黒頭巾の人ならクラウス魔導学院まで乗せましたよ」以上、乗り合い馬車の御者の兄ちゃんの証言でした。

いつの間にかルーファスを追う構図から、謎の“変な男”を追う構図に変わっていた。

ユーリはサイボーグ馬の引く馬車に乗ってクラウス魔導学院までやって来た。

しかし、ここで手がかりが途切れてしまった。

困っているユーリの目に、空色の物体が飛び込んできた。

「ローゼンクロイツ様!」

数時間前にここをあとにしたハズなのに、まだこの辺りをローゼンクロイツはフラフラ歩いていた。

「キミ、誰?(ふにゅ)」

ローゼンクロイツはユーリのことを覚えていなかった。

ユーリシヨック！

「えっ、この前もお会いしたじゃないですか！」

「……覚えてない（ふにふに）」

ユーリシヨック！

でも、ユーリちゃんはこんなことじゃめげません。

「（落ち着けアタシ……そうだ、ローゼンクロイツ様はド忘れ達人だってサイトに書いてあったっけ。うん、大丈夫、早く顔を覚えてもらわなきゃ）」

ユーリはローゼンクロイツ関連のサイトを隅々まで読んでいた。

気を取り直してユーリは営業スマイルを浮かべる。

「そうでしたね、この前お会いしたときは名前も名乗っていなかったような気がします。アタシの名前はユーリ・シャルル・ドウ・オーデンブルグと申します。ユーリです、ユーリですよ、ユーリと覚えてくださいね！」

ユーリは目を輝かせながらローゼンクロイツの両手をガツシリ掴んだ。

その名を聞いてローゼンクロイツは首を傾げた。

「うーん（ふにゅ）」

「どうなさいましたかローゼンクロイツ様？（もしかしてこの前に会ったこと思い出してくれた？）」

「……おなかしいた（ふにゃ）」

「……………」

思わずユーリは言葉を失った。

でも、ユーリちゃんは頑張ります！

「お、お腹が空かれましたか。本来であればアタシがどこか美味しいお店へお連れするのですが、持ち合わせがなくて……（早くバイト探さなきゃ死ぬる）」

「……家に帰る（ふあふあ）」

「あ、おうちに帰られるんですか、ローゼンクロイツ様のおうちはこちらから遠いのですか？」

「……知らない（ふあふあ）」

「………」

思わずユーリは言葉を失った。

でも、ユーリちゃんは頑張ります！

「（そつだ、ローゼンクロイツ様は極度の方向音痴だったんだ）ええっと、お独りで家まで帰れますか？」

「帰れるよ……そのうち（ふあふあ）」

「あはは、そうですか（そのうちね）。てつきりアタシは道にお迷いにならているのかと」

「目的地にはちゃんと着いたよ（ふにふに）」

「目的地？」

「ここ（ふにふに）」

ローゼンクロイツが指差したのはクラウドス魔導学院だった。

さらにローゼンクロイツは言葉を続ける。

「昨日家を出たら今日着いたんだ（ふう）」

「………」

もう何も言うまい。方向音痴の次元が違った。

目的地に着いたのはいいが、もうすでに目的を失っていた。こんな感じだからローゼンクロイツはいつも出席日数が危ういらしい。

突然、ローゼンクロイツは世界の心理を紐解いたみたいな顔をした。

「……あ、そうだ（ふにゃ）。さっきユーリという小娘を探している変態に出会ったよ（ふあふあ）。ユーリってキミのことかい？（ふにふに）」

「たぶんアタシです（てゆか、絶対にアタシです）。その人はどっちに向かいましたか？」

「あっちだよ（ふあふあ）」

あっちを指差すローゼンクロイツだが、その方向を信じていいのだろうか？

いや、絶対に信じてはいけない。

「本当にあっちですか？」

「うん、こっちだよ（ふあふあ）」

指差す方向が変わっていた。

やっぱり信じてはいけないようだ。

突然、ローゼンクロイツは難しい数式を解いた数学者みたいな顔をした。

「……あ、そうだ（ふにゅ）。その変態をルーファスも探していたよ（ふにふに）」

「えっ、ルーファスにも会ったのですか？ と言いますか、アタシが探してるのはルーファスなんですけど」

「ルーファスならそっちに行ったよ（ふあふあ）」
また違う方向を指差した。

もうどこを指そうと好きにしてください。

ローゼンクロイツが歩き出した。

「ついておいで、ルーファスの居場所まで案内するよ（ふにふに）」

「え、あー……お願いします！（もういいや、ルーファス探すのあきらめよ）」

方向音痴のローゼンクロイツに着いて行くことにした。

クラウス魔導学院の近くにある人気のカフェ“メルティラヴ”。普段は生徒たちの溜まり場になっているが、今日は休日ということもあって、ここにいる生徒は二人だけだった。

「あのさあ、私は人を追ってる最中でさ、こんなところでスイーツなんか食べてるヒマないんだけど（僕のサイフからお金が消えていく）」

一人目は、ルーファスだった。

「別にいいじゃん。こないだ約束破ったルーちゃんなんだよ、今日はルーちゃんのおごりでいっぱい食べるんだから！」

二人目は、テーブルに並べられたスイーツの山を笑顔で食べているビビだった。

ピンクのツインテールを揺らしながら、ビビは次から次へとスイーツを口に放り込んで行く。

サイフと相談しながらルーファスはため息を漏らした。

「はあ、ついてないなあ」

ルーファスは“変な男”を捜している途中、ばったりビビと出くわしてしまった。そしたら、数日前の約束を破ったとか何とかかって話になって、スイーツをおごらせれるハメになったのだ。

ちなみに数日前とはルーファスがユーリを召喚した日だったりする。

俟約のためにルーファスはスイーツを食べたくても食べず、ぼーっとガラス窓の景色を眺めていた。

街を行き交う人々。

そして、若者からんでいる黒頭巾の変態。

「……あーっ！（あの人だ、やっと見つけた！）」

大声をあげたルーファスは席を立った。

「どこ行くのルーちゃん？」

「ちよつと急用！」

「行っちゃダメだよ、約束破る気？（せっかくのデートなのに）」

「ごめん、サイフ置いていくから、じゃあね！」

ルーファスはサイフをテーブルに叩きつけて店を出て行ってしまった。

「もお、ルーちゃんったら！」

ビビはほつべたを膨らませてケーキにフォークを突き刺した。
ヤケ食い開始！

どーとでもなれ！

そんな感じでユーリはローゼンクロイツと一緒にルーファス探し。

ローゼンクロイツは迷いなくドンドン先を歩いていく。その迷いのない歩き方が逆に不安だ。

「あのお、本当にルーファスはこっちにいるのでしょうか？（いつそのこと、このままローゼンクロイツ様とデートでもいいけど）」

「いるよ、ボクの髪の毛が反応しているだろう？（ふにふに）」

「髪の毛ですか？」

ユーリはローゼンクロイツの髪の毛をマジマジと見つめた。

空色のキレイな髪、キューティクルも完璧だ。なのに、なのに……一本だけピヨンと出たアホ毛。

アホ毛はまるで触覚のように動き、ローゼンクロイツはそれの示す方向に合わせて歩いてるようだった。

鬼 郎 かっ！

ユーリがそのアホ毛に触れようとすると、パシッとローゼンクロイツに叩かれた。

「めっ（ふーっ）」

「あ、ごめんなさいローゼンクロイツ様。でも……どうなってるんですかコレ？（針金でも入ってるのかなあ）」

「ルーファスが発している体内マナを感知してるんだよ（ふにふに）」

「そうなのですか、驚きです！（この情報はどこにも載ってなかったハズ。薔薇十字団の掲示板に書き込まなきゃ）」

薔薇十字団とはローゼンクロイツのファンクラブである。

宇宙からの大いなる意思を受信するように、ローゼンクロイツはフラフラ歩き続けた。

しばらく歩き続けたところで、ピタッとローゼンクロイツは足を止めた。

「ここから強い反応を感じる（ふあふあ）」

そこはメルティラヴの前だった。

導かれるように店内に入っていくローゼンクロイツ。急いでユーリもあとを追った。

店内はお客さんでいっぱいだ。平日は学生ばかりだが、休日は休日で込んでいる店内。チョコレート系のスイーツが絶品だという。

ユーリが店内を見渡していると、目が合ったピンクのツインテールがパツとテーブルの下に姿を隠した。

ビビはテーブルの下に隠れながらザツハトルテを頬張っていた。

「（なんであの子がいるの……しかもローゼンまでいたような気がするし）」

「こんにちわぁ、ビビちゃん」

名前を呼ばれてビクつとしたビビが顔を上げると、そこには満面の笑みを浮かべるユーリがいた。

「にゃはは、ちわーっす！（……もう見つかったし）」

苦笑いを浮かべながらビビはよいしょと這い上がってイスに座った。

ビビとユーリのはじめての出遭い。いきなり愛の告白をされて以来、ビビはユーリをちよっぴり苦手に思っていた。

「ボクもいるよ（ふあふあ）」

すでにローゼンクロイツは勝手にテーブルの上のスイーツを食べていた。

「あーそれあたしが注文したやつだよあ！」

「また注文すればいいよ（ふにふに）」

テーブルの上に山のように並べられていたスイーツが……な
いっ！

ペロツと口の端についてチョコを舐めたローゼンクロイツ。

食ったのか？

全部、食ったのか？

全部、お前が食ったのか

ビビは頬を膨らませた。

「まあ、なんでもう全部ないわけ（いつも思うけどローゼンの胃ってどうなってるの？）」

「だからまた注文すればいいだろう（ふにふに）」

「ふん、別にいいけど……せーくんぶルーちゃんのおごりだから」

二人がそんなやり取りをしている横で、ちゃっかりユーリはローゼンクロイツに食べられる前にひと皿確保していた。

「あ、これルーファスのおごりだったんですか。ならどんどん

注文しちゃいましようよ（今日はこれで夕飯も浮かせなきゃ…
…あはは、早くバイト探さなきゃ死ぬる）」

ここ数日、ユーリは誰かにおごってもらって飢えをしのいでいた。ちなみに気替えの服もないので、洗っている最中はすっぱんぼんで、速攻で乾かして毎日同じ服を着ている。

そんなこんなで三人はいつの間にか団らん。

周りから見たらスイーツを食べながらおしゃべりする三人の女の子。しかもレベルが高い可愛らしさだ。

でも、ユーリちゃん実は男の子。

ローゼンクロイツも女装っ子。

真正正銘の女の子はビビだけだった。

ユーリはチョコロールを幸せそうに食べている。

「嗚呼、美味しい…お兄様にも食べさせてあげたい」

「ユーリちゃんって兄弟いるの？」

「ビビが尋ねるとユーリはにこやかに頷いた。

「はい、優しくてちょーカッコイイ兄が一人います」

もう一人の兄の話はスルー。ちなみに「ちょーカッコイイ」はユーリの妄想。ユーリはお兄様の顔を覚えていない。

「へえ、いいなあ。あたし一人っ子だから兄弟とか懂れちゃう」

「（あはは、クソ兄貴は死ぬと思うけど）でも、一人っ子もいじやないですか。財産分与とかもめなくて済みそうですし」
「ぎ、財産分与？（ユーリちゃん複雑な家庭事情とかあるのかなあ。うちのけっこう複雑だけども）」

「虎視眈眈と財産を狙ってるヤツが多くて……隠し子がいないとも言い切れないし。そうなってくるとアタシ専属の弁護士を雇わないといけなくなってくるし……（最悪、殺し屋を雇って暗殺かな）」

怖いです、発想が怖いです。

さらっと殺人宣言です

できれば殺人犯になる前に弁護士を雇いましょう。

イチゴシヨートのイチゴを食べていたビビがローゼンクロイツに顔を向けた。

「そう言えばローゼンつて弁護士じゃなかった？」

「うん、資格持つてるよ（ふにふに）」

マジですか！

ユーリも驚いて身を乗り出した。

「本当ですか、今まで何勝何敗ですか、基本料金はいくらですか！」

「まだ一度も負けたことないよ、法廷に立ったことないから

（ふあふあ）」

「えっ？」

「こないだ資格取ったばかり（ふあふあ）」

「それでもいいです、雇います！（理由はわからないけど負ける気がしない！）」

そんな会話もしつつさらにスイーツを食いまくる三人。

さーってと、そろそろお腹いっぱいになったところでビビが席を立つ。

「そろそろ帰ろっか、あたしお腹いっぱいだし」

ユーリもお腹を擦っている。

「アタシもいっぱいです」

一人ケロツとした顔をしているローゼンクロイツ。

「ボクはまだまだ（ふあふあ）」

ローゼンクロイツの胃は底なしだった。軽く二人の五倍は食べている。

お会計を済ませようとレジに向かった三人。支払いはもちろんルーファスのサイフから。

レジスターから伸びるながいレシート。

それを見ていたビビの顔色が曇りはじめる。

「た、足りるかなあ」

お財布と睨めっこをしているビビに店員から料金が告げられる。

「五千三百四十二ラウルになります」

「ええっと……（きやは、足りない）」

困った顔をしてビビは二人に助けを求めた。

「ユーリちゃんいくらもってる？」

「えっ、アタシは持ち合わせはありませんけど」

「ローゼンはいくらもってるっていうか、ローゼンは食べ過ぎなんだから自分で払ってよね」

「わかってるよ（ふあふあ）」

よかった食い逃げにならなくて済みそうだ。

クレジットカードを出したローゼンクロイツの動きがピタッ

と止まる。

ムズムズとローゼンクロイツの身体を走る悪寒。

「は、は……はくしゅん！（にゃー！）」

ローゼンクロイツのクシャミが店内に鳴り響いた。

叫ぶビビ。

「みんな逃げて！」

店員が急いで緊急ボタンを押し、店内に鳴り響くサイレン！

そして、ローゼンクロイツに起こる異変。

「にゃー！」

い、いったいローゼンクロイツの身に何が起ころうとしているのかっ

すぐにルーファスは“変な男”を追ったつもりだったが……見失った。

定番というか、黄金パターンというか、見失うのは仕様だ！

A・もしもし、バグを見つけたんですけど？

B・それは仕様です。

A・あのお、これって設計ミスじゃないんですか？

B・それは仕様です。

A・ルーファスがへっばこなんですけど？

B・それは仕様です！

次に見失ったルーファスの身に起こることは？

1・助っ人登場。

2・さらなる不幸。

3 . 思わぬ展開。

答えはどれだ！

ルーファスは“変な男”を探して辺りを見渡していた。すると突然、上空から少年の声が降ってきた。

「危ない退け！」

空から降ってきた少年がルーファスの脳天をキック！

「もぎゃ」

奇声を上げたらルーファスは地面に転倒した。

ルーファスの脛の裏を泳ぐ美しい光景。

華やかに咲き誇る花畑。みくんな曼珠沙華、別名シビトバナだった。

小川の向こう側からルーファスに向かって手を振る アフ

口の爺さん。

「ジョー、立つんだジョーンズ！」

「僕の名前ジョーンズじゃないし！」

と、大声で叫びながらルーファスは目を覚ました。

自分を覗いているフードの少年にルーファスは気づいたが、まだ意識がぼんやりして声も出せない。

「先輩……ルーファス先輩……大丈夫ですか？」

「……ダメ」

「しゃべれるなら大丈夫そうだな」

「君は……（見覚えがある気がするけど……）」

「俺ですよ、二年生のジャドです」

そこに立っていたのは自称殺し屋一家で、ネット通販大好き、

でもその正体はクラウドス魔導学院二年生のジャドだった。

今日もフード付きのローブで全身を隠しているジャドは、手袋をはめた手をルーファスに差し出した。

それを借りて立ち上がったルーファスは、頭痛が痛い頭部の頭を手のひらの表で押さえた。頭を強打したルーファスはまだ本調子じゃないようだ。

「あーっ頭痛が痛い」

「それを言うなら、頭が痛いです（語学力がないな）」

「別にどっちでもいいよ。あーっ頭痛が痛い」

「申し訳ないことをした。シャルロット嬢を追っていたら、たまたま先輩の頭に着地をしてしまいました。お詫びと言ってはなんですが、今度俺に依頼があるときは一〇パーセントオフで引き受けます」

そう言いながらジャドは割引券をルーファスに手渡した。

「あ、ありがとう（別にもらっても使い道がないような気が…）」

「その割引券は無期限、他の割引プランとも併用して使えます。裏に書いてある番号はギルドでなく、オレのケータイに掛かるようになっていますから」

「ギルドに所属してるの？」

「ええ、シャドウクロウに所属してませんが、割引券はオレに直接依頼をしてもらわないと使えませんから気をつけてください」

シャドウクロウと聞いてルーファスの顔色が曇った。

あそこは無認可のギルドで、金さえ払えばどんな仕事でもする。汚い仕事にも手を出し、悪いこともしちゃってるなんてウワサもある。良心的な一般市民から見たら、ただのゴロツキ集団で評判も悪かった。

ただし、実力主義なので、ギルド員の素性にはこだわらず、優秀な者も数多く在籍しているのも事実だ。そのため、この辺りでは二大ギルド勢力の一角を担っている。

そう言えば　と、ルーファスは口を開く。

「誰かを探してるんじゃないの？」

「ええ、シャルロット嬢ならもう確保しました」

マジシャン並みの手際よさでジャドはデブ猫を出した。

「にゃーっ！」

デブ猫のツメがルーファスの顔を引っ掻いた。

「いたーっ！」

猫はマヌケの顔を引っ掻く　仕様だ！

ジャドはデブ猫をさつとどこかに隠した。

「申し訳ない先輩。お詫びに三パーセントオフの割引券をやりましょう」

「あ、どーも（もらっても役に立つのかな）」

「ところで先輩、こんなところでなにをしてるんです？」

「実は人を探してるんだけど……」

「俺が探しましょう。今回は初回特別割引で二五パーセントオフにしときますよ」

割引券が役に立つときがキターっ！

三八パーセントオフということは……いくら？

「あのさ、料金はいくらなの？」

「そうだな……さっきのシャルロット嬢は一日、四〇〇〇ラウルの契約で、成功報酬は一万ラウルです。先輩は知り合い特価ということで成功報酬なしでいいですよ」

「四〇〇〇ラウルってうめえ棒が二千本買えるよね（そこから二五＋十三パーセントオフで……いくらかわらない）」

「どうですか、俺を雇いませんか？（ルーファスの親父は宮廷に仕える三神官らしいからな、うまくいけばコネを作れるかもしれない）」

思惑とはなかなかうまくいかないものである。

ルーファスは急に頭を下げた。

「ごめん、また今度ね！」

なぜか走って逃げるルーファス。

「（サイフ持ってないとか今さら言えないよ、あはは）」

このとき、ルーファスはまだサイフの中身が、ぜんぶスイーツになっていることを知る由もなかった。

ちなみにさっきの答えは、空から人が降ってくるという“思わぬ展開”で、降って来た人物と激突するという“不幸”が起きたが、それが“助っ人”のジャドだった……けど、お金がなくて雇えなかったが正解でした
当たるかそんなの！

見事に逃げ遅れました！

カフェのシャッターが下ろされ、出入り口も完全にロックされた。この中は牢獄も同じだ。

どっか〜ん！

店内で爆発が置き、テーブルがユーリの足元に落ちてきた。

「あはは、笑えませぬね。まさかローゼンクロイツ様の 猫還りがこれほどの破壊力だったなんて……」

ユーリは物陰に潜みながらチラツとローゼンクロイツのようすを伺った。

電波を受信してするように、ローゼンクロイツはふあふあしている。

その頭にはネコミミが生えていた！

さらに尻尾も生えていた！

オプシオンで猫ヒゲまで生えている

ローゼンクロイツを知る者ならば知らない者はいない。発作的に起こるトランス状態 猫還り だ。

ウワサによると、ローゼンクロイツの先祖には獣人がいたらしく、クシャミをきっかけにその血が覚醒してしまうらしいのだ。と、ファンサイトには書き込まれている。

ビビはユーリの腕に抱きついた。

「早く逃げよおよ（このお店、出入り禁止になっちゃうかなあ）」

「逃げると言っても、ローゼンクロイツ様と一緒に隔離されてしまいましたから（嗚呼、ビビちゃんと急接近。このまま抱き付かれたままなのも幸せかも。それに心理的に緊迫するような

危機的な状況って、男女の間で恋が芽生えやすいつて言うし」

切り抜けられる危機ならいいが、そう簡単にはいきそうもなかった。愛に試練は付きものなのです！

あ〜れ〜

っと、武装した店員がユーリたちの足元に降ってきた。

メルティラヴは生徒が主な客層だ。しかも、この都市でもっとも変わり者が集まるクラウス魔導学院の生徒。多少のキケンも覚悟して営業している。

というわけで、対魔導武装をした店員が常に待機していたり、危険が店の外に及ばないように店内を封鎖するシステムがあったりするのだ。

これはウワサなのだが、ここの資金を出しているのはクラウス魔導学院の学院長らしい。そんなわけなので、雇っている武装店員もハンパない魔導士のハズなのだが……。

あ〜れ〜

今日は晴れ時々人間が降るみたいですね！

二人待機していた武装店員があっさりとやられてしまった。

他の客はとくに店の外へ避難している。

見事にユーリとビビは逃げ遅れました！

しかも最後の砦だった武装店員も気絶してしまっている。

ついでに出口も塞がれている。

絶体絶命ですね！

ユーリはまたチラッとようすを伺った。

「今回のびっくりどつきり魔法が　ねこしゃん大行進　ではなくて不幸中の幸いでしたね」

「あたしあんなの見たのはじめてだよぉ？（ねこしゃん大行進　しか巻き込まれたことないもん）」

ねこしゃん大行進　とは　猫還り　時のローゼンクロイツの必殺技である。他にも　しっぱふにふに　や　猫電波　などがある。

そして、今回のびっくりどつきり魔法の説明はユーリからどうぞ！

「あの魔法はマイラ系魔導の具現化系に属していて、その名もドリームにゃんこ　です。ほら、そこに浮いているねこしゃん型風船に少しでも触れると、夢の中に引きずり込まれてムフのあまり爆発するというものらしいです（体験者の証言が少なくてもムフフの部分に謎が多いんですけど）」

ローゼンクロイツを守るようにネコ風船がいくつか浮いている。

武装店員がやられているようすを思い出すと、ローゼンクロイツに近づこうとした武装店員にネコ風船が襲い掛かり、急に武装店員が鼻血ブーしたと思ったら爆発が起きた。

そこで気絶している武装店員は幸せそうな顔をしている。

いったい“ムフフ”の部分には何が隠されているのか

今はローゼンクロイツから離れていれば問題ないが、いつ状況が変わってユーリたちに危険が及ぶとも限らない。

ユーリはどうしようか悩んだ。

「このままビビちゃんと二人つきりっていうのもいいけど、華麗に活躍して恋愛経験値を上げるのもいいかな」ビビちゃん大丈夫？」

「できれば早く逃げたいでーす……にやはは、いつになったらローゼンのトランス解けるんだろ」

「何かトランスを解除する方法はないんですか？（これに関してはどこにも載ってなかった）」

「あたしに聞かれてもわかんないよお。ルーちゃんだって知らないみたいだし、気絶させるか、放置してローゼンが疲れて寝るのを待つか、いつそのこと殺っちゃうとか」

ニッコリ笑顔で殺っちゃうよお！

ビビはいつの間にか愛用の大鎌デスサイズを持っていた。

デスサイズを見たユーリはちょっぴり萌え。

「あの……その大きな鎌はなんでしょうか？」

「あれっ、言ってなかったっけ。あたしデス系魔族だから、魂を狩って糧にできるの」

「カツコイイですビビちゃん！（大鎌が似合いですぎ）」

「いやあん、褒められると照れちゃうよお」

ビビは顔を少し桜色に染めて、体をモジモジさせた。

ヤル気満々のビビちゃんだけど、本当に殺っちゃうとユーリが困ってしまう。崇拜するカミサマが殺されるのは困る。

こうなったら自ら立ち上がるしかなかった！

「アタシがローゼンクロイツ様を止めてみせます！（うまくいけばビビちゃんとローゼンクロイツ様の高感度がダブルアップ

するかも)」

というわけで、ユーリは気絶している武装店員に 他力本願 を使おうとした。

やっぱり他人任せかつ！

が、そんなユーリとネコ風船の目が合った。

思わず固まるユーリ。

「ヤバッ！」

にゃ〜んと鳴いたネコ風船とユーリが顔面衝突。またの名を熱いキス！

次の瞬間、ユーリの意識がフツと抜けたのだった。

ふかふかのベッドで眠るユーリを呼ぶ優しい声。

「ボクの愛しいユーリ、早く目を覚まして……」

ユーリのおでこに触れたやわらかい唇の感触。

ゆっくりと目を開けたユーリは、いきなり鼻血ブー！

噴射した鼻血はすっぱんぼんの男に掛かった。

「お、おにいたん！」

ユーリは慌てて両手で目を塞いだ。

「おにいたん、どうして裸なの？ お風邪引いちゃうよ……」

あれ、なんか可笑しい)」

なにかが可笑しいことにユーリは気づいた。

いきなり裸族の兄が仁王立ちしているのも可笑しいが、そこじゃなくて……なにか重要なことがあったような気が……。

「あ、どうしてアタシお兄様のことおにいたんって呼んでる

んだろう。そうだ、これっていつもの夢なんだ」

でも、なにかもっと重要な何かを忘れているような気がした。恥ずかしそうにユーリは指の隙間からアーヤお兄様のことを覗いた。

いつも夢に出てくるアーヤと変わらない。いつもと同じのつぺらぼう”。今日はすっぱんぼんの大サーピスだ。

「おにいたん、早くお洋服着てちょうらい。恥ずかしいよあ」
「いつも一緒にお風呂で洗いつこしてるのだから、別に今さら気にすることはないよ。ボクらには愛があるじゃないか！」

アーヤと一緒に入っていた記憶が甦りユーリちゃん鼻血ブー！

このまま出血多量で萌え殺される。

「おにいたん……お願いだからお洋服を着てちょうらい……
(殺害される……実の兄に欲情して死んだら、恥ずかしくてさらに死ねる)」

「しょーがないなあ。可愛いユーリのお願いじゃしょうがないか」

ため息を落としながらアーヤはしぶしぶ気替えはじめた。

そして、気替え終わったアーヤが男らしく仁王立ち 赤いふんどしが風に靡いた。

「ブハッ！」

またまた鼻血ブーのユーリちゃん。

「ゲホッ……ゲホゲホッ（な、なんでお兄様……赤フンなの）」

鼻血が出すぎて口に入って吐血状態になってしまった。

「大丈夫かいユーリ！」

すぐにアーヤが駆け寄ってくる　赤フンを揺らしながら。

「おにいたん来ないで！（これ以上近づかれたらまた鼻血で死ぬる）」

「えっ…… どうしてだいユーリ…… ま、まさかボクのこと大ッ嫌いになったのかい？ ショックだ！」

勝手な思い込みでアーヤは沈んだ。床に両手両足を付いてマジでへこんでいる。

「ち、違うよおにいたん！ おにいたんのこと好きだから、その格好で近づかれると…… ドキドキしちゃうの（さすがに萌え死ぬからやめてとは言えなかつた）」

絶望状態だったアーヤに生きる希望が湧いた。

「愛してるよユーリ！」

笑顔大爆発でアーヤはユーリに飛び掛った。

アーヤのハグハグ攻撃で、ユーリの顔は殿方の胸板にグリグリされた。

鼻血ブー！

ユーリの白い肌を彩った血の華。

その瞬間、ユーリは世界が膨らんだような気がした。部屋の壁などが、ほんの一瞬だけ膨張したような気がしたのだ。

「今……（なにがあつたんだらう？）」

「どうしたんだいユーリ？」

「ううん、なんでもないの。おにいたんとずっとこうしてたい

……おにいたんどこにも行かないよねえ？」

「もちろんだよ、なにがあるうとボクはユーリの傍にいるよ」

「お約束だよ？」

「うん、約束するよ」

二人は小指と小指を強く絡め、指切りげんまんをした。

「お約束を破ったらユーリをおにいたんのお嫁さんにするんだ
おー」

「うんうん、わかったよ」

のっぺらぼうの顔なのに、なぜか兄が満面の笑みを浮かべて
いるような気がした。

瞳を瞑ったユーリは心の中で泣いた。

「(でも……お兄様は消えてしまった……現実の世界では……
このままずっと夢が覚めなければいいのに)」

世界が一瞬だけ膨張して戻った。

ユーリの心を揺さぶる不安。

そんなユーリをアーヤは心配そうに覗き込んでいた。

「本当に大丈夫かいユーリ？」

「うん、ぜんぜんへーきだよー！ ユーリはいつも元気だもん
」

「あはは、うん、ユーリはいつも元気だもんね」

アーヤはユーリの頭を優しく撫でた。

優しい温もり。髪の毛を通して暖かいアーヤの体温が伝わっ
てくる。

急にアーヤは『あっ』と声を漏らした。

「そうだ、いい子のユーリにプレゼントがあるんだった」

「なあに？」

「ちよつと待ってて」

アーヤはユーリに背を向けてなにやら大きな箱のフタを開けているようだった。

赤フンがケツに食い込んでTバックになってますよ！

鼻血ブー！

もうユーリは瀕死だった。

アーヤは可愛い服をユーリに見せた。

「可愛いだろう？ 有名な仕立て屋にボクが描いたデザインで作ってもらったんだ。ほら、このフリルとか萌えるよね」

「おにいたん、それちよつとスカートが短い……」

「いいから、いいから、早くボクに着て見せてよ」

「うん」

ベッドから降りたユーリは服を気替えはじめた。アーヤはじつと気替えを見ている。

「おにいたん、あっち向いてて！」

「生着替えの過程も大事なのに……着替え終わったら声をかけ
てね」

アーヤは両目がある部分を手で隠した。指の隙間がちよつぴり開いているのは仕様だ。

パジャマを脱ぎ捨ててユーリはパツと着替えを済ませた。

だが。

「（やっぱりこれってスカートが……）お、おにいたん……き、

着替えたけどお」

「カ、カワイイ！ この世で一番カワイイよ、やっぱりユーリは何を着させても似合うよね。あとは魔法ステッキを持ったら、完璧な魔法少女プリティユーリに大変身だね！」

「お、おにいたん……おぱんつ見てるのは恥ずかしいよお」
スカートが短すぎてパンティーが半分以上丸見えだった。

「大丈夫、それは某海藻ちゃん仕様だから！」
仕様ならしょーがないか

アーヤは手に持っていたユリの花をユーリの髪に挿した。

「さつき摘んで来たんだ、ユーリに似合うと思ってるね」

「おにいたんありがとぉ」

「嗚呼、生きていてよかった」

「でも……」

「でも？」

急にユーリは不安そうな顔をした。

「でも、こんな格好をしてると……またお母様に叩かれるよお。

お母様もお父様も、シイ兄様も、みんなユーリのこと大ッ嫌い

なんだもん」

「大丈夫だよ、もうみんないないんだから」

「みんないない？」

「そうだよ、ボクたちは駆け落ちして家を飛び出したんじゃないか！」

「……えっ？」

駆け落ちってあの駆け落ち？

男女が結婚や交際を反対されて逃避するアレ？

啞然とするユーリをアーヤが優しく抱きしめて囁く。

「もうずっと一緒だよ」

「駆け落ちって……ユーリとおにいたんが？」

「そうだよ、駆け落ちして結婚して、今はハネムーンの最中じやないか。昨日の夜だってボクらはあんなに愛し合ったのに……
…激しすぎて覚えてないのかい？」

悪戯っぽくアーヤは言った。

鼻血ブー！

「ユーリとおにいたんが燃えるような激しい男女の……（ありえない、それはありえないけど、もしもそんなことが……いや、ない。アタシに女装を仕込んだのはお兄様だけど、お兄様がアタシにそーゆー関係を迫ってきたことはないし、一線を越えるなんて……だって血の繋がった兄弟だよ）」

でも、鼻血ブー！

取り乱したユーリの頭の中はピンク一色に染まった。

世界が揺れる。

激しく世界が膨張する。

まるでこの世界が爆発するような……。

ユーリはハツとした。

「思い出した！」

世界はさらに膨張を続けていた。

いつの間にかふんどしを取ったアーヤがユーリをベッドに押し倒す。

「ユーリ、愛してるよ」
「ダメ……でもいいかも……じゃなくて、ダメ……じゃないかも」

世界が、世界がどんどん膨れ上がる。
ユーリの胸のドキドキが爆発しそうだった。
のっぺらぼうだったアーヤの顔に唇が浮かんだ。
そして、唇と唇が重なる瞬間。

店内で大爆発が起きた。

「ユーリちゃん！」

ビビの声が木霊した。

吹っ飛ばされて床に激突したユーリ。

「うっ……大丈夫、まだ死んでませんから」

ユーリは大爆発に巻き込まれたというのに、気を失わずにビビに笑顔を向けた。だが、服はボロボロで、髪の毛もボサボサだ。

体中が痛くてユーリは起き上がれなかった。

「あはは……モロに爆発してたら死んでたかも（とっさに気づいてクソ兄貴の臭いくつしたを思い浮かべたけど）」

ちよつと離れた物陰からビビが心配そうにユーリを見つめている。

「ユーリちゃん大丈夫？」

「ええ、なんとか生きてます。ドリームにゃんこを見切ったかもしれない」

「今そつち行くね！」

「危ないから来ないで！」

「でもお！」

「動いたら ドリームにゃんこ の餌食になります。アタシはこの魔法の対処法を見つけたから大丈夫です（たぶん）」

一呼吸入れてユーリはさらに話を続ける。

「ドリームにゃんこ」は精神攻撃の一種なんです。あのねこしゃん型風船にぶつかると、願望や欲望などを増幅させる夢を見せさせられ、その妄想をエネルギーに変えて大爆発を起こす。つまり自爆に追い込まれるわけですね（あはは、いろんな意味で恐ろしい魔法）」

ユーリは力を振り絞って立ち上がった。

そして、ちょっぴり胸の辺りがスースーすることに気づいた。慌ててユーリが自分の胸を見ると ない！

胸はもともとないけど、胸じゃなくて服が破れてなくなっていた。

すぐにユーリは両手で胸を隠した。

「（あ、焦るな、焦るな自分。大丈夫、大丈夫、ビビちゃんには背を向けているし、ローゼンクロイツ様はトランス状態だし、店員は気絶してるから誰にも見えないし見られてないハズ！）」

ユーリが床を見ると胸に詰めていた特製パッドが落ちていた。そこまでの距離はざっと二メートル。取りに行くと ドリームにゃんこ の攻撃範囲に入っつてしまいそうだった。

「（焦るな自分。あのパッドは明らかに通常の物と違って、アタシが特別に発注して作らせた“胸の形”そのもの。あんなのが落ちてたら絶対に不審がられるし、アタシのだってバレたらヤバイ！）」

そーつとユーリは特製パッドに近づこうとした。

ネコ型風船が動きを止めてユーリを見る。

……ヤバイ、目が合ってしまった。

だが、ユーリは瞬時に手を動かした。

「秘儀 他力本願 発動！」

ユーリによって操られた武装店員がぶっ飛び、ネコ風船を突

き破った！

「やった！」

気絶している者は無心状態なので、ドリームにゃんこの妄想に支配されないのだ。

が、武装店員を操った瞬間に、ユーリは自分の胸から手を離してしまっていた。

「きゃっ！」

思わず声をあげてユーリは片手で胸を隠した。

「どうしたのユーリちゃん！」

物陰からビビが顔を出した。どうやら見られてなかったようだ。

「あはは、なんでもないです（マジ焦った）」

だが、さらにマジ焦る事態が起ころうとしていた。

ユーリが隙を作った瞬間、いくつものネコ風船が襲い掛かっ

てきたのだ。

片手だけで武装店員を操るが追いつかない。

猫の鳴き声がそこら中に響き、ネコ風船がぶつかる瞬間。

「クソ兄貴のパンツ！」

ユーリは叫んだ。

すると、眼前まで迫っていたネコ風船からプシュッと空気が抜け、次々と床に落ちたではないか

どうやら萎える妄想をすると、ネコ風船は力を失って萎んでしまうらしい。

新たな風船がローゼンクロイツの口から吐き出される。まるで魂が抜け出ているみたいだ。

そんな光景を見ながらユーリはチャンスを見出した。

「今だ、ゆけーっ店員ミサイル！」

ぶっ飛んだ武装店員の頭突きがローゼンクロイツとごっつんこ！

足取りをフラフラさせたローゼンクロイツは、そのままバタンと倒れてしまった。

「ごめんなさいローゼンクロイツ様。でも、助かったあ！」

その声を聞いてビビが物陰から顔を出そうとした。

「もう出ても大丈夫なの？」

「待った、まだ危険です、非常に危険ですからそこでじっとしててください！（アタシがマジ危険）」

焦りながらユーリは床に落ちた“胸”を拾い上げた。

これでとりあえず一件落着いた……のか？

“変な人”の情報は途絶えてしまった。

そんなガツクリ肩を落とすルーファスの元に、クラウド魔導学院近くのカフェで大騒ぎがあったと耳に入ってきた。

どーやらその騒ぎの元凶が空色ドレスの電波系魔導士だと聞いて、さらにルーファスは現場に急いだ。

その途中で、見覚えのある顔二人と出くわした。

「どうしたのユーリその格好」

ルーファスは眼を丸くしてユーリを見た。

ユーリの格好は胸に上着をグルグル巻いている斬新なスタイル。まるでさらしか水着でも着ているような格好だ。

「ローゼンクロイツ様の愛の鞭に巻き込まれて、服がポロポロになってしまったんです（あんまり動くと胸がズレそうで怖い）」

お前はズラを気にするオッサンかっ！

あともう一つ、ユーリには切実な問題があった。

「ルーファス……」

「なに？」

「……服を買うお金を貸してください（金は貸しても借りる人がオーデンブルグ家の家訓なのに！）」

人からお金を借りることはオーデンブルグ家の者として恥だった。

恥辱だ、屈辱だ、辱めだっ！

ルーファスは首を傾げる。

「はい？」

「アタシ、これしか服を持っていないんです（服がないと明日から生活できない）」

「えっ？（……だから毎日同じ服を着てたのか）」

ビビが話に割り込んでくる。

「あたしの貸してあげるよ……あつ、でもユーリちゃんのほうがちよっぴり胸大きいかもあたしより」

ビビは自分の薄っぺらな胸とユーリの胸（偽造）を見比べた。慌ててユーリは取り直す。

「だ、大丈夫ですよ、胸なんてどーでもなりますから（元からないもんね！）。ビビちゃんに服を貸してもらえるなんて光栄です、返すときはリボンをつけて返しますね！」

「リボンはいらないけどお。返すのはいつでもいいよ」

「ありがとうございますうー！（ビビちゃんの服……嗚呼、幸せ）」

貸してもらったらコッソリ臭いを嗅ぎそつな顔をしている。

じとーっとした目でビビは誰かさんに目をやった。

「ユーリちゃんもいろいろ苦労してるんだね、誰かさんのせい
で」

「……そうですね、私が全部悪いんですよ。僕がユーリを召喚したんだもんね、そうそう僕が悪いんだよ……どーせ僕には魔導の才能なんてないし、召喚術なんてした僕が悪いんだよね」

いじけたルーファスはしゃがみこんで、地面にらくがきを描

きはじめた。

ビビが呆れたようにため息を吐いた。

「ルーちゃんはなにも悪くないから平気だよ、元気だして。」

「嗚呼、生まれてきてごめんなさい。そんなこと言って生んでくれたお母さんごめんさい。もう僕なんか生きてる価値もないね……あは……あはは」

「ルーちゃんがあたしのこと召喚してくれたから、こうやって出逢えたんだよ。あたしはルーちゃんに逢えて本当に幸せなの……だから元気だして、ね？」

ビビちゃんの言葉を聞いてユーリちゃんなんだか嫉妬。

「別に落ち込んでるヤツなんか励ます必要なんてないんです。

この世は強い者だけが生き残るんですから」

吐き捨てたユーリの前に怒った顔をしたビビが立った。

「ユーリちゃんなんか大ッ嫌い！」

バシーン！

強烈なビビのビンタがユーリの頬を叩いた。

無言で立ち尽くすユーリ。自分になにが起きたのか理解でき

なかった。

そして、走り去っていくビビの後姿。

時間差攻撃でユーリにシヨックが訪れた。

「ビビちゃんにフラれたあゝっ。服も貸してもらえな〜い……絶望だ」

ユーリは両手両足を地面に付いた。横ではルーファスもへこんでいる。

立ち直るのはユーリのほうが早かった。横にいるルーファスを見てアレのことを思い出したのだ。

「立てルーファス！」

キレた眼をしながらユーリはルーファスの胸倉を掴んで立たせた。

「ご、ごめんなさいユーリさん。僕が全部悪いんです、僕が生きてるから世界から戦争がなくならないんです！」

「そんなことでいいの！」

キャラを作るのも忘れてユーリはルーファスにガンを飛ばした。

「カーシャから預かってるもんがあるでしょ、早く出さないと又ツコロス！」

「え、ああああ、あーっと、なんですか？（怖い、このユーリ怖い、いつものユーリと違うよぉ〜）」

「ほ・れ・ぐ・す・り！！！」

ユーリの手がルーファスの首を絞めた。

「うっ……苦しい……言うから……このままじゃ言えないから

……手を……（殺される、僕はここで殺される！）」

「ったく」

ユーリはルーファスの首から手を離れた。

ルーファスの首にできた青痣がちよっぴり痛々しいです

「げほっ、げほっ（死にかけた、花畑が見えた）」

「早く言えよ」

「えーっですぬ……カーシャから惚れ薬を預かって……それ

から（怖い、僕を見る眼が怖すぎる）」

「預かって？」

「学院のロッカーに入れっぱなしだったり……あはははは」

「ぶちまける！」

強烈なパンチ！

ユーリのパンチを顔面で受けたルーファスは、宣言どおり鼻血をぶちまけて気絶した。

さよならルーファス、お元気で！

地面に倒れたルーファスからユーリはサイフを奪おうとした。サイフはビビが持つてるなんてすっかり忘却の彼方だったりする。

「服のお金は慰謝料としてもらっておくからね！」

だが、やっぱりサイフはない。

代わりにユーリはある物を見つけた。

「これって……セバスちゃんの口コミ（やっぱりこっちに来てたんだ）」

それは執事のセバスがいつも大事に持っている、ハート型のロケットペンダントだった。

「アタシの写真？」

ロケットを開けると笑顔で写っているユーリの写真が入っていた。

一方そのころ。

“変な男”こと執事のセバスは、地下水道でスライムの大群と

「追いかけてっこしていた。」

「何処ダヨ此処！」

完全に迷子だった。

スライムが黒子の顔に張り付いた。

「前が見エネエーゾ、コンチキシヨー！」

実際に見えないのはパペットではなく、黒子だったりする。

「……あっ」

どこからか素の音が漏れた。

次の瞬間、足を滑られた黒子が下水道に流されたっ！

「ギャ〜ッ！」

さよならセバスちゃん

いつになったらセバスはご主人様と出会えるのでしょうか？

第3話 O Eド捕物帖オウジサマン！

夜の街に警備隊の声が鳴り響く。

「そつちだ、そつちに逃げだぞ！」

月華の薔薇が屋根から屋根へと飛び移る。

それは真っ赤なドレスを着た影だった。

風に靡く真紅の髪、咲き誇る薔薇のドレス、夜行蝶のようなマスク。その姿はマスカレードの華だった。

王都アステアを賑わす革命家にして怪盗、救世主にして犯罪者、その名は薔薇仮面。

自らその名を名乗ったことはない。あくまで薔薇仮面の名は新聞社などが付けた名前であり、その素性は一切不明とされている。

路地から屋根を飛ぶ薔薇仮面に向けて銃弾が発砲された。

夜を舞う優雅な蝶は手を翳したに過ぎない。それだけで全ての銃弾は地面に落ちてしまった。

薔薇仮面は類稀なる魔導の使い手と称されていた。全ての攻撃は薔薇仮面を前にして屈するほかない。

「クソツ、そこから降りて来い！」

警官隊の一人が怒鳴った。

それを屋根から見下ろす薔薇仮面の口元が、微かな嘲笑を浮かべた。

刹那、辺りは昼よりも明るい閃光に包まれ 薔薇仮面は姿を消した。

「見失うな、すぐに追え！」

「クソツ、なにも見えないぞ！」

次々とあがる男たちの怒声。

その声を一本先の路地で耳にしていたユーリ。

「なに今の光？（なんか男の声も聞こえたような気がしたし…

…？）」

バイト帰りのユーリちゃんは、仮住まいにしている魔導学院の宿舎に向かっていている途中だった。

「はあ」

ため息を落とすユーリ。

「早く次のバイト探さなきゃなあ」

初日からクビでした！

しかも、トラブルを起こして追い出されたのでバイト代すら貰えなかった。

「（普段だったら絶対に訴訟に持ち込んでやるのに悔しい。そもそもアタシは人の上に立つことはあっても、人の下で働くなんて向いてないのよね）」

今のユーリには訴訟を起こすお金すらなかった。

それでもなんとか生きてます！

食事は相変わらず誰かのおごりで、服はルーファスから慰謝料として買ってもらったが、それでも二日分のローテーションしかない。ルーファスも月明けの二日目にならないと、親から

の仕送りが振り込まれないらしい。

「（嗚呼、お兄様……ユーリは今日もハングリー精神を鍛えています。でもできればお金と権力を取り戻したいです）」

ユーリはまん丸のお月様に祈りを捧げた。

「空からお金とか降って来ないかなあ……あつ」
降って来た。

ただそれはお金ではなく人だった。

淡く輝く月に映る真紅の影。

「嗚呼、美しい……」

ユーリが真紅の人影に見とれていた次の瞬間。

「ブハッ！」

顔面キック！

空から舞い降りた薔薇仮面の足の裏を、上を向いていたユーリの顔面がナイスキャッチ。見事に踏みつけられた。

鼻血を噴きながらその場に昏倒するユーリ。

軽やかに走り去っていく薔薇仮面。

すぐに薔薇仮面を追ってきた警備隊がこの場に現れた。

「薔薇仮面はどこ行った」

「おい、ここに誰か倒れてるぞ？」

警備隊が輪を作って気絶しているユーリを囲んだ。

「怪しいやつだな。とりあえず連行してぶち込んでおけ」

こうしてユーリは無実の罪でパクられてしまったのだった。

次の日。

ユーリはクラウス魔導学院の廊下をブツクサ眩きながら歩いていった。

「ありえないし、絶対ありえないし……」

今日はクラウス魔導学院に転校初日、華麗なる教室デビューの日になるはずだった。

とは言っても、数日前から学生宿舎を使っていたり、学校見学と称して学院内を歩き回っていたため、それなりに学院に馴染んでいたりする。

でもね、でもね！

まだクラスの仲間の顔も知らなかったりするし、ドキドキわくわく週明けの登校日をユーリちゃんは楽しみにしていたというのに……。

「あはは、まさかアタシの人生で留置場にぶち込まれることが起きるなんて（でもどーにか操は死守できて体が男だつてバレずに済んだけど）」

ユーリは瞳をキラキラさせながら祈りを捧げる。

「（嗚呼、お兄様……ユーリはまた一つ大人の階段を登りました。留置場って本当に怖いところですね。せめてもの救いは男女別々で女の子のほうに入れてもらえたことくらいです。あと朝食もタダで食べさせてもらいました）」

そんなわけですでに放課後だった。

学院を歩き回っていたユーリは目的の人物を見つけた。

「ルーファス！」

その名を呼ぶと、いつものグルグル眼鏡が振り返った。

「あ、ユーリ。今日って転校初日だったんでしょ、クラスにはもう馴染めた？」

「あはは、又ツコロしますよ」

笑顔でユーリはルーファスの胸倉を掴んでいた。

「ご、ごめん……なにか不味いこと言っちゃったかなあ？（なんか最近ユーリ僕に対して怖い）」

まだルーファスはコツチがユーリの本性だと気づいていなかった。鈍感！

スーツとユーリは全身から力を抜いて、ルーファスの胸倉を解放した。

「アタシこそごめんなさい、たまたま虫の居所が悪かったんです。ルーファスに八つ当たりしてしまうなんて、アタシ……」

うつむき加減でちよっぴり涙目になるユーリ。こんな演技にルーファスはコロツと騙される。

「いや……いいよ、謝らなくて。誰でもちよつとイライラしてるときってあるよね」

「ありがとうルーファス、こんなアタシを許してくれて（ふんっ、男は女の涙にすぐ騙されるんだから、ちよろいわ）」

黒い、黒すぎる……ユーリちゃんのお腹は真っ黒です！

今まで涙目だったのがウソだったように（ウソですが）、ユーリは気を取り直して無愛想なキャリアウーマンの顔をした。

「というわけですから、さっさと預かっている物を渡してください」

「はい？」

「カーシャ先生から預かっている物をさっさと出してください。
5、4、3、2」

勝手にカウントダウン開始。

焦りながらルーファスはポケットから小さな小瓶を取り出した。

「ちょ、あつたあつた、はいこれだよな？」

「ありがとうルーファス」

ニッコリ笑顔のユーリちゃん。表情の起伏が激しいです。

ルーファスはメモもユーリに手渡した。

「それは説明書らしいよ」

「こんな物まで用意してもらえるなんてカーシャ先生って親切ですね（まっ、用意して当然だけど）」

ニッコリ笑顔のユーリちゃん。裏表も激しいです。

さっそくユーリは説明書を読むことにした。

カーシャちゃんドキドキわくわく媚薬の使い方講座

「……今どきこんな丸文字（使ってるのオバさんくらいだし）」

カーシャのメモはイタイほど丸文字だった。

この媚薬の使い方方はちょー簡単、注射器で相手のケツに
ブチ込め！

「どこが簡単じゃボケッ！」

思わずユーリは大声で叫んでしまった。

近くにいた生徒たちが足を止め、真横にいたルーファスも唾
然としてしまっている。

注目を浴びてしまっていることに気づいたユーリはすぐに取り直す。

「あはは、今度演劇でツンデレラの役をやるんです。そのセリフの練習です、あはは……（ヤバイ、スゴイ汗かいた）」

ユーリはそーつとそーつとこの場をあとにした。

ルーファスを置いて中庭に出たユーリは、噴水の見えるベンチに座ってメモの続きを読むことにした。

というのはウソで。

「ウソかよっ！」

また大声を出してしまったユーリは慌てて辺りを見回した。

若干、遠くの生徒の目を引いてしまったが　うん、なかったことにしよう

気を取り直して、今度こそ動じない心でユーリは続きを読んだ。

この惚れ薬はまだ完成していない。完成させるためにはお前の体液が必要だ。この薬とお前の体液を混ぜ、それを相手に飲ませることにより効果が発生する。ちなみに混ぜる体液によって効果の度合いが変わってくるので注意しろ。妾のおすめの体液はピーとかピーとか、ピーだな。

「（ユーってなに）」

“ピー”の部分は最初から“ピー”って書いてあった。

伏字の部分はさらりと流して、だいたいユーリはこのクスリについて把握した。

「（つまり、フェロモンの多い汗とかがいいのかなぁ……って、

できない)」

実はまだ誰に飲ませるか決まっていなかったが、誰であろうと好きな相手に自分の体液を飲ませるなんて、そんなこと……。

「……ただの変態じゃん」

そうです、ただの変態です！

相手のケツにプチ込むよりは難易度が低いですが、変態であることには変わりなかった。

でも、もしもこれを使うとしたら誰に？

「……あれ？（なんでこんな物を作ってもらったんだっけ）」

ユーリは考え込んだ。

1 . サキユバスの力を失ってしまった。

2 . そんなときに現れた運命の人。

3 . それは一目ぼれしたビビちゃん。

本来ならビビに使うところだが、ユーリの頭には他の子も浮かんでいた。

「（ローゼンクロイツ様も捨てがたい。これからまた他の子と出逢うかもしれないし、今まで気づかなかったけど、実は近くにいた子と恋愛の花が咲くっていう展開も訪れるかも……ルーファスとかは絶対じゃないけど）」

サキユバスって種族は浮気性が多いと云われている。

ユーリちゃんに一人を選べなんてムリな話です！

「でも……」

記憶に木霊する言葉。

『ユーリちゃんなんか大ッ嫌い！』

強烈なビンタの感触が、今も残っているような気がして、ユーリは頬に軽く手を当てて少し哀しい顔をした。

ユーリは小瓶を力強く握り締めた。

「ビビちゃんと仲直りしなくちゃ！（でも惚れ薬を使うかどうかは保留ってことで）」

惚れ薬の入った小瓶はとりあえずポケットにしまって、どうやって仲直りするか考えることにした。

題して「ユーリちゃんの仲直り大作戦！」という捻りもない名前。

「（やっぱり女の子にはプレゼント。たしか前にカフェで話したとき……そう言えばあのカフェどうなったんだろう、ローゼンクロイツ様にもあれ以来お会いしてないし）」

思いつきり話が脱線してしまった。

香水の匂いがどこから漂ってきた。

ユーリが辺りに目を配ると、目の前に空色ドレスが立っていた。

「あ、ローゼンクロイツ様」

「そうだよ、ボクはローゼンクロイツだよ（ふにふに）」

「そういう意味でお名前を呼んだのではなく……まあいいです。ところで、メルティラヴでの一件のあと、ローゼンクロイツ様はどうなされたのですか？」

「なにそれ？（ふにゆ）」

忘却の彼方だった。

「ええっと、あのお店と一緒にスイーツを食べながら、アタシ

とビビちゃんとお話したのは覚えていらっしやいますよね、ねっ？（あの楽しい思い出まで忘れてたらちよつとへこむ）」

「……忘れた（ふあふあ）」

ユーリちゃんシヨック！

「あはは、そ……そうですか。え、でも、猫還りをしてお店を破壊したのは知っていますよね？」

「……らしいね（ふう）」

猫還り ときの記憶はない。まるで夕子の悪い酔っ払いだ。全部、あとから聞かされて自分がなにをしたか知るのだ。

以下、ローゼンクロイツはあとから聞かされた話。

「キミたちが外に出されたあと、ヤツの秘書が現れて事態を收拾したらしいよ。お店もヤツがお金を出して立て直すらしい……ヤツに借りを作るなんて苦笑（ふう）」

本当に嫌そうな顔をしてローゼンクロイツは口元を歪めた。

ローゼンクロイツマニアのユーリには、「ヤツ」とその「秘書」の名前もわかっていた。

「ヤツ」とはクラウス魔導学院の学院長である。どうやらローゼンクロイツの帕特ロンらしいが、ローゼンクロイツはとも学院長ことを嫌っているらしい。

ローゼンクロイツのご機嫌を損ねるのも嫌だったので、ユーリは別の話題を振ることにした。

「ところで、こんなところでなにをなさっていたのですか？まさか、アタシを見つけてわざわざ声を掛けに来てくださったとか？（だったら、それって愛！）」

「……迷った（ふあふあ）」

「はい？」

「家に帰りたいのに学院から出られない（ふう）」

「……あはは、迷子になられていたんですね。だったら、アタシが送りましょうか？（さすがローゼンクロイツ様、そんなところが萌え）」

「別にいいよ、明日も授業あるから（ふあふあ）」

「……あはは、そうですね。明日も授業ありますもんね！（アタシと次元が違う）」

もうこの話題には触れません。どうして明日も授業があるからとか、詳しい説明をするのも拒否です。

ローゼンクロイツはふあふあ歩き出した。

そんな後ろ姿を見ながらユーリは誓う。

「もうアタシは止めません。貴方は貴方の信じる我が道を突き進んでください」

そして、またローゼンクロイツは迷子になるのだった。

ユーリちゃんの仲直り大作戦！

というわけで、ビビにプレゼントを買うため、ユーリはバイト中だったりした。

今を遡ること数時間前、『今日は特別に無料でバイト先を紹介してやるよ』というジャドの言葉で、ユーリが連れて行かれたのはギルドだった。

ギルド“シャドウクローウ”のモットーは来るものは拒まず。

そんなわけだから、ユーリは勝手に新人ギルド員に登録され、有無を言わず仕事を与えられてしまった。

初仕事はジャドのサポート役で、仕事内容を聞かされないまま、鍛冶屋に向かうことになった。

ドラゴンファンクという名の鍛冶屋は、王都アステアでも三本の指に入る有名店で、実力はナンバーワンだろう。ただし、店主が頑固オヤジで客を選ぶのが致命傷らしい。

中央広場に近い立地条件の良い場所に、ドラゴンファンクは店を構えていた。

二人が店の中に入ると、いきなりナイフが飛んできた。

「何度言ったらわかるんだい、さっさと出ててって頂戴！」

ナイフを投げたのは、店の奥で煙草を吸っている女だった。

この店のカミさんだ。

カミさんの名前はアルマ。鍛えられた体は若々しく、見た目は二十代後半くらいだが、実は二児の母で上の娘は一三歳だったりする。

ジャドは陳列している武器や防具の間を抜け、飛んでくるナイフをかわしながらカウンターの前に立った。

「こちらとしてもメンツがある。この店に勝ってもらわなくては困るんだ」

「だから言っただろう、うちのダンナはそんな勝負事に興味ないって」

「おやつさんと直接話したい」

「ちょっとそこまで出かけてんだ。いつ帰るかかわらないよ」

「昨日も、その前も、その前の日もだ。いつになったら帰って来るんだ？」

「さあね」

「ジャドは怒ったようにため息を吐き、床に座り込んでしまった。」

「待たせてもらうぞ」

「勝手にしな」

アルマも怒っているようで、そっぽを向いてしまった。

まったく状況がつかめず取り残されているユーリ。とりえずジャドの横に腰を下ろした。

「ああ、今回の仕事の内容を教えてくださいませんか？
か？」

「この国の王がランバードの王に剣を贈りたいらしい。それで鍛冶勝負をして贈る剣を選ぶことになったんだ」

「この店に勝たせるのが仕事内容？」

「そうだ」

二人の会話に聞き耳を立てていたアルマが口を挟む。

「そんなこと頼んでないよ」

その言葉を聞いてユーリは当然こんな質問を投げかける。

「じゃあ誰の依頼なんですか？」

「うちのギルドマスターの個人的な依頼だ」

ジャドがうんざりしたように答えた。

この依頼には裏がある！

…… ような気がする展開だ。

しかし、そんな期待もあっさりジャドに壊されることになった。

「ギルマスの気まぐれなんだ。話せば長くなるが、七五パーセントオフで話をする、ウチとホワイトファンクというギルドは仲が悪い。向うは王宮直属のギルドだから、互いにいろいろ目の敵にしてるんだ。それで今回の対決になるわけだが、ホワイトファンクが敵方の鍛冶屋を全面バックアップしているらしいと聞いたウチのギルマスが、対抗意識を燃やしてこの店を絶対に勝たせたいんだと……（くだらない）」

大人がする子供のケンカだ。

そんなわけでジャドはここ数日、この店に来て説得を続けているっぽい。しかもどうやら店主のおやっさんに会わせてもらえないらしい。

ジャドはおやっさんの帰りを待つと言っているが、忍耐のないユーリはすでに飽きていた。

「ちよつと店の外のようにすを見てきます」

というセリフで逃亡。

ユーリは店の外に出てどつとため息を漏らした。

「（人にこき使われるバイトよりはマシだけど……ヒマだ！）」

店で待っていてもおやっさんには会わせてもらえないらしいので、こつちから探したほうが早いような気がする。

おやっさんはどこにいるのか？

店の奥に隠れているのか、それともどこかに逃亡しているの

か？

とりあえずまずは近隣で情報収集だ。聞き込みをしようとするユーリがしていると、話しかける前に話しかけられた。

「あのすみません、シャドウクロウからご訪問の方ですか？」

「はい、そうですけど？」

ユーリの視線の先には、同い年くらいの眼鏡っ娘が立っていた。

「わたし、この店の娘のアインって言います！」

二つの拳を胸の前でギュッと握っている。しかも眼鏡がキラキラ輝いている。無駄に元気そうな眼鏡っ娘だった。

ユーリちゃんも営業スマイルで応じる。

「こんにちは、ユーリと申します。本来ならばこんな可愛い女の子をデートに誘わないなんて一族の掟に反することなのですが、仕事中で忙しくて申し訳ない（お金がないから誘えないだけだ）」

「やっぱりあなたが正真正銘ユーリさんなんですわね！」

「えっ……アタシってそんなに有名人でしょうか？（やっぱり可愛いって罪なのね）」

「クラスメートです。店の中にいるジャドさんも同じクラスですよ？」

「ええっ！」

まったく知りませんでした！

「今日から謎の転校生が来るってみんな愉快爽快だったのに、食中毒で臨時休業するって先生が言っていました」

「いや、食中毒とかにはかかってないんだけど（留置場にぶち込まれたなんて言えやしない）」

「ところで……」

急にアインのテンションが下がった。

そして、いきなりハイテンション！

「ローゼン様とはいったい全体どういう関係なんですかっ！

メルティラヴと一緒に楽しくおしゃべりしてたってウワサが垂れ流しですよ」

「……はい？（なにこの子、ローゼンクロイツ様の信者？）」

「あう……わたしですら一緒にスイーツとか食べたりしたことないに……」

死の宣告を受けたみたいなの落ち込みよう。

呆然とするユーリに関係なく、アインは勝手に落ち込んで勝手に復活した。

「えと、申し遅れちゃいました、わたし……薔薇十字団の会長のネイス（ハンドルネーム）です！」

「ええっ！（まさかこんな子が会長だったなんて予想もしてなかった）」

「薔薇十字団とはローゼンクロイツ様のファンクラブです」

「知っています。だってアタシも会員ですから……（狭い、世間って狭い）」

「し、真実ですかっ！ だったら抜け駆けですか、他の会員を差し置いてローゼン様と親睦会ですか！ お天道様が許しても信者たちが許しません！」

「だったらアインちゃんもしたらいいのに」

「ぐわっ！」

あまりの衝撃にアインは三步後ろに下がって固まった。

そして、恐怖に駆られて震えだすアイン。

「そ、そそんな神をも恐れぬ悪行……崇高なローゼン様と親密関係なんかしたら、天罰が下って末代まで祟られますよっ！」

「そんなことないと思いますが、好きな人に好き言わない人生なんて腐ってますよ」

「愛の告白なんかしたら、喉笛が潰れて声が出さなくなっちゃいますよっ！」

「……そ、そうですか（変な人）」

ローゼンクロイツへの愛は変わらないかもしれないが、友達としては一線を引いて付き合おうとユーリはコツソリ誓うのだった。

ユーリはふと思いついた。

「そう言えば、シャドウクロウのギルド員であるアタシに用があつたんじゃないですか？」

「あ、そうでした！ すっかり脳ミソから脱落してました。至極大事な話がありましたです！」

「（大事な話なら忘れないですよ）どのような話でしょうか？」

「実は……父が行方不明なんです！」

今すぐ捜索願届けを提出しましょう！

アインが知らないということは、母親のアルマも知らない可

能性が出てきた。

ユーリは難しい顔をして考えはじめた。

「(奥さんはまるですぐに帰ってくるみたいない方してたけど、行方不明ならそうだって言って鍛冶対決を辞退すればいいのに。なんでわざわざくだらないウソを付くんだろう?) どうして行方不明になったんですか?」

「わからないです。母に訊いてもタバコを買いに行ってるとか、パチンコに行ってるだけだからって……でも、一週間も帰ってこないですよ、奥さん事件ですよ!」

もしかしたらアルマはなにか事情を知っているかもしれない。その前にアインから聞き出せることを訊いておこう。

「過去に同じようなことはなかったんですか?」

「父が長々と店を放棄することはありましたけど、ちゃんと言付けを残してました。その間は母とわたしで店を守り抜くんです。でもこの度の事例は……きつと悪の組織に捕られられてるんです!」

「悪の組織に心当たりが?」

「……ありません。雰囲気で言ってみただけです(父は正義の味方マニアですし)」

ノリでした、ごめんなさい!

ため息を漏らしながらユーリは質問を続ける。

「お父様が行方不明という話をジャドにはしたんですか?」

「至極できないですよ、同胞と言えどあの恐怖なんです。授業中もあのフードをお取りにならないですよ、怪しい人を略

して怪人じゃないですかっ！」

「(怪しいというか、ただのネット通販好きだけど)ならアタシがお母様に尋ねてきます」

「あの……わたしはここで待機コマンドでいいですか？ 昨今、お母さんピリピリしてて恐怖なんです」

「大丈夫です、中にはジヤドもいますから」

さっそくユーリは店の中に戻り、ブスツとしているアルマの前に立った。

「行方不明らしいですね、アナタのダンナさん」

その言葉を聞いたアルマの瞳がギラーン！

ぶっ飛ぶナイフ、豪雨のごとし！

アルマによって投げえられたナイフを必死でかわすユーリ。

「アタシを殺す気か！」

「殺されなくなかったらさっさと出てお逝き！」

逝きたくありません！

ナイフがユーリの股間の下を抜けた。

「(……今、自分がオトコだっことを思い知らされた)」

女の子にはわからないキューンとした感覚。

あとちょっとナイフがズレていたらオトコとして再起不能になるところだった。

よし、逃走しよう！

ユーリは冷や汗を流しながら店の外に飛び出した。

外で待っていたアインがすぐに駆け寄ってきた。

「顔面蒼白ですけど、大丈夫ですか？」

「あはは、大丈夫。うん、お父様はきっと帰ってくるから大丈夫！（ウソだけど）」

ウソかよっ！

そして、ユーリは笑いながら逃げ去った。

ジャドも追い出されたようで、店の中から出てきた。

「ユーリのせいで俺まで追い出されてしまった。しかもどこに行っただんだアイツ」

辺りを見回すジャドがアインを見つけた。

「……ん、アインじゃないか？」

「こんにちは、そしてさようなら！（こ、怖いよ、あの人恐怖です！）」

ジャドと眼が合つてアインも逃亡。

残されたジャドは首を傾げながら深く息をついた。

「なにかしたか？」

「言えやしない、言えやしない……ジャドの背中にナイフが刺さつてるなんて、言えやしないよ！」

どーやらジャドは痛みに鈍感らしい。

街外れの料亭でお偉いさんと商人が密会していた。二人のあだ名は「ちょんまげ」と「たぬき」らしい。

「エチゴヤ、おぬしも悪よのお」

「いえいえ、ダイカーン様には敵いませんよ」

「あーははははははっ！」

国の大事な某役職に就いているというダイカーン（本名）と、

アステア王国であくどい商売でボロ儲けしているとウワサのエチゴヤ（本名）。一人が揃って悪の風が吹かないハズがない！お下劣な顔したエチゴヤが、わざとらしく菓子折りをダイカーンに差し出した。

「おっと、忘れておりました。ダイカーン様のお好きな黄金色の菓子でございます」

「おお、ではさっそく……」

ダイカーンが箱を開けると、中には金塊が詰まっていた。賄賂だ！

金塊に手を伸ばそうとダイカーンがすると、エチゴヤは箱をすつと引いた。

「なにをするのだエチゴヤ？」

「いえ、これをお渡しする前に、アレはどうなったのかとお尋ねしたいんですが？」

「うむ、アレか……」

ダイカーンは難しい顔で腕組みをした。きつと悪巧みがうまくいってないのだ。ケツ、ざまあ見やがれ！

エチゴヤも不安そうな顔をしている。

「どうかなされたんで？」

「それがな、エルザが当日に視察に来るらしいのだ」

「あの堅物の女ですかい？」

「ヤツはクラウス王のお気に入りだからな（若造のクセにホイホイ出世しおって、どうせ体を売っているに違いない。汚い女だ）」

ダイカーンたちが危惧するということは、きっとエルザは清廉潔白な正義の味方に違いない！

体売っていたとしても、きっとそれは純愛だ！

と、いう感じで、悪役に対する正義を勝手に妄想してみたり。とにかく、エルザという人物の詳細は妄想の域を出ないが、エルザの登場によってダイカーンたちの企みが失敗する可能性があるらしい。

しかし、エチゴヤは余裕の笑み。

「ですがダイカーン様、ドラゴンファンクが対決を辞退すれば我々の不戦勝、あの店に勝ったとなれば、あっしらがひいきにしている店も大繁盛、王国の武器や防具の受注を一手に握ることも可能ですぜ」

「わしらが手をくたさずとも、あの店のオヤジが行方不明になつてくれたのは運がよかつたな」

「そうですとも、運は我らの味方ですよ。エルザなんか恐れるに足りません」

「そうだな、あーはははははっ！」

ふんぞり返って笑うダイカーン。そのまま重力に引かれてゴーン！

お約束の後頭部強打。

特にこの話題を引っ張ることもないので、さつさと次の展開が起ころうとしていた。

廊下を慌てたようすで走る音。

障子を開けて若造が部屋に飛び込んできた。

「大変ですぜダイカーン様！」

「おう、どうしたのだゴンベエ？」

「薔薇仮面から挑戦状が王宮に届いたそうですぜ。鍛冶対決を邪魔しようと企んでるそうで」

ダイカーンとエチゴヤは顔を見合わせた。

「わしらの企みに気づきおったのか？」

「万が一、そのようなことがあっても薔薇仮面を始末すれば済むこと、ヤツを始末すればダイカーン様の手柄となり、一石二鳥というものですよ」

「あーははははっ！」

ゴン！

この話題には触れません。

春の木漏れ日のような暖かい温もり。

おやつさんはバツと眼を覚ました。

「生温ッ！」

そして、おやつさんは自分に抱きついてる裸の男に気づいて飛び起きた。

「誰だよっ！」

で、自分も裸だったことに気づいて股間をガードした。

頭を混乱させながら、おやつさんは辺りを見回した。

どうやらどこかの洞窟らしい。

焚き火の周りで服を乾かしている。

そして、赤フンで仁王立ちする男　　顔は黒頭巾で隠されて

いた。

黒子がパペットをサツと出した。

「生肌デ温メルノ八常識ダロウガッ！」

凍えた人を温めるのは服を着たままより生肌のほうがよい。

豆知識だ。

しかし、この赤フン男に抱きつかれていたかと思うと、おやつさんはゾツとして寒さがぶり返してきた。

「ハクシヨン！」

鼻水を飛ばしたおやつさんを見て黒子を抱きついて来ようとした。

「死又ナ、今温メテヤルゾ！」

「近寄るな変態！」

おやつさん怒りの鉄拳！

グーパンチを喰らった黒子は地面に尻餅についてM字開脚！

サツとおやつさんは顔を背けた。

「さつさと服を着やがれ変態」

「赤ふん八漢ノ正装ダ、コンチキシヨー！」

「助けてもらったようなのは礼を言うが、早く着ないと剣のサビにするぞ……俺の大事な剣はどこだ」

フルチンでおやつさんは慌てふためいた。

黒子はふんどしに手を突っ込んで、中から剣を取り出した。

明らかにサイズが合わないのは目をつぶりましょう。

「此処ニ有ルゾ」

「そんなところに入んな腐るだろ！」

「安心しろ、一日十回八洗ッテルゾ」

「そーゆー問題じゃねえよ！」

おっさん怒りの鉄拳！

地面に尻餅をついた黒子は（以下略）。

自分の剣を奪い返したおやつさんは服を着替えようとしたのだが。

「おい、俺のパンツ知らないか？」

「テメエノぱんつナラ此処ニ有ルゾ」

黒子はふんどしに手をつ突っ込んで（以下略）。

「温メタ方ガ穿ク時、氣持チ良イト思ッテナ」

「そんなパンツ穿けるかッ！」

おっさん怒りの鉄拳で黒子は（以下略）。

怒りながらおっさんはノーパンでズボンを穿き、さっさと着替えを全部済ませた。腰に剣を装備して完璧だ。

謎の黒子もすでに燕尾服に着替えていた。

「オイ、焚キ火ニ当タレ」

「すまん」

二人は焚き火の近くに腰を下ろした。

おやつさんはポケットからタバコを取り出して、焚き火で火を点けようとしたが点かない。

「チッ、湿気っちまつてるな（ホントついてねえーな）」

「煙草ナンテ吸ッテルト長生キ出来ネエーゾ」

「つるせえな、俺の勝手だろうが」

「綺麗ナ奥サント可愛イ娘ト息子ガイルンダロ？」

「なんで知ってんだよ？」

「何ヲ隠ソウ俺様ハえすばーナノダ！」

「マジか！」

「嘘ダ」

ウソかよっ！

「財布二入ッテンノ見タゾ」

「何だと？」

おやつさんは慌ててサイフを探した。ポケットあったサイフ、その中には家族で撮った写真が入っていた。思わずほっと胸をなでおろすおやつさん。

「(てっきり股間に……いや、よかった) ところでおまえ名前なんてんだ？」

「俺様ハせばす。コッチノ男ハ黒子ダ」

あくまで黒子とパペットは別々の存在です。

おやつさんも自己紹介をする。

「俺の名前はクルダ。王都アステアで鍛冶屋をやっている。この山にホワイトムーンと云う特別な鉱石を探りに来たんだが、雪崩に巻き込まれてお前に助けられたようだな」

「オウ、助ケテヤツタゾ」

「せっかく手に入れたホワイトムーンも雪崩と一緒になくしちまったようだ」

「其ノほわいとむーんナラ、此処ニ」

股間に手を通つたもうとした黒子をクルダは必死に止めた。

「待て、それはもうお前のもんだ、やるから出すな(そんなも

んで武器を作るなら死んだほうがマシだ。それにそれだけじゃ足りねえんだ、もつと多くのホワイトトムーンを探さなきゃな……見つかるかどうか知らないがな」

ホワイトトムーンと云えば、グラーシユ山脈でしか採取できない超希少価値の高い鉱石だ。しかも、この地はババナで釘が打てる極寒地帯。さらにホワイトトムーンが採取できるポイントは一年中猛吹雪が吹いていて、恐ろしい怪物も出現するデッドゾーン。

そんな場所に足を踏み込むのは度胸があるか、バカなのかどっちかだ。

しかし、クルダは再び行こうとしていた。きつとバカだ！

俺はまた採取に行くぜ。おまえはどうすんだ？」

「道二迷ッテンダ、悪イカコンチキショー！」

ユーリを探してなぜか雪山に迷い込んでいた。

「……チツ、仕方ねえな。ホワイトトムーンはあきらめつか。山のふもとまで一緒に降りてやるよ」

「本当二良イノカヨ？」

「命の恩人だからな」

「感動シタゾ、テメエ良イ野郎ダナ」

黒子はセバス人形をクルダの顔にグリグリした。

「グリグリすんな！」

おやつさん怒りの鉄拳！

黒子は地面に尻（以下略）。

鍛冶対決当日になっちゃいました！

そんなわけでユーリも会場になったダイカーン屋敷に来ていた。

どーにかこーにか、鍛冶対決は“対決”になつたらしい。つまり、あんなに頑なだったドラゴンファンクが献上する剣を用意したのだ。

その話を聞いたダイカーンは大慌て、さらに薔薇仮面の警備で大慌て、会場は混乱していた。

ユーリとジャドはドラゴンファンクが献上する剣の警護していた。

部屋に居るのはユーリ、ジャド、そしてアルマの三人だけ。店主のおやつさんは未だに行方不明だった。ちなみにアインは幼い弟の子守らしい。

ジャドが部屋を出て行くとする。

「俺はちよつと出かけてくる」

「どこ行くの？」

ユーリが尋ねるとジャドは不適な笑みを浮かべた。

「絶対に勝ってもらわなくては困るからな。そのためならどんなことでもする」

やんわり犯行声明。

ユーリは笑顔で聞き流した。

「いつてらっしゃい、トイレに！（なにするかわからないけど、絶対悪巧みに決まってる）」

ジャドはきつとトイレで悪いことをする気だ。水を流さない

とか、トイレットペーパーを隠したりする気だ。そーゆーことにしておきましょう。

今日も不機嫌そうなアルマはタバコに火を点けようとした。それをユーリが止める。

「ここ禁煙ですよ。吸うなら別の場所ですどうぞ」

「ったく、うるさい子だね……わかったよ」

怒ったようすでアルマはケツをフリフリして部屋を出て行ってしまった。

独り残されてしまったユーリ。

「……ヒマ」

ヒマを持て余しているユーリの前にある長方形の木箱。あの中には献上する剣が入っているハズだ。

「(ちょっと見てみようかな)」

ちよっぴり好奇心を抑えられず、ユーリはコッソリ中身を確かめることにした。

木箱を開けると地味な長剣が入っていた。

「(なんかガツカリ。でも、見た目は地味でもその刃はダイヤモンドも切り裂く業物だったりして)」

ユーリは鞘から剣を抜いて構えた。

「(スゴイ、物凄く軽い。重さないから威力は劣るけど、スピードはあるし疲れも堪らない。これで切れ味があったら最強じゃない)」

剣術の心得があるユーリは剣を振った。

「えい！」

くによ

「ぐわーっ！」

剣が、剣が……くによつて曲がりやがった！

刃がまるでアルミのように曲がってしまった。

「ウソ アタシ悪くないし、こんなことありえないし、落ち着
けじぶーん」

滝のように汗を流しながらユーリちゃん顔面蒼白。

そんなとこへドアをノックして私兵が部屋に入ってきた。

「失礼します、そろそろ剣を持って会場に……つてお前なにや
つてんだ！」

犯行現場を見られてしまった。

焦るユーリ。

「えっ、いや……まさか献上するハズの剣を壊してしまったと
かってことはないですから、絶対に」

「あるだろ！」

「ないです、あはは」

しかも、さらにとんでもない展開になろうとしていた。

「まさか……おまえ薔薇仮面だな！」

「はい？」

「変装してるんだろ。大変だ、薔薇仮面が現れたぞ！」

私兵は仲間を呼んだ。

私兵Aが現れた。

私兵Bが現れた。

私兵Cが現れた。

啞然とするユーリ。

「うっそ〜ん！」

もうなにを言っても聞いてもらえないっばい。

・たたかう

・まほう

・どうぐ

にげる

ユーリは曲がった剣を持って逃走した。

逃亡者ユーリ！

部屋を飛び出して廊下を走るユーリ。走れば走るほど私兵の数が増えていく仕様だ。

「なんでアタシが追われなきゃいけないの！（絶対にいつか訴えてやる！）」

でも今は疑いが晴れるまで逃げるしかない。

屋敷に鳴り響くサイレン。なんか騒ぎがどんどん大きくなっている。

さらにスピーカーからこんな放送が流れた。

《会場にお越しの皆様、ただいま武装した凶悪犯が屋敷を逃亡中です。係員の指示に従って速やかに避難してください》

今日からユーリちゃんも凶悪犯の仲間入り

武装と言ってもナマクラの剣。ちよっぴり腹黒いけど凶悪犯というほどでもない。

でも、ユーリちゃん追われちゃってます！

廊下を曲がって曲がってユーリはひたすら逃げる。兵士を少

しまったところで、ユーリは女子トイレに逃げ込んだ。

「……はあはあ（こんなに走ったの久しぶりだし）」

ユーリが汗を拭っていると、個室のカギがガチャッと開くがした。

焦って逃げようとしたユーリの投げかけられる声。

「人の顔を見てどうして逃げるんだい？」

振り返るとそこにいたのはタバコ臭いアルマだった。

「あ、アルマさん……ご機嫌麗しゅうございます」

「変な子だね……ん？」

「では、ごきげんよう」

「ちよつと待ちな」

逃げようとしたユーリの首根っこが掴まれた。

そして、持っていた剣を取り上げられてしまった。

「この剣は……？」

「なんていうか不可抗力というか、神が与えたもうた試練というか、事故というのが適切かもしれませんが、不慮の事故という感じだったりするわけで、ごめんなさい！」

ユーリが頭を下げた。きつと天変地異の前触れだ。

アルマは笑った。

「外が騒がしいと思ったら、あんたがこれを盗んだのかい？」

「盗んだなんてとんでもないです。濡れ衣を着せられて逃亡してたんです」

「そうかい、なら本当にこのまま盗んで逃げてくれないかい？」

「はっ？」

「啞然とするユーリに剣が押し付けられた。思わず受け取ってしまったが、事情がまつたくもって不明瞭だ。

「アタシがこれを持って逃げるって……わかりやすく説明していただけると嬉しいのですが？」

「誰かがウチが出す剣を持ち去ったとなれば勝負は不戦敗だろう。そうすればウチの店の名前も傷つかないで済む、みんな万々歳さ」

「アタシはぜんぜんバンザイできないんですけど。てゆうか事情がまつたく理解できないんですけど、なんで負けたがるんですか？」

「負けたかないよ、でも仕方ないだろう。実は剣を鍛えるダンナがいらないんだ、それじゃ献上する剣なんて作れやしないよ」

「ついに奥さん自身が、ダンナが“いない”と認めましたよ！「ダンナさんがタバコを買いに行ってるかとかパチンコに行ってるか、やっぱり全部ウソだったんですか？」

「……そうさ」

アルマは気まずそうな顔をしながらタバコに火を点けた。

「でもどうしてウソなんかついたんですか？」

「そんなこと口が裂けても言えないよ」

「まさか……夫婦喧嘩でダンナが家を出て行ったとか？」

「ギクツ！」

「凶星のようです。」

ユーリは呆れてため息を漏らした。

「……くだらない。ダンナさんがいないのは娘さんから聞いて
ましたけど、アタシはてつきり事故に巻き込まれたのかと」

夫婦喧嘩はある意味人災なので事故です。

「くだらなかないよ、こんなことが近所さんや常連さんに知
れたらいい笑いもんだよ。恥ずかしくて買物にも行けないじ
やないか」

「そーならそー言つて鍛冶勝負なんかさつさと断ればいいの
に」

「最初は断つてたじゃないか。けどウチが勝手に断つたらダン
ナに合わす顔がないだろう」

「でも負けてもメンツが潰れるだけでしょ。それにこんな剣
じゃ」

ユーリはふにやふにやに曲がった剣を見せた。

アルマがガシツとユーリの両肩を掴んで真顔になる。

「だからそれを持って逃げてくれて頼んでんだろう。ちゃん
と礼ならあとですから、さつさとお行き」

「嫌です」

きつぱりさつぱり即答だった。

しかし、アルマは強硬手段に出たのだった。

トイレの外に顔を出したアルマが大声で叫ぶ。

「逃亡者ならここにいろよ！」

すぐに私兵たちが聞きつけて駆け寄ってくる。

強制的にユーリは逃げるハメになってしまった。

「絶対に訴えてるからな！」

負け犬の遠吠えを吐き捨ててユーリの逃亡劇が再びはじまったのだった。

ダイカーンの耳に私兵が耳打ちする。

「逃亡者を完全に見失ったそうです。いかがいたしますか？」

「もう探さずともよい（見つからんほうが都合だ。不戦勝となれば、エルザも文句の付けようもあるまい）」

ダイカーンは壇上に立つて、抑えられずに自然と笑みがこぼれた。

「ドラゴンファンクの剣を持って逃亡した者を取り逃がしてしまったそうだ。我が屋敷で起きたことはわしにも責任があると痛感しておる。しかし、こうなってしまうては仕方あるまい……

…鍛冶対決は武器商店エクスカリパーの勝利とする！」

会場がざわついた。

白銀の甲冑を着たブロンドヘアのエルザが意義を唱える。

「勝敗を決めるのは早いのではないか！」

エルザの鋭い蒼眼がダイカーンを見据えるが、ダイカーンは鼻で嘲笑した。

「しかし、武器がないのだから仕方あるまい」

「勝負を延期にすればよい話ではないか！」

「それも時の運、ドラゴンファンク側も異存ないな？」

ダイカーンに顔を向けられ、アルマは無愛想に頷いた。

「武器を盗まれたのはウチにも落ち度がある。負けても文句は言えないね」

これでダイカーンもアルマも思惑通りになって万々歳なのか？

だが、エルザだけは納得ができなかった。

「ダイカーン貴様、まさか貴様がドラゴンファングの武器を盗ませたのではなかるうな！（この勝負には裏があると最初から睨んでいたが、未だなに一つ証拠がつかめん）」

「言いがかりも甚だしい。国王陛下のお気に入りだからと言ってあまりでかい顔をするな！」

「なにをお、貴様こそエチゴヤと裏で繋がっておるのだろっ！」

「それ以上わしを愚弄するというならば、審問会に訴えてやるわ！」

「やれるものならやってみるがいい、貴様も壇上に立たせて洗いざらい吐いてもらうからな！」

「あーはははは、証拠なぞ出るものか。わしは濡れ衣なのだからな！」

急に部屋が停電した。

そして、映写機で投影したように壁に映像が映った。

ダイカーンとエチゴヤの密会映像だ！

《おっと、忘れておりました。ダイカーン様のお好きな黄金色の菓子でございます》

エチゴヤが賄賂を渡すシーンがしっかりと映し出されている。

それを見たダイカーンは顔を真っ青にして慌てた。

「すぐに消せ、早く消さぬか！」

だが、映像は止まることなく流れ続けている。

《それがな、エルザが当日に視察に来るらしいのだ》

《あの堅物の女ですかい？》

映像を見ていたエルザの眉間にシワが寄る。

「ダイカーンこれはどういうことだ、説明してもらおうではないか！（これ以上の証拠はあるまい。しかし、いったい誰が？）」

「わしはなにも知らん。これはわしを陥れようとする陰謀だ！」

もはやその言葉を信じる者はいない。

そして、今回の鍛冶対決の裏にある陰謀が陽の下に晒されたのだ。

《ドラゴンファンクが対決を辞退すれば我々の不戦勝、あの店に勝ったとなれば、あっしらがひいきにしている店も大繁盛、王国の武器や防具の受注を一手に握ることも可能ですぜ》

ダイカーンは怒り狂った。

「誰だ、誰の仕業だ！」

壁に映った映像が消え、天井裏から誰か落ちて来た。

落ちて来たのはユーリだった。そのままダイカーンの頭にゴーン！

ダイカーンは痛恨の一撃を受けてぶっ倒れた。

まさか、これは悪のダイカーンをユーリが倒してしまった構

図？

これにて一件落着、めでたしめでたし……んなことあるか！

ユーリはすでに私兵に囲まれ、ダイカーンも頭を押さえながら立ち上がった。

「おのれ、すべてこの小娘の仕業だな。斬れ、斬ってしまえ！」

「えっ アタシ……なにがどうなってるの？」

全ての罪はユーリに擦り付けられようとしていた。

そのとき、スポットライトが人影を照らした！

真紅のドレスを着た紅髪の薔薇仮面。

薔薇仮面はエルザに向かって映像ディスクを投げた。

受け取ったディスクのラベルには「ダイカーンとエチゴヤの

悪巧み繁盛記」と書かれていた。

「まさかこれは……さっきの映像は貴様が撮った物なのか」

エルザの問いかけに、薔薇仮面は口元に笑みを浮かべた。

証拠物件まで出てきてしまっただけで言い訳も通らない。こうなっ

たら最後の手段しかない。ダイカーンは手の者に命じる。

「斬れ斬ってしまえ、薔薇仮面もエルザもドラゴンファングの

人間も、その小娘もだ！」

「……アタシも入ってるんだ」

ユーリは嫌そうな顔をして頭を抱えた。

さらにあくどいダイカーンはこう続けたのだ。

「すべて薔薇仮面とこの娘のせいにしてしまえば済むことだ！」

汚い、やる事が汚すぎる。こんな大人になりたくないです。もう戦いは免れそうもない。

剣を抜いた私兵たちが襲い掛かってきた。

ユーリはくによくによ剣を構えた。

だが。

「こんなんじゃ戦えるか！」

すぐに投げ捨てて敵に背を向けて逃げた。

エルザも刀を抜いて応戦中。その横ではフルフェイスの重装備をしているエルザの部下らしき男も剣を抜いて戦っていた。

アルマもさすが鍛冶屋のカミさんだけのことはある。豪快な断ちで次々と私兵をぶった斬っていく。

そして、薔薇仮面は優雅に納豆を食っていた。

なんで納豆やねん！

しかも、納豆にかけているのは山盛りの七味唐辛子だった。

私兵が薔薇仮面に襲い掛かる。

仮面の奥で光る瞳に六芒星が浮かび上がった。

刹那、ネバネバの納豆がお箸から放たれた！

「くせえ！」

私兵の悲痛な叫び。

納豆の糸はまるでクモの糸のように私兵を絡め取ってしまった。もがけばもがくほど動けなくなる仕様だ。しかも臭い！

良い子のみんなは食べ物と武器にしちゃダメよ

一方ユーリちゃんは 追い詰められていた

ユーリは尻餅を付いて、背中はずでに壁だった。まさか絶体絶命のピンチ！

しかし、ユーリの口は恐れを知らない。

「アタシに触れたらわいせつ罪で訴えますよ！」

お得意の法的手段だ！

だが、ユーリを囲んでいる三人の男たちにはノーダメージ。

「死人に口なし、訴えられるものなら訴えてみるんだな」

「殺人未遂及び脅迫罪でも訴えてやる。てゆーか、あんたたち

王宮直属のギルド員じゃないの！」

ユーリを囲んでいる男たちはホワイトファンクのギルド員。

シャドウクロウが邪道なら、ホワイトファンクは王道のハズだった。

「ふつ、悪はどこにでも蔓延るのさ。ましてや正義は悪の隠れ蓑に申し分ない、金さえもらえればなんでもやるさ！」

ギルド員の剣がユーリに振り下ろされる瞬間、それを何者がか受け止めた。

眼を丸くしたユーリが感嘆の声を漏らす。

「ジャド！」

「金でなんでもやるのはウチの専売特許だ。営業妨害も甚だし
い」

ジャドは手に持っていた武器で相手の剣をはじき返した。

その姿を見ていたユーリの胸が少ときめいた。

「（ピンチのときに現れるなんて白馬の王子様っぽい。ちょっと惚れちゃうかも）でも……ジャド持ってるのフライパンだよ
ね？（ドジっ子萌えと幻滅が紙一重）」

ユーリに指摘され、ジャドは自分の持っていた武器を確認した。

「しまった……こないだ通販で買った焦げない錆付かない洗うの簡単なフライパンだった」

こんなアホなヤツに負けてたまるかと、敵ギルド員が束になつて斬りかかってきた。

フードの奥で嘲笑するジャド。

「喰らえ、通販で勝つた包丁セット！」

用途に応じた包丁が用途無視して投げられた。

投げられた包丁セットは敵ギルド員の手には刺さり思わず剣が落とされた。

手を押さえて歯を食いしばるギルド員たち。

圧倒的なジャドの強さ。負けたほうはいろいろな意味で悔しそつだ。

だが、ユーリは蒼ざめていた。

「……あはは、ジャドの体を剣が貫通してるように見える（きつと手品だよ、どこかに種があるんだよね！）」

ユーリは自分に言い聞かせた。

すべて幻想です！

でもやっぱりリアルだったりした。

自分の腹を貫通する剣をジャドは慌てることなく抜いた。

「俺は痛みに耐える修行をしている。こんなもの痒くもない」

そーゆー問題なのか！

ジャドの足元がふら付いた。

「だが……痛くなくとも……貧血にはなる」
ボタン！

ジャドは貧血で倒れてしまった。

「痛くないとか意味ないじゃん！」

ユーリのツッコミ。

腹から血を流して倒れているジャドを見ながらユーリは不安そう顔をした。

「元はといえばアタシを助けてくれてこんなことに（愚民が特権階級を守るの当然だけど）。でも……アタシを守ってくれたこの人を……絶対に死なせたくない！」

なにか熱い思いがユーリの胸を突き動かした。

すぐにユーリは回復呪文を唱えようとした。

「ラヴヒール！」

声が木霊しただけだった。

「しまった、呪文使えなかつたんだ！」

ユーリちゃんシヨック！

慌てふためくユーリ。

「ちよつと待って、今何とかするから。えくと、絆創膏……なんて持ってないし……あつ」

ポケットの中を探っていたユーリは小瓶を見つめた。

その小瓶はカーシャ特製の惚れ薬だった。

ここでユーリは魔導書で読んだ記述を思い出した。

愛の女神ロロアの加護を授かる“ロロアの林檎”には、回復魔法が得意なロロア同様、その特性が林檎に成分として含まれている。

ユーリは迷わず……迷わず……まよ……。

「苦労して作ったのに……でも……でも……」
迷わず使えなかった

ユーリが自分の中の善と悪と討論している間も、ジャドの体からはほとんど血が流れていた。

ついにユーリが小瓶のフタを開けた！

「また作ればいいいでしょ！」

投げやりな感じでユーリは惚れ薬をジャドの傷口にぶっつけた。

果たして愛の奇跡は起こるのか！

奇跡は起きた！

自分たちが負けそうになってるもんだから、ダイカーンはコッソリ逃げようしていた。

そこヘターザンロープでビューンッと現れた男がダイカーンにキック！

「待たせたな野郎ども！」

ダイカーンをやっつけて現れたのはクルダだった。

ダンナな姿を見てアルマが眼を輝かせる。

「アンタ！」

「おうハニー、帰りが遅くなっちゃったな」

再会した二人は駆け寄り……人妻怒りの鉄拳！

強烈なパンチがクルダの顔面にヒットした。

「アンタ今までどこでほっつき歩いてたんだい！」

いきなり殴るこったねえだろ。これの材料を採りに行ってた

んだよ」

クルダは背負っていた大剣をアルマに渡した。

「アンタ……これは？」

「抜いてみな」

言われたとおりアルマが大剣を鞘から抜くと、辺りは一瞬にしてまばゆい光に包まれたのだ。

「これは…… ホワイトムーンで作った剣じゃないか」

「そうとも、俺が鍛えた最高の剣だ」

「……アンタ」

アルマは少し涙ぐんでいたが、決してその雫を溢すことはなかった。

雨降って地固まる的に夫婦の絆が深まっている横で、鼻血を流しながらダイカーンはコツソリ赤ちゃん歩きで逃げようとしていた。

しかし、悪は決して許されないのデース！

逃げようしているダイカーンの首に刀が突きつけられた。

「逃がさんぞ小悪党め」

ハスキーボイスでエルザは威嚇した。

ちょっとしたでもダイカーンが動けば、待っているはデス

(死)！

騒ぎも静まりを見せ、ダイカーン側に最後の止めが討たれた。エルザが大声を部屋中に響かせる。

「皆のもの静まれ、静まれ！」

なにごとかとエルザに視線が集まった。

「頭が高い控えおろう。こちらに居わす方をどなたと心得るここに居わすは第十三代アステア王国国王陛下、クラウス・アステア様であらせられるぞ！」

と、紹介された重装備の男はフルフェイスのヘルメットを脱ごうとするが 脱げない！

「エルザちよつと手伝つてくれないか、コレが抜けないんだ」

「少々お待ちを……クソつ、抜けん……おのれ！」

ヘルメットと格闘する二人。

そんな姿を見る皆のものは疑いの眼差しで見ている。

本当にアレって国王なのか？

そんな疑念が人々に伝染しはじめたころ、ついにヘルメットがスポンと音を立てて抜けた。

「……ふう、苦しかった」

ブロンドの髪を掻き上げて額の汗を拭う美青年。その顔を見たダイカーンのアゴが抜けた。

「クラウス国王様！」

名を呼ばれたクラウスは白い歯を見せながら爽やかに笑った。きつと額から零れ落ちているのは汗ではなく香水に違いない！「やあダイカーン。僕の眼が届かないところで散々悪さをしてくれたみたいだね」

「滅相もございません、これは誰かに陰謀なのです。わしを陥れようとする抵抗勢力の仕業に違いありません！」

まだ言い逃れをするダイカーンの前に、ロープでグルグルされたエチゴヤが突き出された。エチゴヤは白目を剥いて気絶し

ている。

その傍らに立っている薔薇仮面が録音テープを再生した。
《あつしはダイカーン様に脅されてやったんでさ。ダイカーン様の悪事を洗いざらい吐きますから、どーか……どーかあつしだけはご勘弁を……ぎゃあああつし！》

テープを聴いたダイカーンは顔を真っ赤にした。

「おのれ裏切りおつたなエチゴヤ！」

暴れようとすするダイカーンをクラウス側に寝返った私兵たちが取り押さえた。

エルザが勝ち誇った顔で出口を指し示す。

「その者を引つ立て！」

ダイカーンとエチゴヤはズルズル引きずられて行ってしまった。

クラウスは前髪を掻き上げて爽やか笑顔。

これにて一件落着……と思いきや、ユーリはハツとした。

「(しまった美形の王様に見惚れてた。予想より大幅に若くてあれなら恋愛対象……じゃなくて) ジャド、大丈夫ジャド！」

今の今までジャドは放置されていた。

ユーリはジャドの体を揺さぶった(本当は怪我人を揺すってはいけません)。

するとジャドが静かに眼を覚ました。

「……朝か、よく寝たな」

何事もなかったように目覚めたジャド。

ぼーぜんとするユーリ。

「ジャド……おなかの傷は？」

「ん……傷だと？ ああ、これか、これなら寝たから治ったぞ。俺の躰は日ごろの鍛錬のお陰で寝ればすぐに傷が癒えるんだ」

「は？」

ユーリが握り締めていた小瓶が木っ端微塵に砕けた。

そのまま百年の恋も冷めるパーンチ！

「グハッ！」

痛くなくてもやつぱり気絶。ジャドは動かなくなった。

興奮状態のユーリは嗅覚が鋭くなっていて、その鼻に微かな匂いが届いた。

「……香水？（これはアフロディテ社のヒット商品、ローゼンサーガの香りだ）」

そんなことをユーリが思っていると、辺りは少し騒がしさに包まれていた。

エルザが怒鳴る。

「薔薇仮面を探せ！」

どうやら薔薇仮面はいつの間にか姿を消していたようだ
納豆の香りを残して。

クラウスは爽やかに笑っていた。

「まあいいじゃないか、彼女のお陰でダイカーンの悪事も陽の下に晒されたわけだしね」

「クラウス様、ヤツは犯罪者なのですよ！」

エルザは納得いかないようだが、すべてクラウスの笑顔で流されてしまった。

「まあまあ、逃げられてしまったものは仕方ないさ。騒ぎも治まったことだし、鍛冶対決の続きをしようじゃないか」

とは言ってもダイカーンの手が回っていた鍛冶屋は一緒に連行されてしまっている。

残っているのはドラゴンファングが献上する剣のみ。

クルダとアルマは夫婦揃ってクラウスに大剣を献上した。

大剣を手にとって刃を見つめるクラウス。

「優しい輝きを持つ剣だね。これならばランバード王も満足してくれるだろう。エクスカリパー側の剣はどうなったんだい？」

その剣を差し出したのはユーリだった。

「ここにございます」

しれっとした顔でユーリが渡したのはくによくによ剣だった。

驚いたアルマが口を挟もうとしたのを、ユーリが唇の前で人差し指を立てて止めた。

くによくによ剣を手の取ったクラウスは苦笑した。

「うん、なかなか独創的な剣だね。芸術的ではあるけれど、ランバード王は実用的な剣を好むだろう。この勝負、ドラゴンファングの勝ちってことでいいかな？」

これにて一件落着！

今日のユーリちゃんはウキウキ気分

ギルドから報酬をもらってピビちゃんへのプレゼントを買ったのだ。

桐の箱に入った高級フルーツのピンクボム。またの名をラアマレ・ア・カピス。古代語でラアマレ・ア・カピスとは「神々のおやつ」と云う意味だ。

ピンクボムはビビの大好物だ。これさえあれば勝てるという確信していた。

学生宿舎の廊下をスキップするユーリに声かけられた。

「ユーリさん！」

「ん？」

アインが息を切らせながら駆け寄ってきた。

「こんにちはユーリさん、捜索しました」

「こんにちはアインちゃん」

「なにかラツキーイベントでもありました？」

「うん、ちょっとね」

ユーリはニヤニヤが抑えられなかった。

アインは改まった感じでこんな話しをはじめた。

「えと、実は父がグラシーユ山脈で遭難したときに、ある人に救助してもらったそうなんです」

「それがどうかしたの？」

「その人が至極高価な鉱石を用意してくださって、あの剣を作ることができたそうなんですけど、その人はどうやらユーリさんのこと探してたみたいなんです」

「まさか……」

ユーリの脳裏に浮かぶ黒頭巾。

次のヒントでユーリの想像は確信となる。

「腹話術をする“変な人”だったらいいんですけど、名前はたしか……」

「セバスちゃんでしょ」

「そうです、その人です。あのお、その方に会ったら父がお礼を言っておいて欲しいと言っていました。なんだかお礼を言う前に姿を消しちゃったみたいで」

「うん、わかった（会えるかわかんないけど）」

「ありがとうございます！」

元気にアインはお礼を言って、次に別れを告げようとしたところに、ユーリからこんな話を振られた。

「ところでアインちゃんちの夫婦喧嘩の理由ってなんだったか聞いてる？」

「母には口止めされてるんですけど、実は目玉焼きが原因らしいんです」

「目玉焼き？」

「はい、目玉焼きはしょうゆで食すのとソースで食すの、どちらが美味かでもめたそうで……（娘として至極恥ずかしいです）」

「しょーもない理由だった。」

ユーリはボソツと呟く。

「……くだらない」

「そうですよね、くだらなくて悲しくなっちゃいます」

「ホントくだらない。目玉焼きは塩コショウが一番に決まってるじゃない！」

目玉焼きの食べ方は人それぞれです。あまり他人の食べ方にとやかく言うのはやめましょう。

そんなトークも展開しつつ、話が一区切りしたところで二人はバイバイすることにした。

「どこか行く途中だったんですね、引き止めてごめんなさいでした」

「ううん、ぜんぜん平気だから。じゃあね、また明日学校でね！」

ユーリはアインと別れを告げてスキップ

桐の箱を大事に抱えてビビのいる部屋に急いだ。

ビビも同じ学生宿舎で寝泊りしているらしく、ルーファスからちゃんと部屋番号を教えてもらっている。

ビビの部屋まで来たユーリは大きく深呼吸。

「よしっ！」

気合を入れてユーリはドアをノックした。

「ビビちゃんこんにちは」

すぐにドアが開けられた。

「ユーリちゃん、こんにちわんこそば！」

「この前ビビちゃんに嫌われちゃったみたいだから、仲直りしたくてプレゼント持って来ました」

「ほえ？ あたしがユーリちゃんのことキライに？」

「えっ？」

「あたしユーリちゃんのこと好きだよ、大事なお友達だもん

」

」………」

「どうやら嫌われていなかったようですね！

てユーリか、ビンタ事件のことすら覚えてるか怪しい。

ビビは眼を輝かせて桐の箱を見つめている。

「プレゼントってなあに？（ドキドキわくわく）」

「えーっと、ピンクボムが好きだっけ聞いたから」

「やったあラアマレ・ア・カピス大好き！ 早く食べよ食べよ

」

「ビビはユーリから桐の箱を奪って部屋の奥に消えてしまった。

取り残されたユーリはボソツと呟く。

「………女ってわからない」

「乙女心は複雑なんですね！

第4話 氷境の靈竜ヴァツファート

「キャベツよ永遠に・・・」

とても幼いユーリは今日もベッドから窓の外の景色を眺めていた。

遠い遠い夕焼けの向うへ羽ばたく鳥たちの群れ。

ユーリは哀しい顔をしてベッドに潜った。

小さくユーリは咳き込んだ。

大きな屋敷の小さな牢獄。

メイドが部屋のドアをノックして入ってきた。

「ユーリ様、お薬の時間です」

「いらない」

ユーリはベッドに潜ったまま答えた。

薬を持って近寄って来ようとするメイド。

「お薬を飲みませんとご病氣も治りませんよ」

「うるさい、出てけ！」

ユーリは枕を投げてメイドの顔面にぶつけた。

仕方なくメイドは薬を置いて部屋を出て行ってしまった。

小さく咳き込むユーリ。でも、薬を飲む気にはなれなかった。

ベッドに潜って何もしない時間が過ぎていく。

窓がガタガタと音を立てた。風だろうか？

「愛してるよユーリ！」

窓を開けてアーヤが飛び込んできた。

「おにいたん！」

今までがウソのようにユーリは笑顔でアーヤを迎えた。

アーヤは大量の紙袋を持っていた。紙袋には美少女のイラストが描かれている。外で持って歩くには勇気が必要だ。

「今日もたくさんおみやげ買ってきたよ。ユーリが気に入るものがあるといいなあ」

「おにいたん今度はどこに行つて来たのお？」

アーヤは旅に出るのが好きで、いつもいろいろなところに行つてはおみやげを持って帰ってくる。それは物であつたり話であつたり、ユーリはいつもそのおみやげを楽しみにしていた。

楽しそうな顔をしてユーリは紙袋の中身を調べている。

「今度の旅もいろいろなところに行つて来たよ。中でもメイドカフェというところでは実に有意義な時間が過ごせたね」

「メイドカフェ？」

「メイドさんが接客してくれるカフェなんだ。おにぎりを目の前で握ってくれたり、ケチャップで絵を描いてくれるサービスもあるんだよ」

「……メイドならウチにもいると思うけど」

「それは違うよユーリ。あの店にはオタクのロマンがあるんだあつ！」

ギョツと拳を握つて瞳の奥に炎を宿したアーヤ。

アーヤは次々と紙袋から戦利品を取り出してベッドの上に並べはじめた。

ほとんど同人誌だった。しかもほとんどB L系。

「お、おにいたん……これって……？」

同人誌の中身を読んだユーリの鼻からツーツと赤い液体が流れた。

「ああ、それはボクの個人的なおみやげだよ。ユーリのおみやげはこっち」

そう言いながらユーリは紙袋から衣装を取り出した。

それを見たユーリは首を傾げた。

「水着？」

「違うよ、これはブルマと言ってね、女子が運動のときに着る神秘かつ伝統の衣装なんだ。残念なことに今ではその風習も忘れられ絶滅の危機に……」

ブルマを握り締めながら熱く語るアーヤの姿は間違いなく変態だ。

いきなりアーヤがユーリに襲い掛かった。

「さあ、お着替えの時間だよ！」

「イヤっ、おにいたん恥ずかしい」

「嗚呼、恥らうユーリもカワイイよ」

「お着替えなら自分でする！」

「自分で着替えるのもボクが着替えさせるのも同じだよ」

あきらかに違います。

ユーリは顔を真っ赤にさせながら脱がされそうな服を死守する。

「恥ずかしいよお」

「わかった、ユーリ独りに恥ずかしい思いはさせないよ。ボクも脱ごう！」

「脱がないで！」

でもアーヤは神業で一瞬にして服を脱ぎ捨ててしまった。

股間の布をゆらゆらさせながら仁王立ちするアーヤ。

「どうだい？ たまにはデザインを変えてみようと思ってるね」
ヒョウ柄のふんどし

プハーツ！

ユーリは鼻血が噴射させた。

「大丈夫かいユーリ！ そんなに体液を垂れ流したらまた体に障るよ！」

「……もう十分弱ってる」

変態の兄がいる限り、いつも貧血に悩まされる。

急にアーヤが悲しそうな顔をした。

「ごめんねユーリ、こんな兄で……」

「どうしたのおにいたん？」

「ユーリのことを愛してるのにね、どうも空回りしてしまう。」

押し売りの愛は本当の愛じゃない、本当に相手のことを想うなら自分の気持ちを抑えなきゃいけないこともあるんだ」

「わからないよお」

「もう少しユーリが大人になればわかるときも来るさ」

「ユーリ大人だよ、キャッシュカードも一人で使えるし、マネーロンダリングも得意だよ」

マネーロンダリングとは汚れた金の出所を隠して、合法的で

綺麗な金ですよと騙す行為である。子供のやることじゃねえ！

アーヤはティツシユでユーリの鼻血を拭いた。

「もともと体が弱いのに、ボクがいたらいつまで経っても良くならないね」

「おにいたんがいてくれたらユーリ元気だよ！」

「あはは、ありがとう。でもボクなんかいないほうがいいのかもしれない、この家にとつても。家督だつてシーナが継げばいいし、ユーリだつているんだし」

「ユーリ、シイ兄きらくい」

「そんなこと言つちやダメだよ。あいつはちょっと性格が破綻しているところがあるけど、本当は優しいヤツなんだ。それに人を嫌うのはよくないよ、憎しみは誰も幸せにできないからね」

アーヤはユーリの頭を優しく撫でた。

でもユーリは不満そうに唇を尖らせていた。

「ユーリわかんなあゝい。シイ兄なんてバナナの皮で滑つて死ねばいいのに」

「ダメだよ、死を簡単に口にしちゃ」

「ふん、みんな死ねばいいのに。ユーリだつてもうすぐ死ぬんでしょ、知ってるんだから」

「そんなことないよ、すぐに元気になるさ」

「そうやってみんなユーリにウソつくんだもん、みんなキライ！」

「絶対元気になるよ、必ず、必ず……必ずね」

その言葉はまるでなにか自分に言い聞かせているようだった。思いつめたようなアーヤの横顔。

どの思い出ものつべらぼうのお兄様の顔。なぜその横顔だけは覚えている。しかし、それが本当にお兄様の顔だったのか、もしかしたら想像が作り出した産物かもしれない。

アーヤは近くにあつた薬を見つけたようだった。

「ちゃんとクスリを飲まなきゃダメじゃないか」

「飲みたくないんだもん」

「仕方がないなあ、ワガママなお姫様なんだから」

そう言つてアーヤは薬を口に含むと、ユーリにキスをしようとした。

「ブハーツ！」

「今日も元気に鼻血ブー。」

魔導学院の廊下をユーリは鼻の下を掻きながら歩いていった。

「（今朝は豪快にベッドを濡らしちゃったなあ。洗濯するのめんどくさくてそのままにしちゃったけど、殺害現場に間違われなきゃいいけど。うん、でもお兄様の夢で目覚められるなんて、今日はいいいことありそう）」

さっそくユーリにとつていいことが起きた。

空色ドレスがふあふあしながら近づいてくる　ローゼンク

ロイツだ。

「ローゼンクロイツ様、おはようございます！」

「やあ、おはよう（ふあふあ）」

ローゼンクロイツは目をつぶりながらあいさつした。半分寝てるのかもしれない。

そんな無防備なローゼンククロイツの顔をユーリがじーっと見つめる。

「顔になにかついていますよ？」

ローゼンクロイツの口元にほくろのようについている物体。

ユーリはそれを摘んで取るうとすると、ツーツと糸を引いた。思わず青ざめるユーリ。

「キモツ、なにこれ」

焦ってユーリは手を振って謎の物体を払おうとするが取れない。しかも臭い！

ローゼンクロイツは淡々と。

「納豆だね（ふにふに）」

「な、納豆って、無理やり誰かに食べさせられる拷問を受けたんですか、許せません！」

「違うよ、ボクの朝は納豆ではじまるんだ（ふにふに）」

「えっ」

カルチャーショック！

でも、ユーリちゃんに忠誠心はそんなことじゃ揺らぎません。

「（ローゼンクロイツ様が納豆好きだったなんて、よりによってあんな腐った物を……でも、貴方が好きと言うのなら、アタシも好きになって見せる！）」

ユーリは手についていた納豆の粒をパクツと口に入れた。

「まずう」

ユーリはすぐに姿を隠し、物陰からは『うえ〜』という効果音が聴こえてきた。なにをしているかなんて、それはヒロインの保身にかかわるので書けません。

少々ゲツソリしたユーリが戻ってきた。

もうそこにはローゼンクロイツの姿はなかった。そして、微かに残るローゼンクロイツの残り香。

ユーリはハツとした。

「そう言えば……（この香りってローゼンサーガ。そんなまさか、だって髪型も違ったし、アタシの顔面蹴りやがったし、思い出だけでも腹が立つ。でも、納豆好きっていうのが引かかる）」

「そう言えばなんなのだ？」

背後から低い女の声がして、ユーリは驚いたまま飛び退いた。

「カ、カーシャ先生（すごい、気配がまったくしなかった）」

「こんばんわユーリ」

「まだ早朝ですよ」

「妾にとつては常に夜。決して明けることのないこの世界なのだ、ふふっ」

「意味がわかりません。では、授業がありますので失礼します」

さつさと別れを告げて立ち去ろうとしたユーリの首根っこをグイツとカーシャに掴まれた。

「待て、話がある」

「なんですか？」

嫌そうにユーリは尋ねた。この人に関わるとロクなことがない。最近だんだんと理解してきた。

「あのほれ薬はもう使ったのか？」

「え……まあ……その……（あはは、思い出したくもない）」「使っていないのならそれでいいのだ（うむ、どうやら間に合ったようだな）」

「なにかあるんでしょうか？」

「うむ、実はな……あれは惚れ薬ではなく、破局薬だったらしいのだ（エヘッ、カーシャちゃんのうっかりさん、ふふっ）」

「あはは、そーですかー（シネ！）」

「やっぱりロクなことがない。」

あの“ロロアの林檎”にはこんな話があるらしい。

「遙か古の時代、あの楽園に住んでいた男女が、“ロロアの林檎”をめぐって離婚したという伝承がある。それ以来、あの林檎には呪いがかかり、カップルを破局させる力があるらしいのだ」

カーシャいわくそういうことらしい。

これ以上関わっても時間の無駄だと判断して、ユーリは今度こそ立ち去ろうとした。

だが、また呼び止められてしまった。

「まだ話がある」

「なんですか、授業があるんですけど？（てゆか、あんたも教師だろ）」

「サキユバスの力を取り戻したくないか？」

「えっ？」

失われたサキユバスの力。ついでに魔法まで使えなくなつて、ユーリがどんなに苦労したことか……。

クラウス魔導学院には、魔導士を育成する学科や、魔法を使えずとも歴史や研究をする学科、魔導具の技術者になる学科など、魔導に関する学科がいくつもある。ユーリが入られた学科は、あまり魔法実習のない学科だったが、それでも魔法実習は必修科目。魔法の実習があるたびに、仮病を使って休むのもだんだん辛くなつていたところだった。

サキユバスの力さえ取り戻せば、狙った相手を誘惑しまくり、貢がせるなんて朝飯前だ。

「本当に取り戻せるんですか！」

「さて、それはわからん」

「期待して損した（もう絶対こんな女の言葉に躍らせれないようにしよう）」

「だが試す価値はある（ふふっ）」

惚れ薬のこともあるし、もう騙されないと思いつつも、本当に力を取り戻せたらと思うと、ユーリの心は激しく揺れた。

「方法を教えてください」

頼むとカーシヤは手でオツケーマークを作った。いや、金を要求しているだけだった。

「格安の一〇〇〇ラウルで情報を売ってやるっ」

「……金か」

「まだ惚れ薬の代金も貰つておらんぞ」

「それは失敗だったんだからタダでしょ。むしろ、失敗したんだから損害賠償としてこちらがお金を請求したいところです。というわけで、情報と交換ということで賠償はしないでおきましよう」

どっちも金に汚いです。

カーシヤはため息を吐いた。

「貧乏人のお前から金を取るのも哀れだ。半額に負けてやるう」

「(アタシに向かって貧乏人って、しかも半額って結局取るのかよ)力を取り戻せたら払うということにしましょう」

「仕方あるまい、それで手を打とう」

カーシヤは胸の谷間からメモを取り出してユーリに渡した。

「ここに詳しく書き出しておいた、感謝するがよい」

「感謝しませんが、力を取り戻せたらお金をお支払いいたします」

「さて、そろそろ妾は朝のホームルームにでも行くか」

「……アタシも早く行かなきゃ。さようなら！」

「うむ」

二人が別れようとしたところで、誰かがカーシヤの前に立ち
はだかった。

「ご機嫌いかがかなカーシヤ先生？」

魔導具をジャラジャラ身に着けた黒魔導教員ファウストだった。
た。

「こんばんわファウスト(チッ、朝からついていないな)」

「今日こそはカーシャ先生に貸した一〇〇〇ラウルを返していただきたいのですが？」

「そんな金、借りた覚えなどない！（絶対認めてなるものか、ふふっ）」

「覚えがなくともここに契約書がありますよ（まったく強情な女だ）」

契約書が風もないのに揺れ、その中から強烈なプレッシャーが感じられた。ファウストの得意技は召喚、契約書の中から凶暴な怪物を呼び出すつもりだ。

カーシャの手がすばやく動く。

「マジ・ファイア！」

いきなり攻撃魔法をぶっ放した。

「シャドウィート！」

ファウストの前に現れた暗黒の穴が炎を飲み込んだ。

そして、あざ笑うファウスト。

「カーシャ先生、いつもやるのが単純なのですよ。それにこの契約書は煉獄の劫火でも焼けはしませんよ、クククッ」

「いや、お前を焼こうとしたのだ」

なんか朝っぱらから魔法対決がはじまっちゃいましたよ。しかも、校内で。しかも、教師同士で。

こんな人たちに関わっていたら損をする。

ユーリはなにも見なかったことにして教室に急いだ。

「遅刻遅刻う」

スキップスキップらんらん

ガイアの北極と南極に位置する大陸の名を、北ウーラティアと南ウーラティアという。このウーラティアという名のついた地方がサーベ大陸にはある。アステア王国のあるウーラティア地方は過ごしやすい気候の地域で、極寒の地ウーラティアの名にふさわしくないように思える。

では、なぜそのような名がついているのか？

諸説ある話の中でも有力とされているのは、グラージュ山脈と呼ばれる極寒の地の存在だ。

気象学的にはありえないが、グラージュ山脈一帯のみが極寒で、周りの地域はいたって正常な気候なのである。まるで冷房の効いた部屋から、炎天下の外に出たような感覚だ。その特殊な気候を可能とするのがマナストーンの存在だ。

万物すべてに宿るエネルギー、マナ。それが多く集まるとマナフレアという目に見える形になり、さらにマナを凝縮させて結晶化したものがマナストーンと呼ばれる。一握りのマナストーンですら、それは都市一つを吹き飛ばす武器となる。もっと巨大な物となれば、天変地異すら起こすことができるのだ。

そのマナストーンがグラージュ山脈のどこかにあるのではないかと云われている。

クラウス魔導学院の遠足という名の地獄の校外実習でも訪れるグラージュ山脈。そんな死と隣り合わせの極寒の地にユーリは来ていた。

「……しまった、一人で来るんじゃないかった」

さっそく帰ろうとしているユーリ。

まだまだ入り口付近にも関わらず十分に寒い。もつと奥に踏み込んだらもつと寒い。さらにもつと踏み込んだらもつともつと寒い。

「とにかく寒い！（ビビちゃんにコート貸してもらったけど、こんな装備じゃ凍え死ねるかも）」

なんでこんな場所にやって来たかというところ、カーシャからもらったメモにこう書かれていたのだ。

グラーシユ山脈に棲んでいるヴァツファートに会いに行け。

それだけかいっ！

本当にカーシャのことを信じていいのか、いや……信じちゃいけない。

「うん、帰ろ」

帰ろうと体を一八〇度回転させると、ユーリの目に見覚えのある二人が映った。

「あつ、ローゼンクロイツ様とその下僕！」

「下僕じゃないから」

ルーファスは嫌そうに呟いた。

傍らにいたローゼンクロイツはワザとらしく驚いた表情をしていた。

「ルーファスってボクの下僕だったのかい（ふにゃ）」

「そんなわけないでしょ」

「……知ってるよ（ふっ）」

苦笑するローゼンクロイツ。あきらかからわかれたただけだ。どうしてこんな場所に二人がいるのだろうか？

「あのお、お二人はなぜここにいますか？（まさか、ローゼンクロイツ様とアタシの愛の絆）」

ローゼンクロイツはきよとんをした顔をしてルーファスを見る。

「どうしているの？（ふあふあ）」

ワザとなのか、ワザとなのか……それともマジなのか？

ルーファスは呆れた顔で答える。

「君はカーシヤと出席日数の取引したんでしょ」

「そうだったね、出席日数を改ざんしてやるからヴァツファートに会って来いって言われたんだった（ふにふに）」

「そして私はなぜだか知らないけど、とにかく行行ってカーシヤに命令されたんだ。ユーリはどうしてここにいるの？」

「アタシもヴァツファートに会いに行くんです。もしかして、カーシヤ先生はアタシのためにお二人を寄こした……」

ここまで言って三人の声が重なった。

「ないですね」と「ないない」と「ないよ（ふっ）」

三人ともカーシヤの命令でヴァツファートに会いに行くらしい。ちゃんとした目的があるユーリは覗いて、二人は会いに行くこと自体にはなんの意味があるのだろうか？

ユーリは自分の唇を触りながら考えはじめた。

「実はアタシ、ルーファスのせいでノースに召喚された際、魔法などの力を使えなくなってしまうんです。その力を取り戻

すためにカーシャ先生にヴァツファートに会い行くように指示されたのですが、もしかしたらカーシャ先生には別の思惑が……（ないハズがない）」

なにか思惑があるとしても、こっちは出席日数がかかっている。

「別に魔女がどんな思惑を抱いていようとボクには関係ないよ（ふあふあ）」

こっちも行かないわけには行かなかった。

「私もカーシャに命令されちゃったから、反抗するとあとが怖い。しかも寄りによってこの山なんて……（カーシャとはじめて遭った場所だもんね）」

ものすつごいドンヨリした顔をするルーファス。そんな顔をしながらもルーファスは行く。

ユーリは難しい顔をしてルーファスを見つめる。

「ルーファスとカーシャ先生はどういった関係なんですか？（ただの教師と生徒の関係には見えない。もつと深い関係のよつに思えるけど）」

「えーっと、まあ、その、腐れ縁を結んだ関係というか……」

「まさかお母さんですか！」

「違うし！」

断固否定。

今はこれ以上聞いても答えてくれそうにない。

「話したくないならいいです（前にルーファスを操ったときに、たしかに感じたカーシャのマナ）」

ユーリは疑惑の眼差しでルーファスを見つめ続けているが、それを払拭するように彼は気合を入れて拳を上げた。

「よし、がんばって行こう！」

そして、すでにローゼンクロイツは先を歩いていた。ものすごいマイペースです。

ユーリは駆け足でローゼンクロイツのあとを追う。

「ローゼンクロイツ様、待ってくださいよあ！」

持つとか待たないとかの次元を無視して、ローゼンクロイツは歩き続ける。

広がる銀色の雪原。三人の足跡が雪の上に残る。

すでもうだいぶ寒いが、まだ生物の生存圏である。グラールシュ山脈全体の平均気温は零下二〇度以下と云われ、最低は零下五〇〜六〇度らしい。だいたい南極と北極に匹敵する寒さだ。グラールシュ山脈周辺は外の地域と温度差が激しいため、隔離された空間に特殊な生態系を持っている。どこ自然界でも同じだが、生物はその場所に適用する能力を持っている。そのわかりやすい例が擬態と言つて、生物は周りの風景に溶け込む模様や形をしている。雪原などでは白い毛並みの動物が多い。

三人が歩く前方の崖をぴんぴん登る物体を発見。

白く長い毛と先の分かれた枝のような角。

ルーファスは懐かしそうに指差した。

「ほら見てよグラールシュシロシカだよ。懐かしいな、クラウドにツーショット写真撮ってもらったっけ」

「クラウドってアステア国王の名前と同じですね（イケメンだ

「つたなあ」

ユーリが鍛冶対決騒動のことを思い出していると、ルーファスはサラッと言い放つ。

「だって私と同級生だよ、ローゼンクロイツと私はかなり長い付き合いだし」

「あはは……マジですかっ！（まさか国王とマブダチだったなんて、侮れないルーファス。まさか普段の使えない感じは演技で、その招待は公儀隠密。あの冴えないグルグル眼鏡は正体を隠すため……ないな）」

あっさり妄想を否定した。

だんだんと奥に進むと寒さは厳しく、山らしく道も斜めに傾きはじめていた。

ユーリは自分の体を抱いて寒さに耐えていた。

「これからもっと寒くなるんでしょうか、死ぬる気満々なんですが？」

ユーリがビビに借りたのは秋物コートだった。零下二〇度なんか非対応だ。

ローゼンクロイツは白い毛皮を首に巻いている程度で、ルーファスはそれほど厚着ではない。なのにまったく寒そうにしている。

子供は風の子という問題ではないのかあきらかだ！

ルーファスはポケットから何か取り出して、不思議そうな顔をしてユーリに尋ねる。

「これ使っていないの？」

雪崩はすべてを呑み込んでしまった。

暗闇。

瞳を開けた感覚はあるのに視界は真っ暗。

体も金縛りにあったように動かない。

ユーリの意識は夢の中にいるように、少しぼんやりとしていた。

「雪に埋もれちゃったのかな、誰にも発見されずに衰弱死なんて老人の孤独死みたいでイヤだなあ」

カイロのせいか寒くはない。

物音が聞こえた。

雪の中にいるにしてはとてクリアな音質。まるでドアを開けるような音。

そして、誰かの声が聞こえた。

「あーっ！」

「(……ルーファス?)」

急に世界に光が差し込んだ。

ユーリの目に飛び込んできたのは鼻血だった。

ルーファスの姿はどこにも見えない。まだ暗闇はすべて明け

ず、隙間から光が差し込んでくる感じがする。

ノックの音が聴こえたような気がする。

「すみません起きてくださーい！」

またルーファスの声だ。やっぱりルーファスが近くにいます。

もっと強いノックの音。

「あの、起きてもらえませんか！」

「(アタシ起きてるし。あれ、声がでない……まさか幽体離脱)」

ユーリはハツとした。意識があるのに体が動かない。しかもルーファスはユーリが起きないと思っっているらしい。この情報を整理して導き出された回答は幽体離脱！

いきなりユーリの体が揺れた。

ルーファスの声が聞こえる。

「……開かない……開いてよ！」

開く？

辺りは急に白い煙に包まれた。その向こう側に映るルーファスの影。

「なんか不味いことしちゃったあ？！」

やっとルーファスの姿が見えた。

でも向うはまだ煙でこちらが見えていないらしい。

不意に伸ばされたルーファスの手をユーリは止めようとした。

「(そこ胸だし、触っちゃダメー)！」

でも、声もでないし体も動かない。

ズボツと自分の体にルーファスの手が呑み込まれた感覚がユーリを襲う。

「(なにっ)！」

「ぎゃーー！」

叫び声をあげてルーファスは手を抜こうとしている。

ユーリにはまったくなくなりが起きているのかわからなかった。

そして、体からエネルギーがどんどん吸われていく感覚。

急に動かなかった体が飛び起きてルーファスの襟首に掴みかかった。

「貴様、なにをしておるのだ！（えっ、なに、アタシの声じゃないし、体が勝手に動いてる）」

パニック状態のユーリ。

なにかが可笑しい。

ルーファスは相手の体の手を突っ込んだまま慌てている。

「あ、あの、その手が抜けないんですけど……？」

「妾の寝込みを襲うとは許せんぞ！（妾ってなに妾って、てゆか、このルーファス若くない？）」

「ご、ごめんなさい。悪気があつたわけじゃないんだけど、そのなんていうか」

不可抗力

「とにかく妾の胸から手を……手を……（ヤバイ、意識が飛びそう）」

ルーファスにマナが吸われている。

慌ててルーファスは手を抜こうと頑張った。

「ごめんなさい今抜きますから！」

力を込めるとズボツと手が抜けて、ルーファスは反動で尻餅をついた。

しかし、体内マナを吸われた体の衰弱は収まらない。

ユーリの体が勝手に動いて柩の中から這い出た。違う、ユーリの体じゃない。

「(違う、これアタシじゃない。誰だからわからないけど、誰かの体の中に入っちゃったのかも!)」

謎の女の体はドロドロに溶けかかっていた。まるで溶けたアイスクリームだ。

「妾のマナ……返して……もらうぞ!(わかった、この声カーシャだ!)」

ルーファスに襲い掛かる 全裸のカーシャ!

鼻血ブー!

ルーファスの鼻血がカーシャにかかり、ドロドロの身体に混ざり合ってしまった。

「妾の身体に……不純物が……(キモツ!)」

カーシャはそのまま倒れこむようにルーファスと重なった。

そして、ブチュ〜とキツス!

ルーファスとカーシャの唇が重なった。

その感覚はユーリにも伝わっていた。

「(……ア、アタシのファーストキス!!!11)」

口を通してルーファスからカーシャにマナが流れ込む。奪われたマナを接吻で取り返す気だ。

しかし、カーシャは途中で口を離れた。

「駄目だ……接吻だけでは完全ではない(あはは、あははは……)」

ユーリちゃんは壊れていた。

多少はマナを取り返し、ドロドロだったカーシャの体は固形化していた。

こっちの被害者も放心状態だった。

鼻血を垂れ流しているルーファスの免疫ゼロ！

放心しているルーファスの頬をカーシャが引っぱたいた。

「おい、目を覚まさんか！（あはは、これが夢だったらしいのに）」

「うっ！ 覚ましましたから、もう手とか構えないでください」

カーシャの手は二発目を構えていた。

「うむ、目を覚ましたならよかろう。さて、妾の裸を見た代金を払ってもらおうか、接吻はサービスだ（やっぱりなんでも金か）」

「はあ？」

「ウソだ（ウソかよっ！）」

「あのお、とにかく服を着てもらえませんか？」

「ダメだ（体が動かないせいでよくわからないけど、豊満な谷間だけは見える）」

「はあ」

ルーファスの目はいろんなところを行ったり来たり。目のやり場に困る。なのに相手は服を着ることを拒否。

なぜ？

「貴様が妾から奪ったマナを取り戻すため、今から性交渉をする（シネ！）」

「はあ？」

「聞こえんかったか？ 今から妾は貴様とセック（それ以上言

「つたら又ツコロス！」

「あーあーあーあー 聞こえましたからそれ以上は言わなくていいですから！」

「なら話は早い。ヤルぞ（これってまさかアタシの貞操の危機）」

「ちよ、待った！」

明らかにルーファスは腰が引けていた。

全裸のカーシャは爆乳を揺らしてルーファスに近づいてくる。「なにを待てと言うのだ？ 元はと言えば、貴様が妾の眠りを覚ましたのが悪いのだぞ？（眠りを覚ましたって、どういうことなんだろう？）」

「あの、私たち知り合っただばかりですしー」

「妾の名前はカーシャだ。以上自己紹介終わり。これでいいな？（やっぱりカーシャなんだ）」

「よくないしー！」

声を張って抵抗。

「ならば仕方ない。妾の名前はカーシャ、この城の主だ。過去の大戦で敗北し、この柩で静養していた。おそらく百年……いや、千年か、よくわからんが、貴様が妾の眠りを覚ますまで、妾は気持ちよく眠りに落ちていたのだ……わかるか安眠を妨害された妾の気持ちか？（どういふこと、カーシャって何者なの？）」

「わかります、人に起こされると寝覚めが悪いですよねー」

「ならば、ヤルぞ？（ヤルな！）」

「だ、だからそれは……」

「まさか……チェリーボーイか！（そんなことどうでもいいし！）」

「そ、そーゆーことじゃなくて、知り合ったばかりの女性とそういう関係を持つのは、従順なガイア聖教の信者としては……ダメかなあって」

「うるさい、とにかく妾のマナを返してもらおうぞ（止めなきや、でも体が自由にならない）」

「ちよちよちよ、やっぱりダメですってば！」

ルーファス逃亡。

なんかこうなったら逃げるしかない。

「こら待て！（追わなくていいし！）」

「待てません！」

必死に逃げるルーファス。なんか肉食獣に言われる草食動物。急に全力で走ろうとしたカーシヤが眩暈を起こした。

そのままユーリの視界も真っ暗に。

恐ろしいくらいの汗を掻きながらユーリは柩から飛び起きた。

「……ハアハア（なに今の……全部夢？）」

目を覚ましたその場所はここかの部屋だった。

見覚えのある部屋。

「ここって……さっきの場所じゃん」

今見ていた夢と同じ場所にいた。

ユーリはよっこらせと柩から這い出た。

ピンクの壁紙、可愛らしいぬいぐるみの群れ、まるで幼いお姫様のような部屋だった。

「(なの)にベッドが枢って」

趣味が破綻している。

ユーリは辺りをじっくり観察した。

「(さ)っきの夢ってなんだったんだろう。偶然見たにしては出来すぎてるし、この部屋に残った思念……だとすると現実にあつたことになるわけで、この部屋はカーシャの部屋？」

ぬいぐるみの中になにかが動いた。

ガサゴソ、ガサゴソ。

「誰かいるの？」

「ウキーツ！」

ぬいぐるみの中から白いサルが飛び出した。

「本物のサル」

グラーシユ山脈にのみ生息する珍獣ホワイキー。専門家やマニアだったら目から鱗のご対面だが、そんな知識ユーリにはなかった。ちなみクラウス国王はマニアらしい。

部屋を飛び出したホワイキーをユーリが追う。

かなりすばしっこいサルだ。まったく追いつけない。

追いかけているうちにこの場所がかなり巨大な城らしいことがわかった。

ホワイキーを追っていると、王の間らしい場所に辿り着いてしまった。

玉座に続くレッドカーペット。その玉座の後ろには巨大な肖

画像が掛けられていた。

「カーシャ？（でも今と雰囲気が違う。この絵のカーシャは金髪で蒼い眼だけど、アタシが知ってるのは黒髪で黒い眼だ）」

気配を感じた。

ユーリが振り向くと物陰にホワイキーがいた。

「ちょっと待っておさるさん！」

待ってくれなかった。

ホワイキーは姿を消してしまったが、その場所には缶詰などの保存食が置かれていた。

「（おさるさんがアタシにくれたのかな？）」

でも缶切りがないので開かない！

「（プルトップ式にしてよ）」

缶詰のほかにも缶ジュースもあった。コンポタージュだ。とりあえずコンポタだけ飲むことにした。

「あゝ、あつたかゝい」

すっかりマツタリしていると、また気配がした。

急いで振り向く。

ホワイキーがこつちを見ている。

「そこで待っておさるさん！」

「ウツキー！」

待ってくれなかった。

ユーリはホワイキーを全速力で追いかけた。

そして、長い長い廊下を走らされてやってきたのは

「この装置は……?」

井戸のような穴。真っ白い光の渦が水のように満たされている。

「(古代の転送装置。いくつもあるけど、どこに通じてるんだろ?)」

井戸のような転送装置は 旅水 と呼ばれ、世界の各地に遺跡として残っている。

その 旅水 がこの部屋にはいくつもあった。まるでモグラ叩きのような光景だ。

いつの間にかホワイキーはユーリの傍らにいた。

「ウッキー!」

「もしかしてここに案内してくれたの?」

「ウッキー!」

「でもどこに通じてるのかわからない。文字が書いてあるんだけど、ぜんぜん知らない文字だし。ヴァツファートのところに行きたいんだけどわかる?」

「ウッキー!」

ホワイキーは 旅水 の一つを選び、その前で呼ぶように飛び跳ねた。

「そこに入ればいいの?」

「ウッキー」

「ありがとね、おさるさん」

ユーリはホワイキーを信じて 旅水 の中に飛び込んだ。

光の玉が飛沫を上げ、光の波紋の中にユーリは消えたのだっ

た。

なんかだとしても晴れ渡っている青空。

白い山脈が地平線の彼方まで連なっている。

山頂は天候もよく、広く平坦な地面にうっすら雪が積もっている程度だった。

遠く王都アステアを見守る白銀のドラゴン。

純白の靈竜ヴァツファート。

龍族の中でも多くの知識と強大な魔力を持つ者たちをグレートドラゴンと云い、時として信仰の対象になることもある。

ヴァツファートもまた、古くからこの地方で信仰され、アステア王国の国旗や国歌にもなっている。

柔らかな羽毛が風に靡いた。

静かに振り返るヴァファート。その鳥のような瞳に少女の姿が映った。

「誰だ？」

魔力のこもった玲瓏な声はまるで女性のようだ。

「ユーリ・シャルル・ドウ・オーデンブルグと申します」

「ハーデスから召喚されたなんちゃってサキュバスの……オカマか」

「……オカマじゃないし！ てか、なんで知ってるの」

「この国で起こったことは風の噂で届く。王都の三丁目に住んでいるトンヌラさんの今夜の晩御飯もわかるぞよ」

そんなのわかる必要ないし！

ヴァッフアートは首を伸ばして顔をユーリに近づけた。

「して、わしになぜ会いに来た？」

「それもわかってるんじゃ？」

「そんなの知るか」

くだらないことばかり風の噂で届くらしい。

「(なんかムカツク) カーシャにとりあえずここに来いと言われて来たのですが？」

「えっ、カーシャちゃんのおつかい？ そうなったらそうって

早く言いなさいよおん」

テ、テンションが急に変わった。

ヴァッフアートはどこからかコタツと出して、ついでに暖かいお茶と菓子まで用意してくれた。

「ここまでの道のり大変だったでしょう、ゆっくり休んでちょうだいねえん」

「あ、はい……どうもありがとうございます(なにこの変わり様、このドラゴン威敵のカケラもない)」

ユーリはお茶菓子のドラ焼きに手をつけた。

「……これって」

稲妻が落ちたような衝撃。

「ももやのドラ焼きですね！」

「さすがオカマ少年だわ、その味がわかるなんてなかなかの通ねえん！」

「オカマオカマって言わないでください、周りにはヒミツにしていますので(こんなドラゴンにケンカ売っても勝てないから売

らないけど)」

「別にオカマでもいいじゃない、アタイだってオカマよおん」

マジですかーっ！

「はっ？」

「アタイがオカマだって言うのはいちようヒミツだけど。まさか王国の守護神とまで言われているアタイがカマだなんて、そんなの知られたら暴動が起きちゃうものね。だから、ここだけのヒ・ミ・ツよおん！」

なんかすっごいヒミツを知ってしまったようです。口が裂けても他言無用ですよ。

急にユーリが真剣な顔をした。

「ところで……」

「ところでえん？」

「このドラ焼きって自分で買ってるんですか？」

疑問だ、かなりの疑問点だ。ももやと言えば王都アステアでも人気の和菓子屋だ。ドデカイ変態ドラゴンが店に現れたら邪魔でしようがない。

果たして真相は！

「お茶のみ友達のローゼンちゃんがいつもおみやげでくれるのよおん」

「ローゼンちゃんって……？」

「クリスチャン・ローゼンクロイツ。聖眼の使い手にして、王都でも三本の指に入る魔導士だけど、ちよっぴり電波なのが玉

にキズねえん」

「……ボクは電波じゃないよ（ふあふあ）」

いつの間にかローゼンクロイツがコタツに入っていた。

ビックリ驚天のユーリ。

「いつの間に」

「オカマ少年のトークあたりから（ふにふに）」

「……マジですかっ！」

ユーリちゃんシヨック！

バレた……ついにバレた……愛しい人にまでヒミツがバレた。

ローゼンクロイツは無関心な感じでポソツと。

「知ってたよ（ふあふあ）」

「なにがですか？」

「男の子なの（ふっ）」

ニヤツとローゼンクロイツはして、すぐに何事もなかったよ

うに無表情に戻った。

ユーリちゃんシヨック！

でも、シヨックも一周してしまおうとどーでもよくなる。

「あはは、知ってたんですかー。ローゼンクロイツ様のことですから、出会ったときから気づいてた感じですねー」

そして、急に真顔でローゼンクロイツに詰め寄った。

「でも絶対に他言無用ですからね！」

「……それはどうか（ふっ）」

邪悪な笑みを浮かべるローゼンクロイツ。すぐにそのまま言葉が続ける。

「……ウソ（ふっ）」

完全にユーリは弄ばれていた。

「いいです、ローゼンクロイツ様に弄ばれるなら本望です。でも他言無用にしてくださいね」

「わかってるよ（ふにふに）」

「ならアタシもローゼンクロイツ様のヒミツを守りますから」

「なに？（ふにゃ）」

「薔薇仮面ってローゼンクロイツ様ですよね？」

「知らない（ふあふあ）」

鉄壁のポーカーフェイス。

ユーリはそっぽを向いてコッソリ舌打ち。

「チツ（でもやっぱり本当にローゼンクロイツ様じゃない可能性もあるけど。髪の色からして違うわけだし）」

自分の顔をじーっと見つめているヴァッフアートのユーリは気づいた。

「（舌打ちしたのバレた？）アタシの顔になにか付いていますか？」

「アナタの顔が彼に似てるのよねえん」

「アタシに似てるということは絶世美形ですね」

ユーリの口は大真面目にそんなことを吐ける口だ。

そして、ヴァッフアートはその名を口にした。

「彼はインキュバスだったわ、アタイに名乗った名前はア
ヤ」

その名を聞いてユーリは言葉を失い、なぜか涙がこぼれそう

になった。

サキュバスとインキュバスは同族である。同じ種族でも女をサキュバス、男をインキュバスと云う。ユーリも正確にはインキュバスである。

インキュバスのアーヤ。そしてユーリに似ている。人違いのはずがなかった。

「お兄様と、お兄様と会ったことがあるんですか！」

「はじめて彼と出逢ったのは数年前だったわね。弟の命を救うために旅をしていると言っていたわ。それでアタイを尋ねて来たのだけれど、残念ながらアタイの手には負えなかったわぁん」

「弟の命……アタシのこと？」

幼少期の記憶。病弱で死の病に苦しんでいた日々。アーヤは旅好きでいつもどこかに出かけていた。

アーヤはたくさんのおみやげを持って帰ってくる。そして、旅の話を楽しそうにしてくれた。だから、幼いユーリは気づいていなかった。

「幼いころのアタシはたしかに死の病にかかっていました。お兄様はアタシの病気を治すために旅をしていたんですね、そんなこと一言も言わなかったのに」

その優しさを知ってユーリは瞳を潤ませ微笑んだ。

しかし、ユーリには疑問があった。

「実は、お兄様は行方不明なんです。そして、いつから行方不明になったのか、アタシの病気がいつ治ったのか、まったく記

憶にないんです。大好きなはずのお兄様の顔すら思えだせなくなってしまったんです。ずっと不思議でしょうがなかった」

それはすべて繋がっているのだろうか？

ヴァツファートは真剣な眼差しで話を聞いていた。そして、ユーリをさらに驚かせる一言を発したのだった。

「彼には先日も逢ったわよ」

涙を振り払いながらユーリは相手に飛び掛る勢いだった。

「先日っていつですか、お兄様はお兄様は元気だったんですか！」

「たしか三日ほど前だったかしらあん？」

「そんな最近ですか、だったらまだこの国いるかもしれないってことですよね？（そんな近くにいたなんて……逢いたい）」

衝撃的だった。

そんなに近くにいなから逢えないなんて……。

ヴァツファートは沈痛そうな顔をしていた。

「元気だったかという問いのだけね……（これは言うべきなのかしら？）」

「お兄様になにかあったんですか！（正直に言わないと又ッコロス）」

「彼は変わり果ててしまっていたわ。別人かと思うほどだったわね」

「どういうことですか、お兄様になにかあったんですか」

「彼の肌は病的なまでに蒼白く、髪も色が抜け落ちて白く、瞳もくすんだ灰色だったわ。そしてアタイも質問したの、貴公の

美しさはいずこへ逝ってしまったのかと。そして彼は笑って
なにも答えてくれなかったわ。ただ『弟の命を救うことができ
ました』とだけ……」

「アタシのせいでは……」

きつとアーヤはユーリを助けるために、「何か」を失ってしま
ったのだろう。

その想いはユーリにとって重たいものだった。大切な人から
「何か」を奪うことは本意ではない。

「(それならアタシが死んだほうがマシだった……)」

いつも自分中心のユーリがそう思えたこと、胸の奥でトキメ
キが輝きはじめていた。

突然、ヴァッフアートが顔を上げた。

「何者じゃ！」

オカマモードではなくマジモード。

次の瞬間、ヴァッフアートの顔面で巨大な爆発が起きた。

硝煙と雪煙に映る二つのシルエット。

「貴様には何の怨みもないが、二五パーセントオフで受けてし
まった依頼だ。覚悟しろ！」

謎のシルエットから大量の暗器が飛び出した。

果たしてこのシルエットの正体はっ！

謎のシルエット番号ジヤドは飛刀、手裏剣、ダイナマイトを
投げた。もちろんすべて通販購入だ。

なぜかヴァッフアートと戦いをおっぱじめってしまったジヤド。

なにがなんだかわからずユーリは呆然としてしまった。

「どういうこと」

「説明しよう！」

と、言ったのはシルエット式号アインだった。

「このセリフ言ってみたかつたんですよねえ！」

説明そっちのけでアインは嬉しそうにはしゃいでいた。

その姿を見てさらにユーリは呆然とした。

「なにその格好？」

アインはいつもと異質な存在になっていた。頑丈そうなプロテクターを装備した姿は、まるでフルアーマーのロボットのようだ。頭についたV字のアンテナがチャームポイントっぽい。

「えと、この格好は父の趣味娯楽なんです。父は幼いころから正義の味方に憧れていたらしくて、ついにこんな物まで自分で造ってわたしに着せる始末で（最初のころは恥ずかしかったんですけど、これも正義のためです！）」

正義の味方のベクトルが特撮ヒーローだ。

そんな話はどーでもよくなって、なんでジャドがヴァッフアールと戦ってるんですか？

アインはハツとして説明をはじめ。

「そうでした、説明しようでした。えと、守秘義務に関わるので詳しくは他言無用なんですけど、とある人の依頼でこのような状況になってしまいました。あ、わたしもシャドウクロウに入っただのよろしくです」

ペコリと頭を下げたアイン。

ぜんぜん具体的に状況がわからない。

わかるのは仕事でヴァツファートと戦つてるということだ。

ここでユーリちゃんからアインちゃんにツツコミ。

「正義の味方が国の守護者と戦つていいわけ？」

「あう……なかなか痛いところを疾風突きですねユーリさん。

でも、正義の味方だつてお金が必要なんです、うちの父が客を選ぶもので……」

背景には家庭事情があるようだ。

ジャドとヴァツファートの戦いは熾烈を極めているように見えるが、実際は一人相撲。

次から次へと隠し持っていた暗器を炸裂させるジャドだが、ヴァツファートは余裕でかわし、吹雪を吐き、めんどくさいときはそっぽを向きながら手で叩く。

「わしに戦いを挑むとは勇者か、それとも救いようのない愚者か」

「さすがは神に近し者と呼ばれる龍族。では、これならどうだ

対戦車ミサイル！」

「愚かな」

冷血なヴァツファートの声が響き。

ミサイルは氷結して砕け散った。

啞然とするジャド。

「今のは魔導か、呪文を唱えずとも強大な魔法を使えるとは……」

現在主流になっている魔法は、古代魔導ライラが派生したレ

イラ・アイラ・マイラである。

ライラとは別名“神々の詩”と呼ばれ、詩を詠むことに魔法を発動させる。つまり詠唱に手間がかかることになるが、威力は絶大であり使える者も限られる。現在では詩の多くが失われている。

その手間を簡略化して、呪文の名を呼ぶことによって発動できるのがレイラとアイラだ。威力はライラに及ばないが、練習さえすれば比較的誰でも使えるようになる。レイラは攻撃系、アイラは補助系、マイラはその他のものに分類される。

そして、レイラ・アイラよりもレベルの低い魔法は、名を呼ぶこともせずに使用することが可能だ。そのほとんどは、指先から出した炎でランプに火をつける、女の子のスカートを風でめくる、実用的ではあるが威力はほとんどないのが一般的だ。

しかし、同じ魔法でも使用者によって威力が異なる。一般的に魔力と云われるが、いかにマナと上手に付き合い、マナを効率よく使用できるか、それが魔力の違いとなる。

つまり長つたらしい説明を踏まえると、ヴァツファートは魔力が高いので、呪文を詠唱しなくてもスゴインです！

戦いに苦戦するジャドの傍らでは三人がコタツで団らんしていた。

ローゼンクロイツは無関心なマイペースなので、すでにコタツでうたた寝をしている。

アインもすっかりお菓子を食べながらマツタリ。

ユーリはローゼンクロイツの寝顔を見ながらニヤニヤ。

「アインちゃん、やっぱりローゼンクロイツ様は寝顔も素敵だよね」

「はい、ローゼン様の趣味は昼寝ですから、歩きながら寝ることも可能です。何度も盗撮させていただきました」

「ケータイがあれば写メ撮るのに。アインちゃんはケータイ持ってないの？」

「ごめんなさい、お金がかかるから持たせてもらえないんです。親にはムリを言って魔導学院に通わせてもらってますので、本当に親不孝な娘でごめんなさい！」

「別に親不孝ではないと思うけれど。ほら、だってクラウス魔導学院と言ったら名門校だよ」

「でも卒業できるか心配なのです。代々ウチは魔導士なんか一人もいませんし、わたしだって普通の小学校を卒業して、それまで使ったこともなかった魔導の勉強をして、滑り込みでクラウス魔導学院に入学できたんです。そう、すべてはローゼン様への愛なのです！」

一般家庭の生まれで、魔導なんか使ったこともなかったアインが、努力と根性で入学できたのは、クラウス魔導学院に語り継がれる奇跡の一つだ。ちなみにルーファスの入学も奇跡とされている。

こんな感じですか？ 団らんモードの三人。

だが、ユーリは重大なことに気づいてしまった。

そうだ、ジャドがヴァツファートと戦っているのだ。

「そうだ、ルーファスどこ行ったの？」

そっちだった。

ローゼンクロイツが寝言でムニヤムニヤ囁く。

「……はぐれたよ（ふにゃふにゃ）」

きつと死んだね！

ユーリはルーファスという存在を根本的になかったことにした。

「あはは、本当にももやのドラ焼きは美味しいよね！」

「あのお店はチョコ苺大福もお勧めですよ」

「今度食べに行こうね」

「はい！」

もはやジャドとヴァツファートのことすら忘却の彼方だった。存在を忘れられてたまるかーっ！

みたいな感じで急にヴァツファートが咆哮をあげて暴れだした。

周りを顧みずに暴れるヴァツファートのせいで、地面が激しく悲鳴をあげ、雪煙が大量に舞い上げられる。

暴れ狂うヴァツファートを見てジャドが一言。

「俺がケツを触ったから怒ったのかっ！」

真顔のジャドにたいしてムクツと起きたローゼンクロイツが否定。

「……違うよ（ふあふあ）。キミは龍族の逆鱗に触れたんだ（ふにふに）」

逆鱗とは龍族の躰を覆う鱗の中でただ一つ逆さに生えた鱗のこと。一般的にはアゴの下にあるが、ヴァツファートはケツの

あたりにあつたらしい。この逆鱗を触れられたドラゴンは我を忘れて暴れ狂うと云う。

まさにこれって急展開！

いきなりピンチが全員に降りかかってしまった。

でも、やっぱり団らんはやめません！

ユーリは冷めた視線をジヤドに送った。

「貴方も子供じゃないんですから、自己責任ですからね。どうぞ独りでヴァツファートの怒りを静めてください」

戦うことを放棄。

ローゼンクロイツとアインも二人でうたた寝をしていた。

ジヤド四面楚歌！

「生憎俺は親から子供として育てられたことはない。本気で戦うしかないようだな」

やっぱり今まで本気じゃなかったのか！

通販攻撃はやっぱり本気じゃなかったのかっ

常に肌を隠していたジヤドが片腕を捲り上げて“蒼い肌”を露にした。

マナフレアがジヤドの周りに発生する。

「今ここに暗黒の守護者イーマの力を解放する 宿え暗黒蛇炎！」

暗黒の炎が蛇のようにジヤドの腕に巻きついた。

さらにジヤドは残る腕をローブに突っ込み横笛を取り出した。

これはまさか……蛇+笛=蛇遣いだ！

笛がメロディーを奏ではじめると、蛇炎は激しく燃え上がり

ながらヴァツファートを呑み込もうとした。

ヴァツファートの口が大きく開けられ、猛烈な吹雪が吐き出される。

すべてを焼き尽くす劫火とすべてを凍らせる吹雪が激突した。せめぎ合う二つの力。急激な気圧変化が起き、竜巻が巻き上げた雪は瞬時に蒸発して空気が爆発が起きた。

さらに強い風がすべてを薙ぎ払う。

轟々と鼓膜を揺らす風の叫び。

晴れ渡る世界の下でジャドとヴァツファートは無言で対峙した。

今の攻撃は五分と五分。しかし、まだ戦いははじまったばかりだった。

さらなる大技を繰り出そうとジャドは笛を構え。

「笛がない」

さっきの爆風で横笛をなくしてしまったのだ。

「しかし、常に冷戦沈着、奥の手は持てるだけ持つのがプロ！」

ジャドは縦笛を取り出した。

が、ヴァツファートがフツツと息を吐くと、縦笛が飛んでいってしまった。

「クソツ、なかなかやるな。だが俺は暗殺一家の末っ子、勝つための手段ならば卑怯なくらい持っている！」

ジャドはハーモニカを装備した。スタンド付きなので、身体と固定して手放しできる優れたもの、通販の商品だ！

まるでハエでも叩くようにヴァッファートはジャドを払った。
パシッ！

「あれ……っ」

ジャドは雪山を転落して行った。

ご愁傷様です

その光景をコタツの中にもぐって見守っていたユーリ。

「はじめて魔法を使ったところ見たと思ったら、あっさりやられちゃった」

ジャドは戦闘力ではなく性格に欠陥があったようだ。

まだまだご乱心のヴァッファート。

果たしてこのオカマドラゴンを鎮めることはできるのか！

そして、ついにローゼンクロイツがコタツから覚醒した。

「仕方ないね、ボクがやるよ」

目を疑うほどのマナフレアがローゼンクロイツの体を包み込む。

変化が起ころうとしていた。

ローゼンクロイツのエメラルドグリーンの瞳に六芒星が映る。

ユーリは自分の目を疑った。

「まさか……その姿は！」

いったいローゼンクロイツになにが起こったのかわ

風に靡いて逆立つ深紅の髪。

薔薇が咲き誇るような真紅のドレス。

白銀の雪に咲いた一輪の華　薔薇の君ローゼンクロイツ。

その姿はまさしく薔薇仮面だった。しかも今日は素顔の出血大サービスだ。

ユーリは眼を輝かせて歓喜した。

「やっぱり薔薇仮面はローゼンクロイツ様だったのですね！」

すぐそばにいたアインもアツサリ認めた。

「そうですよ」

「えっ、アインちゃんも知ってたの？」

「はい、ローゼンクロイツ様とわたしのヒミツだったんですけど、これからはユーリさんもヒミツを共有する仲間ですね！」

「ヒミツを共有するってなんか嬉しいかも」

顔をニヤニヤさせるユーリはローゼンクロイツに熱視線を贈った。

「ローゼンクロイツ様、がんばってくださいさあい！」

「がんばらないよ（ふあふあ）」

そんな感じがアンタらしいです！

暴れ狂うヴァッフアートと薔薇の君ローゼンクロイツの戦いがはじまるうとしていた。

と、その前にアインが口を挟む。

「説明しよう！ 紅薔薇モードになったローゼン様は、髪モードレスも薔薇色に染まり、普段の三倍の性能を発揮できるのです！」

ローゼンクロイツが雪の上を滑るように駆けた。

ヴァッフアートのプレスがローゼンクロイツを呑み込まんとする。

持っていた日傘を開いて吹雪を防いだローゼンクロイツがすかさず呪文を唱える。

「マギ・フラッシュユ！」

眼を潰すほどの閃光が辺りを呑み込んだ。

白く塗りつぶされた世界でさらにローゼンクロイツの声が響く。

「ライトチェーン！」

拘束魔法ライトチェーン。手から光の鎖を放って対象物を捕捉するアイラだ。

色の戻った世界でローゼンクロイツは光の鎖を握っていた。

その先には全身を固定されたヴァッフアートの姿。

地獄の底から沸き上がるような咆哮が響く。

鎖を解き放とう暴れ狂うヴァッフアート。その巨大な体躯の力を小柄なローゼンクロイツが抑えていた。

涼しい顔して片手でローゼンクロイツは鎖を握る。実は怪力の持ち主さんだったに違いない！

ローゼンクロイツがボソツと呟く。

「……ダメだね（ふにふに）」

刹那、ヴァッフアートを包んでいた鎖が砕け散って光の粒が舞った。

鋭い爪がローゼンクイツに振り下ろされる。

まったく動じないローゼンクロイツは逃げも隠れもしない。

「ライラライラ、宿れ光よライトセイバー！（ふにふに）」
折りたたまれていた日傘に光が宿り、それは闇を斬り裂く

光の剣 と化した。

光の剣 が爪を受けた！

力のこもったヴァツファートの腕が震える。

そして、ローゼンクロイツの口元が微笑んだ。

「……キミはキレてるほうが弱い（ふっ）」

爪を薙ぎ払いローゼンクロイツがヴァツファートの腕を駆け登った。

ローゼンクロイツはヴァツファートの臀部まで辿り着き、そこで 光の剣 を突き刺そうとした。

「お灸を据えなきゃね、怒りを静めるツボだよ（ふあふあ）」

光の剣 が振り下ろされる瞬間、ローゼンクロイツがパタツと倒れた。

思わずユーリは声をあげる。

「ローゼンクロイツ様」

そして、アインが自信満々に説明する。

「説明しよう！ 紅薔薇モードは体内マナと体力を多く消費するため、いきなり眠くなっちゃうのです。しかもローゼン様は寒いのが苦手ですから、いつも以上に消耗が激しかったんですよね！」

つまり昼寝しちゃったのだ。

ニッコリ笑顔のユーリちゃん。

「あはは、それってアタシたちのピンチを意味してるんじゃないの？（ヤバイ、とてつもなくヤバイ。戦力の二人がやられてしまった今、戦えるのは……）」

ユーリはアインの片をボンと叩いた。

「アインちゃんがんばれ、応援してるぞ」

「がんばります！」

あっさりノツてくれて助かります

フルアーマー装備のアインはヴァツファートに向かって腕を

構えた。

「ロケットパンチ！」

うはっ、手が飛んだ

超高速でぶっ飛んだパンチはヴァツファートの体にボンッと

当たって、ストーンと地面に落ちた。

すげー無傷！

どー見てもノーダメージ！

飛ばしたパンチの下から本当の手を出してアインは頭を掻いた。
た。

「えへへ、わたしじゃ力不足のようです。正義の魂ソウルが足らなくてごめんなさい！」

頭を下げたアインに問答無用の不意打ち。

ヴァツファートの手がパシッとアインを叩いた。

「あれ〜〜っ！」

アインは崖下に転落した。

ご愁傷様です

ユーリは胸の前で拳を強く握り締めた。

「みんなの死はムダにしないから！」

ウソ泣きをして逃走しようとするユーリ。

が、いつの間にか周りは氷の壁によって囲まれてしまっていた。絶対に逃がす気ゼロだ。

「あはは、どうするアタシ？」

こうなったらこれしかない。

ユーリは指を組んで天に祈りを捧げた。

「オーデンブルグ家の家訓、最後はとにかく神頼み！（嗚呼、お兄様……どうかアタシをお救いください）」

祈りは天に届いたのか、奇跡が起きた。

東の空に輝く一点の光。

それはだんだん大きくなって隕石のごとくヴァツファートの顔面に激突。

鼻血ブツファット！

雪を真っ赤にしながらヴァツファートはその巨体を横転させた。

そして、こっちも雪にボトボト鼻血を垂らしていた。

「死ぬ、死ぬ、死ぬかと思っただっ」

顔面蒼白のルーファスだった。

ちよっぴりユーリはムツとしていた。

「遅いですよ役立たず！ さっさとこの事態を打開してください、そうしたら許してあげます（ピンチに現れるなんて……ルーファスにときめいた自分が悔しい）」

「えっ、事態ってどのような感じの事態なのかあ？」

「そこにいるヴァツファートの怒りを静めてください、役立たずのへっぴこ魔導士」

そこにいると言われてルーファスははじめて気づいたようだ。「うわっ！（なんかデカイ毛玉が倒れてる）」

腰を抜かしてルーファスは尻餅をついた。

でも、よく見るとヴァツファートはピクリとも動かない。

ルーファスはそ〜っと近づいて観察した。

「気絶してるみたいだけど。なんか一件落着してるみたいだよ？ それよりも聞いてよ、私はあねから大変だったんだから！」

あねからとは、つまり雪崩に吞まれてみんなとはぐれてしまったあとだ。

ルーファスは自らの恐怖体験を語りはじめた。

「実はね気が付いたら雪の中に埋もれていきなり生死の境を彷徨って、そんな私を助けてくれたのはオオカミだったんだ。でもヤツらは私を食料にするために掘り起こしたらしくって、私はそりやもう必死で逃げたよ。お尻に名誉の負傷をしたりしてね、傷跡見るかい？」

「見ません！」

「それから私はどうかオオカミの群れから逃げただけで、力尽きて倒れてしまったんだ。そしたら血の匂いを嗅ぎつけてシロクマがやって来てね、もう少しで食べられそうになったんだ。そんな私を助けてくれたのはシロクマよりも大きな怪鳥だったんだ。どうやらその怪鳥は母親だったらしく、子供が待つ巢まで連れて行かれちゃってね。必死で小鳥と戦ったよ。小鳥って言っても私と同じくらいあるんだけどね。そのとき一死を

報いて羽根を一本抜いてやったんだ、見るかい？」

「見ねえーよ！」

「それでね、どうにか巢からは逃げ出したというか転落したんだけどさ、落ちた場所が地獄の底まで続いてそうなクレバスでさ、しかもその中には未知の触手が繁殖してて、体の自由は奪われるし消化液で溶かされそうになるし、本当に大変だったんだ。ほら、魔導衣のことが溶けてるからよく見てよ？」

「知るかポケツ！」

「ついに私の人生もここで終わるんだと思ったとき、謎の人影が触手をバツバツ倒して私を救ってくれたんだ。そして、お礼も言う前にその人影は姿を消してしまっただけど……あの後姿はサルみたいだったんだよね。きつと見間違いだと思うけど」

「そんな眼なんて腐ってしまえ！」

「で、今に至るわけさ」

「一番重要な話が抜けてます！」

なんで空から降ってきたのか、それは闇に葬られたのだった。そんな話に夢中になっていたせいで、二人はヴァツファートが静かに起き上がったことに気づいていなかった。

その鋭い爪は静かに振り下ろされた。

大きく眼を見開いたユーリ。

「そんな……」

ユーリの手は黒い血で濡れていた。

ルーファスは優しく微笑んで、そのままユーリにもたれかか

って二人は雪の上に倒れてしまった。

背中を抉る深い傷。

ルーファスはユーリをかばって傷を負ったのだ。

「イヤー——ッ」

ユーリの叫びが木霊した。

大粒の涙を流してユーリは慟哭した。

心の底から震える身体。

瞼の瞑ると浮かび上がる残像。それはルーファスが最期に浮かべた微笑。その微笑にユーリは兄の温もりを重ね合わせた。

マナフレアがユーリを包む。

ゆらりとユーリは立ち上がった。

「許さないんだから、絶対に許さないんだから……」

涙を振り払ったユーリを中心に突風が巻き上がった。

ヴァッフアートが牙を見せて口を開いた。

「メギ・ド・ホワイトブレス！」

今までの増して強烈な吹雪を吐いたヴァッフアート。それは最上級形の攻撃魔法。

ユーリはそれを向かい討った。

「ラヴソウルヴァニッシュ！」

憎しみは誰も幸せにできないからね。

聖母の胸に抱かれるような温かな光がすべてを呑み込んだ。

ユーリが放ったのは攻撃魔法レイラではなかった。他を傷つけるものすべてを包み込む優しさ。

そして、ヴァッフアートからも怒りが昇華され、柔和な顔つ

きになった。

「あらあん、なにがあつたのかしらあん？」

まったく記憶にございません状態。

ユーリの全身からからふつと力が抜け、膝から崩れて雪の上
にへたり込んだ。

「……ルーファス……他人を庇って死ぬなんて……バカだよ」

もういくら呼んでもルーファスは帰って……。

「……勝手に殺さないでよ……早く治療してくれないかな……
本当に死ぬんだけど」

ルーファスは雪に顔を突っ込んだまま虫の息だった。

「ルーファス生きてたの！」

「だから……早く……治療を……」

ユーリの瞳が輝いた。

「待って、今……ラヴヒール！」

声が木霊したただだった。

もう一回！

「ラヴヒール！」

声がむなしく木霊したただだった。

めげずにもう一回！

「ラヴヒール、ピコ・ラヴヒール、ラギ・ラヴヒール、マギ・

ラヴヒール、メギ・ラヴヒール！」

しゅん。

ニッコリ笑顔のユーリちゃん。

「あはは、また魔法使えなくなっちゃった」

バタツとルーファスは力尽きた。

さよならルーちゃん、君の勇姿は忘れないからあ！

このまま放置すると本当にご臨終なので、ヴァツファートが救いの手を差し伸べた。

「そんな傷、ツバでもかけときゃ治るわよおん」

ドバツとヴァツファートはツバをルーファスに吐きかけた。全身ベトベトです。

しかし、本当に傷口が塞がってるじゃないですかっ！

実は霊竜ヴァツファートの体液には傷を癒す力があるのだ。

ユーリはほっと胸を撫で下ろしながらも、冷淡の顔をしてルーファスの腹を蹴っ飛ばした。

「ほら、傷も治ったんですからさっさと立ってください」

「病人を少しは労わるって気持ちを持つとっよ」

「アタシに口答えですか、いいご身分ですね……ヌッコロシマすよ？」

「ごめんなさい、すぐに立ち上がります！（怖い、このユーリ怖いよお）」

ルーファスはシャキッと立ち上がった。

それとほぼ同時に雪に中から水色の影がムクつと立ち上がった。

「ふにゃ〜、よく寝た（ふにゃふにゃ）」

今頃目覚めたローゼンクロイツだった。

ユーリはローゼンクロイツに抱きつこうと駆け寄った。

そのとき！

「は、は……はくしゅん！（ふにゃ）」
もともと凍った大地なのに、一瞬にしてもっと身も心も凍り
ついてしまった。

ネコミミ！

ふにふにしっぱ！

にゃんにゃんローゼンクロイツ！

「にゃー！」

猫還り してしまったローゼンクロイツの体から、ねこし
ゃんのぬいぐるみが次々と放出される。

ルーファスが叫ぶ。

「あれは ねこしゃん大行進 だ！」

フィーバー状態のねこしゃんは、物にぶつかると『にゃ〜
ん』と鳴いて爆発を起こす。つまり、一匹が爆発と連鎖なんか
しちやったりして、あつという間に大惨事。

周りを囲っていた氷の壁が崩壊する。

次々と巻き起こる大爆発。

雪煙が視界を完全に閉ざした。

そして、耳を澄ますと聴こえてくる豪雪が崩れる音。

ユーリの足元が沈んだ。

「あはは、なんかヤバそうですね！」

ドゴゴゴゴゴオオオオオ！！

嗚呼、山頂崩壊

「大丈夫か小娘ッ！」

謎の影が土石流に吞まれようとしていたユーリをお姫様抱っ

こした。

ユーリの瞳に映る黒頭巾。

「セバスちゃん！」

「待タセタナ小娘！」

「来るの遅いシネ！（ありがとうセバスちゃん）」

「……あっ」

なんか素の声が漏れた。

見事に足を踏み外した黒子。

黒子はユーリを安全な場所に投げ飛ばし、自分は雪崩に流されてしまった。

「小娘受け取れ！」

ユーリに文明の利器が投げ渡された。

「アタシのケータイ！」

そして、黒子とセバス人形は雪崩の中に消えたのだった。

涙をかみ締めるユーリ。

「……ケータイじゃなくて通帳投げてよ。この役立たず！」

その声はどこまでもどこまでも山脈にやまびこしたのだった。

まったりお茶を飲んでくつろいでいるカーシャの目の前に、テーブルが崩壊する勢いでクーラーボックスが叩き置かれた。

「シネ！」

叩き置いた張本人の第一声はそれだった。

カーシャはめんどさそうにユーリに目を向けた。

「妾に向かつてシネとはいいい度胸をしておるな」

「シネ！」

それ以外の言葉を忘れてしまったようだった。

カーシヤの目の前には白いマスクした一団がずらりと並んでいた。被害者の会のみなさんだ。

どっかの誰かさんのくだらないおつかいのせいで、み〜んな風邪をひいてしまったのだ。

ユーリはカーシヤの胸倉を掴もうとしたが、爆乳が眼に入っ
て手を引つ込めた。でも怒りは治まっていない。

「コレのせいで、どれだけ死に掛けたと思ってるんですか。サ
キユバスの力を取り戻すなんて大嘘じゃないですか！（コロス、
今日こそは絶対にヌツコロス）」

「そんなこと言ったか……まったく記憶にないな（認めたが最
後、ウソは死ぬまでつき続ける……ふふっ）」

「このアマがつ！」

ブチ切れたユーリがカーシヤを殺そうとしたのを、ジヤドが
そつと止めた。

「やめろ……俺が殺る」

おまえがやるんかい！

血の雨が降る寸前、ルーファスとアインが慌てて止めに入っ
た。

「待った、ちよつと待った。暴力沙汰はよくないよ、平和的に
解決しよう！」

「そうですね、みんな無事に帰還できたんですから。それにジ
ヤドさん、わたしたちは報酬をもらえるから別に怒らなくても

「お」

ユーリはルーファスの胸倉を掴み、ジャドはアインの胸倉を掴んだ。

「「よくねえーよ！」」

ステレオ再生。

仲間割れをしている四人をほっといて、ウキウキ気分でカーシヤはクーラーボックスをオープン！

「なんじゃこりゃー！」

カーシヤの眼に飛び込んできた無残な光景。

ユーリはニヤツと笑った。

「お気に召しましたでしょうかカーシヤ先生」

「なんだこれは、溶けてしまっているではないかっ！」

「全部ヴァッフアートから聞きましたよ……カキ氷ですってね！」

「妾の妾のカキ氷が……（カーシヤちゃんちよっぴり傷心、ふっ）」

クーラーボックスの中に入っていたのは溶けた氷だった。

どうやらカーシヤは無性にカキ氷が食べたくなって、下々の者どもに極上の氷を採りに行かせたらしい。

しかもあの場所は危険だったりするので、保険かけて複数に採りに行かせて『一匹くらい死んでもいいか』みたいな打算をしていたに違いない。

ちなみにジャドとアインは依頼内容をちよっぴり勘違いして、『ヴァッフアートから取って来い』というカーシヤの発

言を、ヴァツファートを倒して財宝かなにかを奪って来るのか
と想っていたらしい。

とにかくカーシャの野望は見事に打ち砕かれたのだった。

マスク軍団は卑劣な魔女を討ち果たしたのだ。

だが。

「ルーファス妾に謝れ！」

カーシャに言われてルーファスは土下座した。

「ごめんなさい、私は止めたんだよ嫌がらせはよくないって。

ごめんなさい、ごめんなさい、どうか許してくださいカーシャ
様！」

この主従関係だけは絶対のようだ。

呆れてしまったユーリ。

「もう行こう（なんか百年の恋も冷める感じ）」

ジャドもすっかり怒りが冷めてしまった。主にルーファスの
情けない姿を見て。

「そうだな。では……キャベツ！」

いきなりジャドはカーシャにキャベツを投げつけた。

「妾にキャベツを投げつけおつて、なにをするのだ！」

「俺の国の風習ですよ。とりあえずうつぶんが溜まったときは
キャベツを投げつけるんです」

「そーなんだ。と思った全員はキャベツを手にとってカーシャ
に投げつけた。」

「……キャベツ！」

キャベツまみれになったカーシャが喚く。

「おのれ許さんぞ（食べ物粗末するともつたいたいオバケが出るのだぞ、妾は信じてないがな……ふふっ）」

もはや誰も聞く耳を持っていない。

ルーファスは土下座したままなので、キャベツの怨みは彼の土下座で許してもらってことで

さーつと、そろそろ用も済んだので部屋を出ようとしたとき、今までふにふにしていたローゼンクロイツに異変が！

「はくしゅん！（にゃ）」

青ざめた四人はカーシャとローゼンクロイツを残して部屋の外に飛び出した。

ジャドが日曜大工セットでドアに木を打ちつけて塞いだ。

「これはサービスだ」

「ジャド、グツジョブ！」

ユーリは爽やか笑顔。

その笑顔とは対照的にドアの向うからは悲痛な叫び声が聞こえていた。

「いやああああん！」

みんなそろって聞こえないフリ。

ユーリは少しはしゃいだようすでみんなの顔を見つめた。

「ねえ、今からスイーツ食べに行きませんか、ビビちゃんも誘って」

スイーツと聞きつけてビビがユーリの目の前によきつと現れた。

「こんにちわんわん！ あたしのこと呼んだあ？」

「はい、ビビちゃんも一緒にスイーツ食べに行きましょう。もちろんルーファスのおごりで」

「私のおごりなの？」

声は不満そうだが、顔はニツコリ笑顔だった。

アインも瞳をキラキラ。

「わたしもご馳走になってよろしいんですか！」

ユーリは大きくうなずいた。

「うん、あとでローゼンクロイツ様も呼ぼうね。ジャドも来るでしょ？」

「いや、俺は仕事がある。では、さらばだ！」

いつものようにハトやら紙ふぶきを撒き散らしてジャドは姿を消した。

ユーリはちょっと残念そうな顔をしたが、すぐに笑顔でビビとアインの腕を掴んで引っ張った。

「早く行きましょう。ところでビビちゃんのケータイの番号教えてくれませんか？」

「あたしケータイ持ってないんだ。持ってる親が二十四時間連絡してくるから」

「アインは持ってないんだよね？」

「はい、ごめんなさいです」

「じゃあ……ルーファスの聞いてあげる」

「私も持ってないよ。めんどくさいし、周りも持ってない人多いから。ローゼンクロイツも持ってないしね」

「あはは、そーなんですかー」

笑いながらユーリはケータイを真っ二つにした。

前の友達のメモリーは諸事情から全部デリートしていた。だからケータイのメモリーはほとんど空だった。だから新しい友達を登録しようと思っていたのに……。

みんな持っていないだってさ！

ここでユーリはハツとした。

「……しまったセバスちゃんとも連絡取れなくなった」

さよならケータイ。

さよならセバスちゃん。

やっぱり二人はいつまで経っても逢えない運命なのでした。でも、今のユーリは心の底から笑っていた。

「（嗚呼、お兄様。ユーリはとっても幸せです、新しい友達もいるし、新しい環境にも慣れてきました）」

新しい世界に羽ばたいたユーリには輝く未来が待っている。

ユーリの胸に宿った気持ちが無未来を切り開くのだ。

「またサキュバスの力も失っちゃったけど、愛しい人たちのために力を使えたら、人は決して後悔なんてしませんよね。あのとき使った力が最後だったとしても、アタシは後悔しませんから、だってルーファスも助かったんだし。あ、これは浮気じゃありませんからね、アタシが世界で一番愛してるのはお兄様ですから」

今日も世界が愛に満ち溢れ、みんなが幸せに暮らせますように

おしまい